



姫騎士王女、
異民族の王に
愛される。

本文
77P

ベルツエナ歴二三七年
ルムリア中央王国

呼び出された
理由は
分かってい
るだろうな

ブランカ

女の身で
ありながら

数々の武功を
立ててくれた
貴様の為に

この父が
良い縁談を
持ってきて
やったぞ



お前の夫となる
人物は

かねてより
融和を願っていた
東方平原の騎馬族の
王だ

かの地
にも

我が国の
威信が
届くであろう

王女たる
お前が
嫁ぐことで

*Eastern
Plains*

Lumria

お前は

嗚呼……
あのような
遠方に……

寂しくなるな
ブランカ

なぜか
天逝する
弟妹の中で

生き残ってくれた
たった一人の
妹だというのに……

……

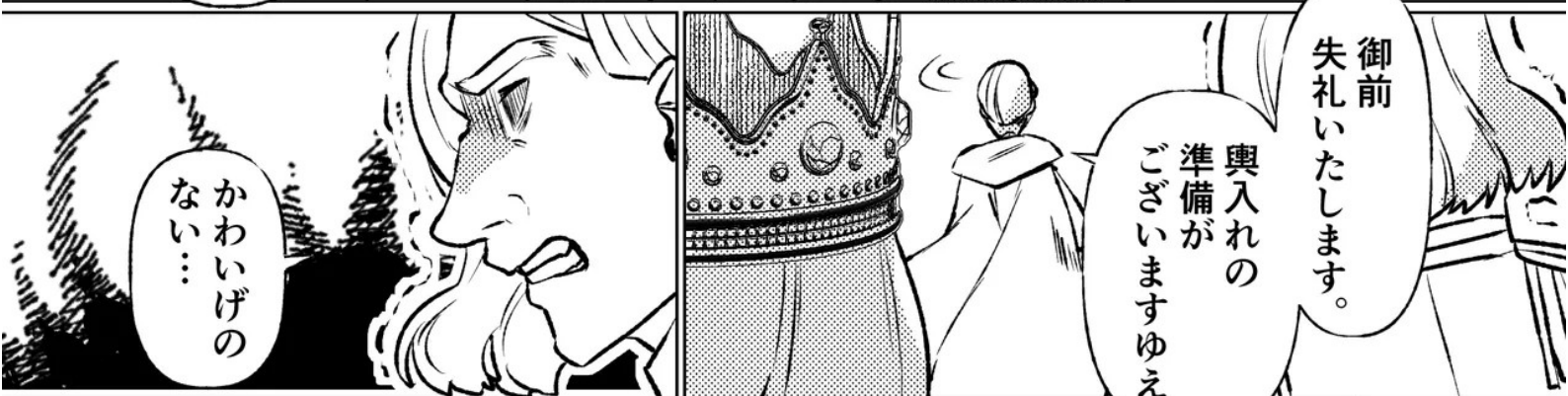


……
拝命承りました。
父上、兄上。

つきましては

我が亡き母の祖国
北方への
兄上の軍派遣を
中止していただく件

何卒
お忘れなきよう
願います。



御前
失礼いたします。

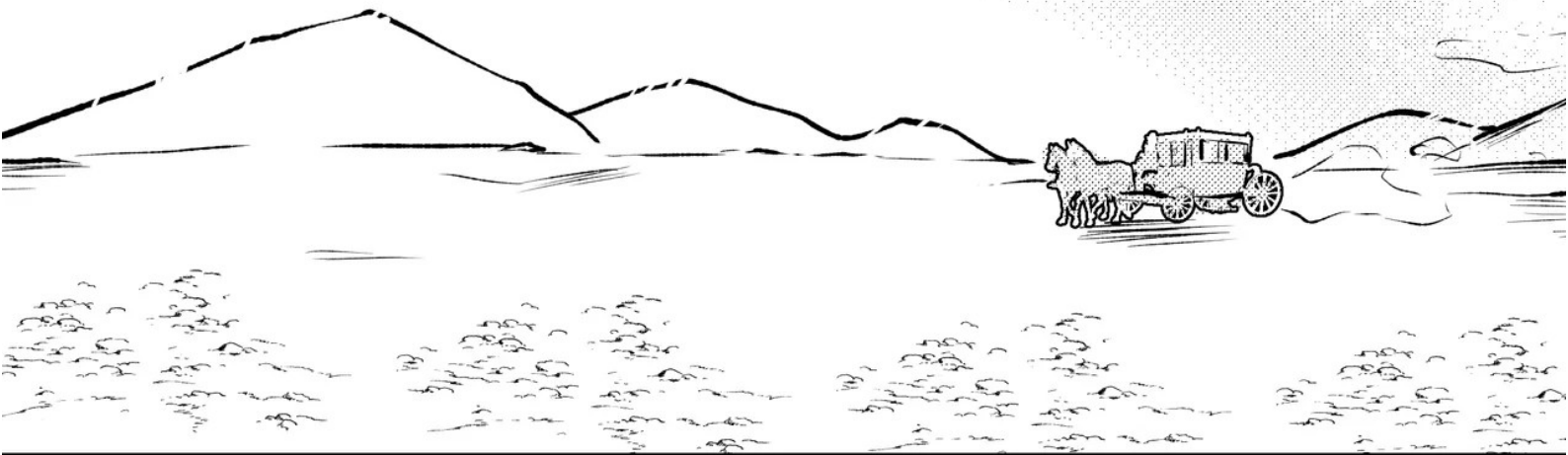
輿入れの
準備が
ございますゆえ

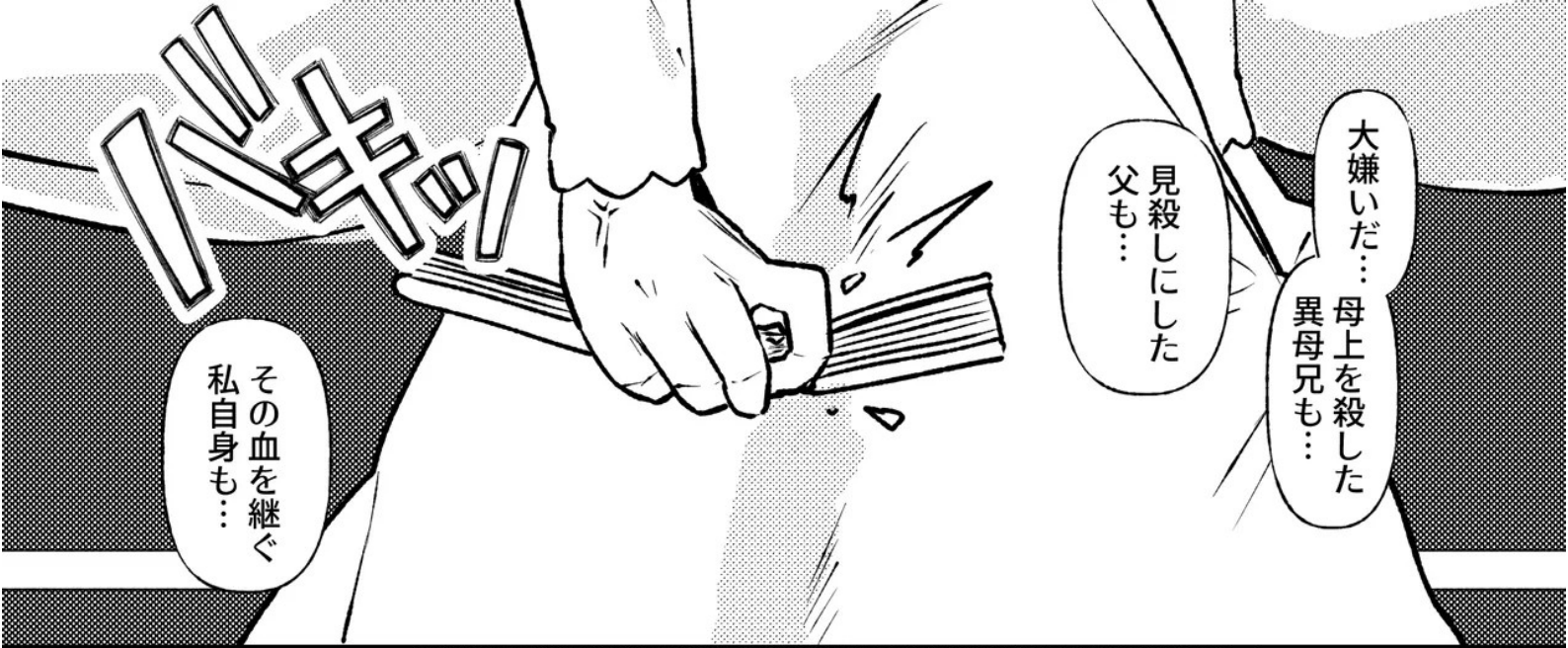
かわいげの
ない……



貴様の如き
男女には
馬臭い蛮族の
慰み者が似合いだ

せいぜい
立派な馬の子でも
孕ませてもらおうのだな





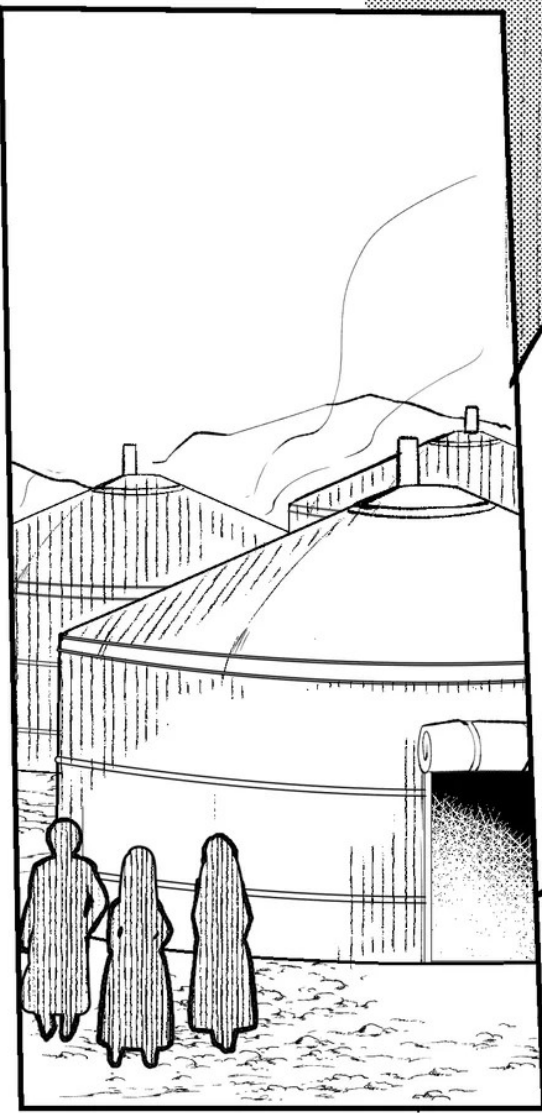
その血を継ぐ
私自身も…

見殺しにした
父も…

大嫌いだ…
母上を殺した
異母兄も…

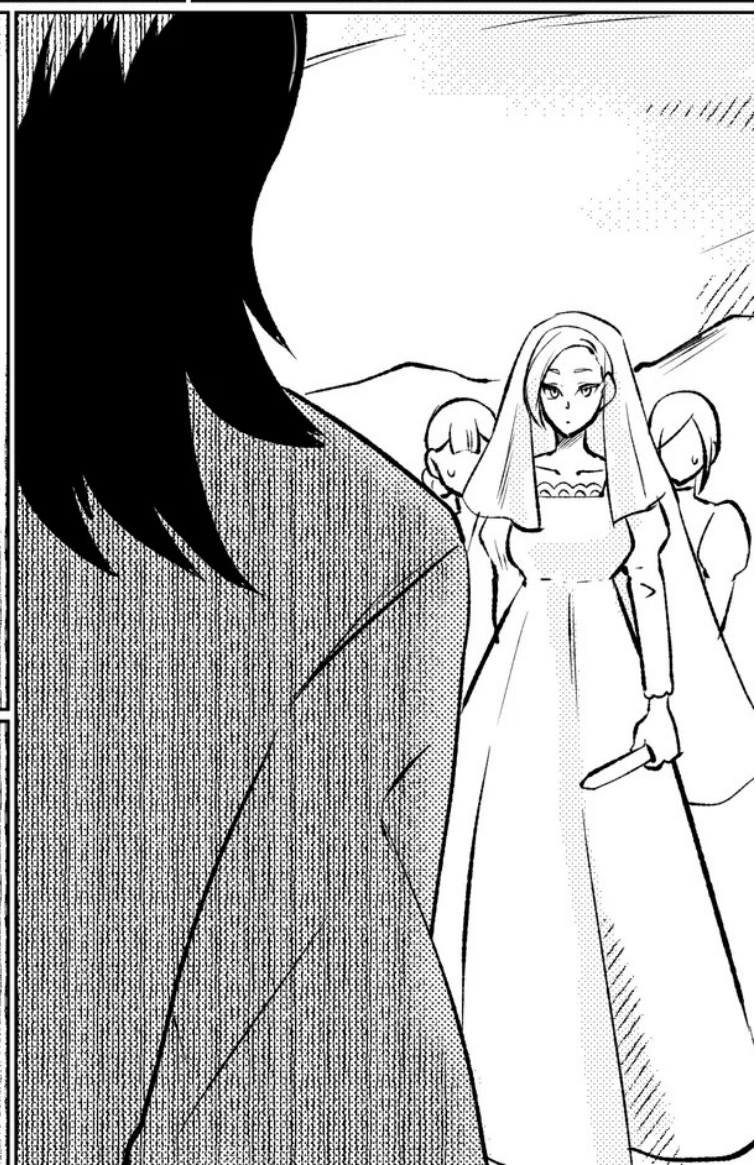
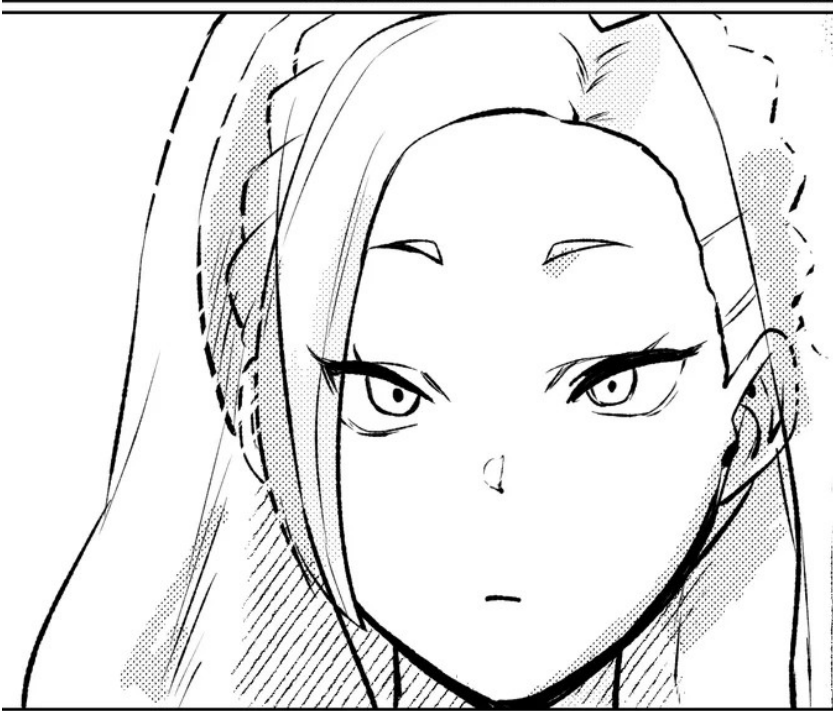
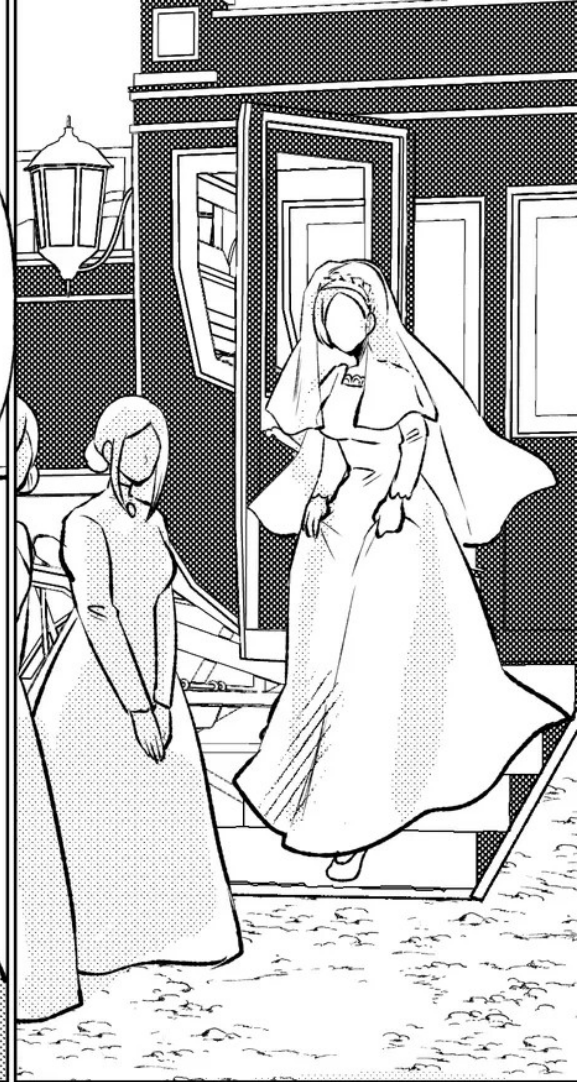


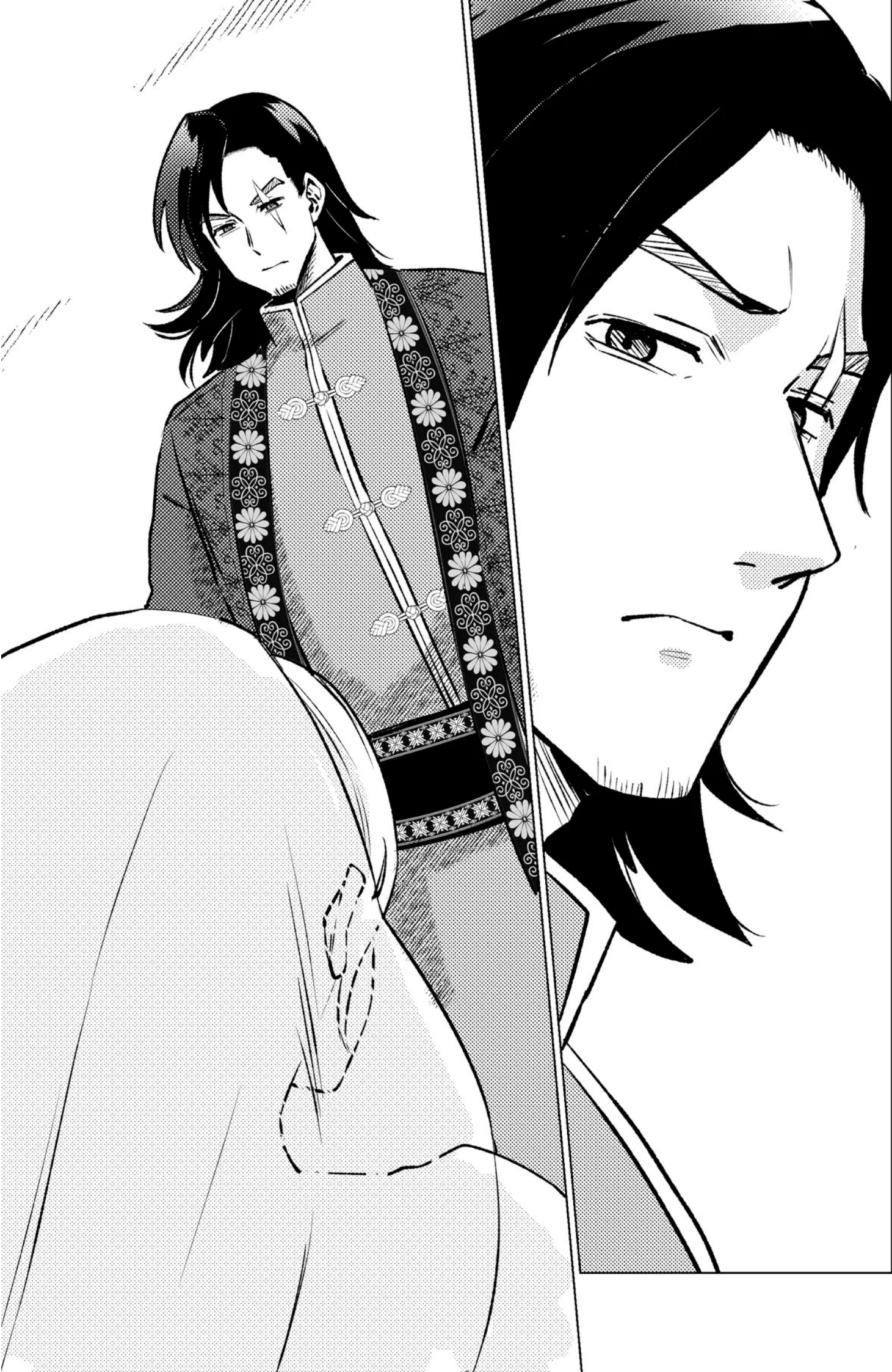
いずれ
道連れに…
共に地獄に
送ってやる…

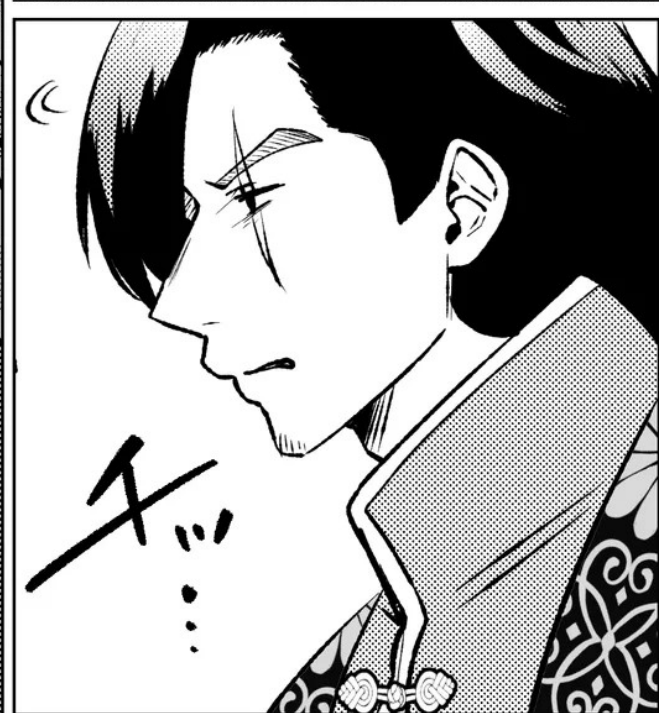
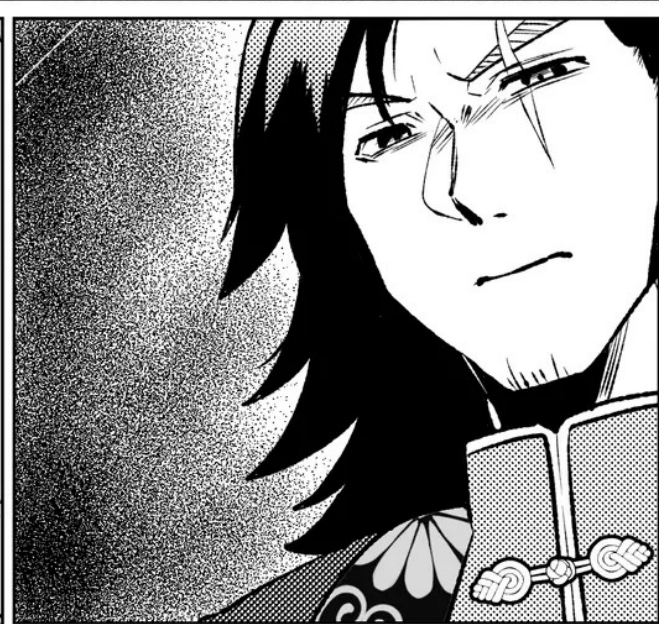
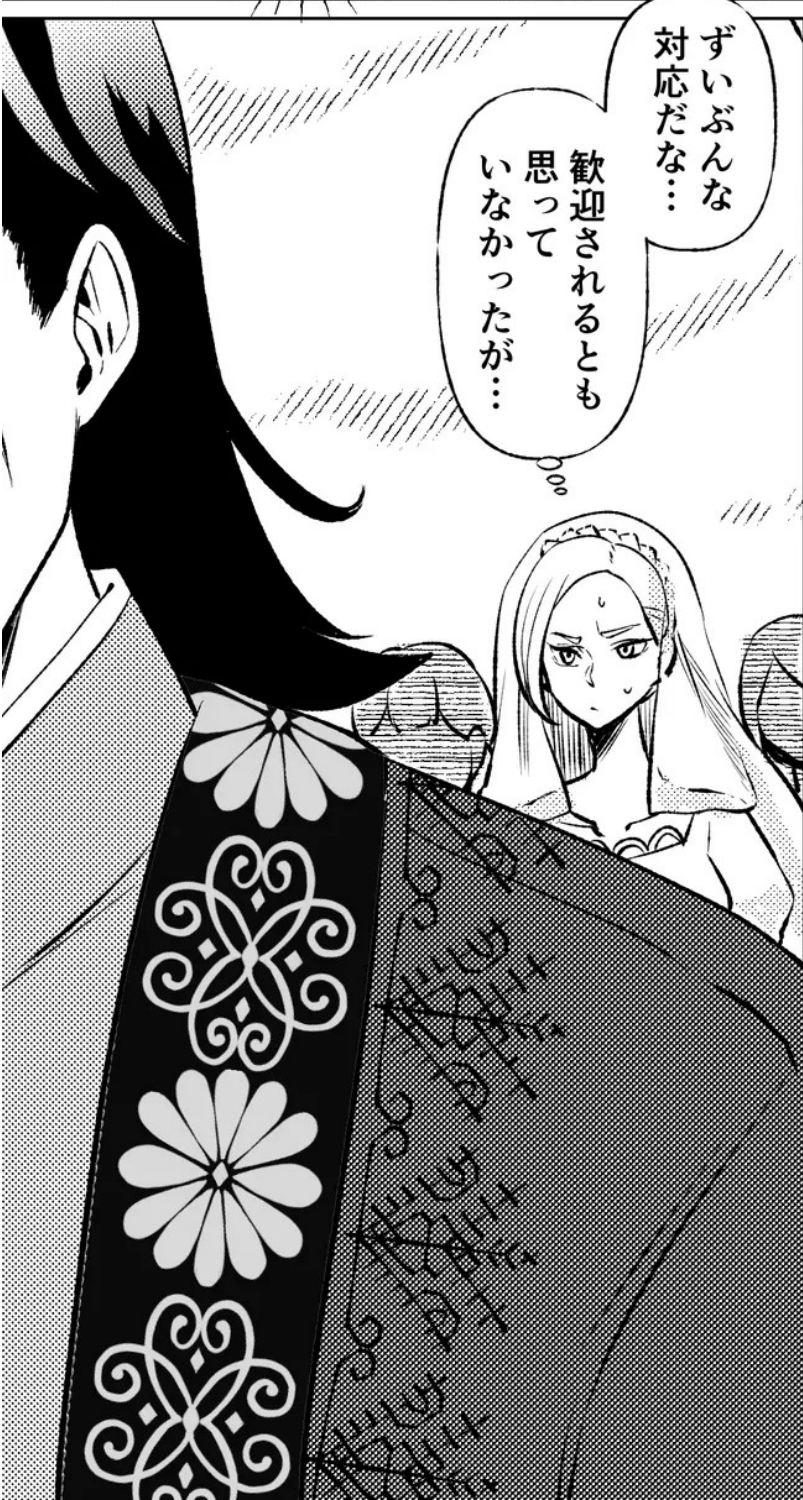
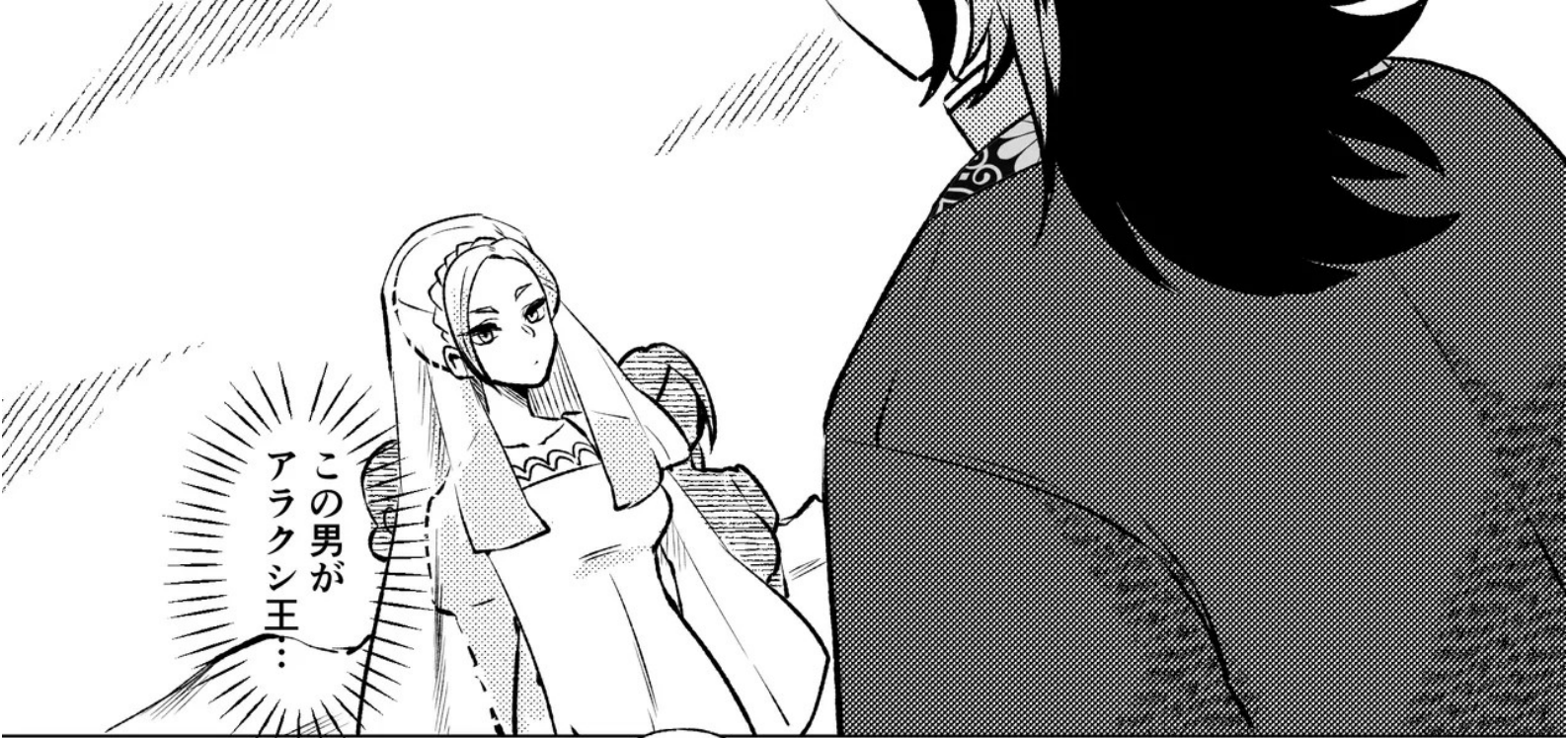


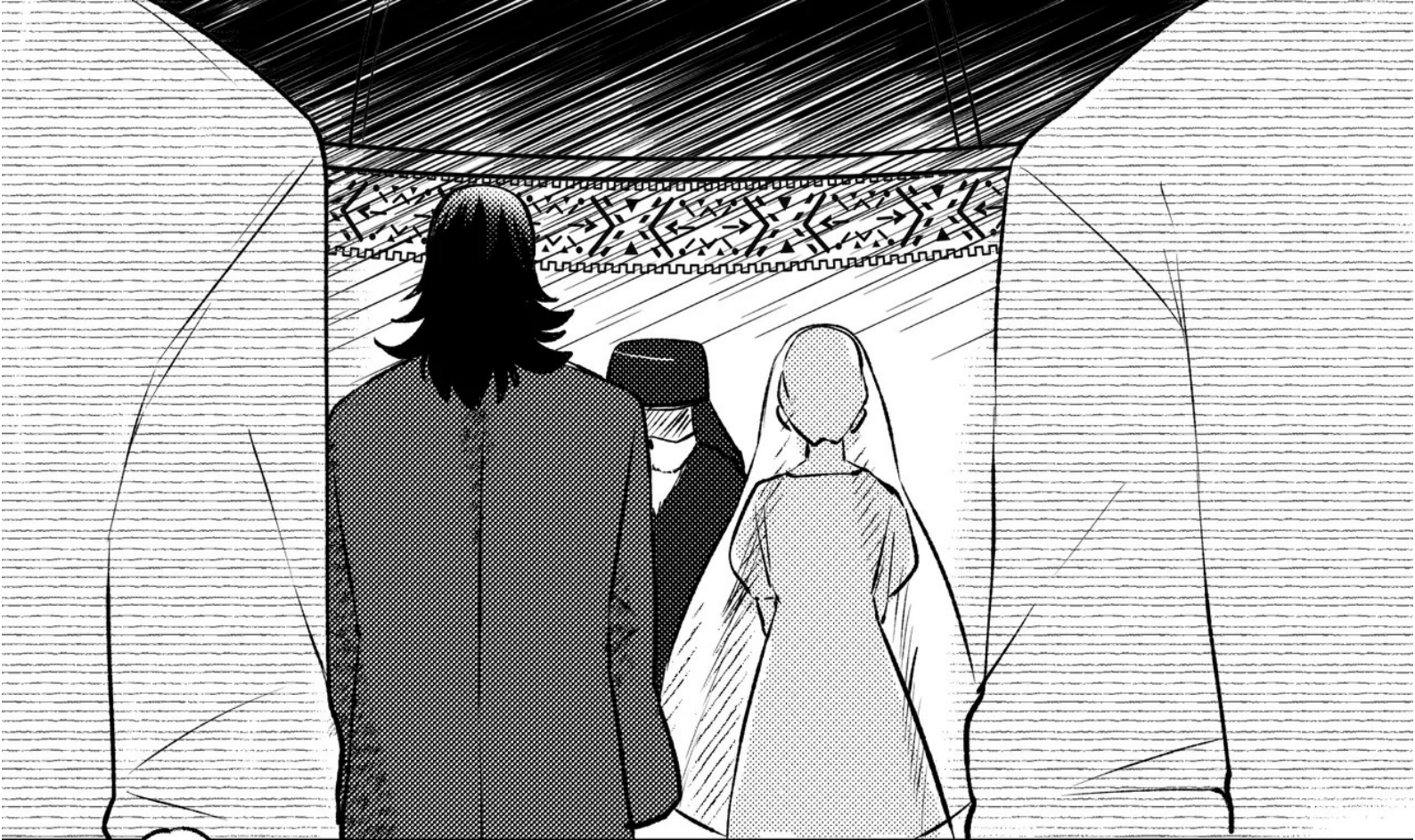


このような
羊臭い場所…
気分が
悪くなります





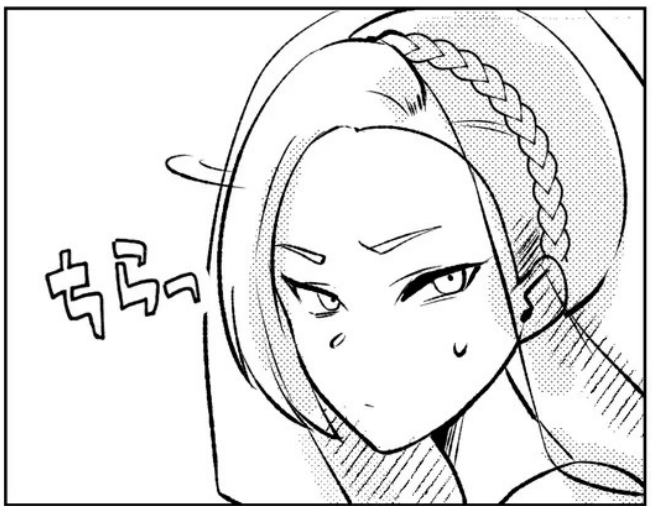




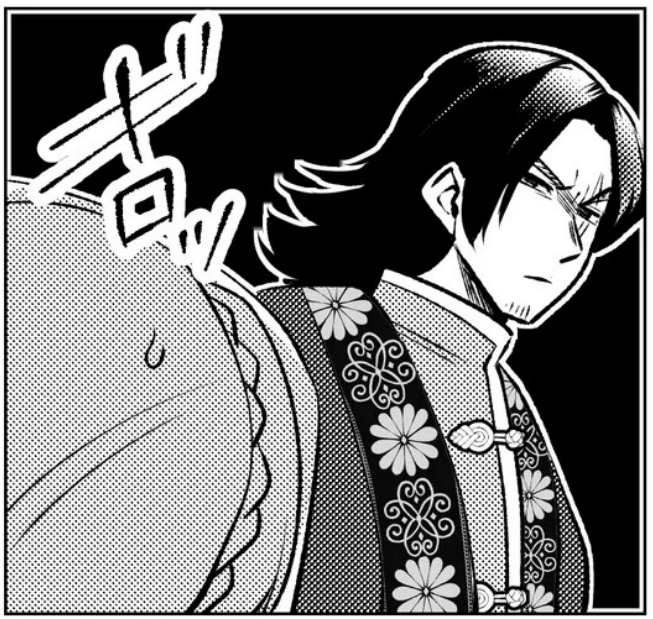
先が
思いやられるな…



ふう…



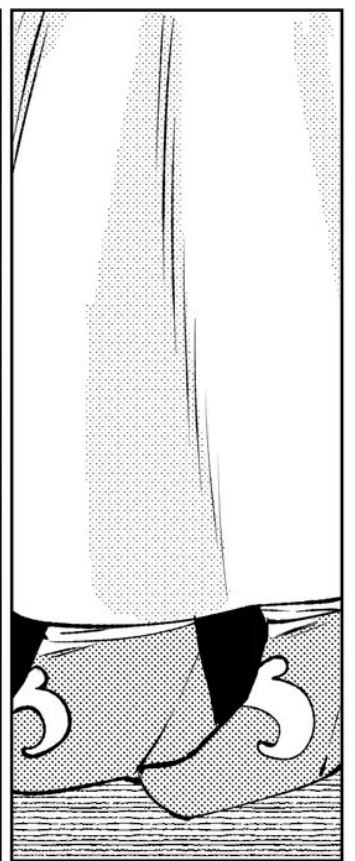
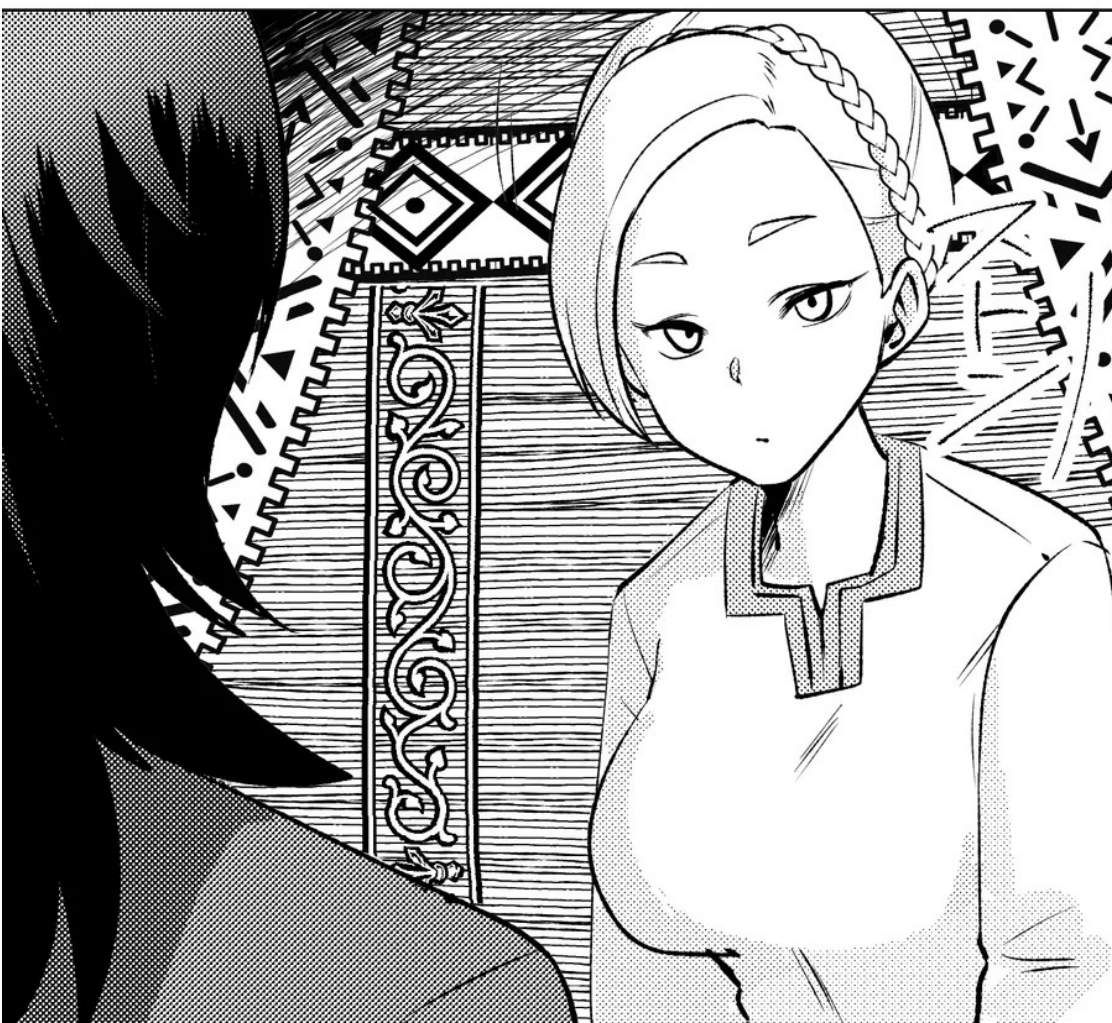
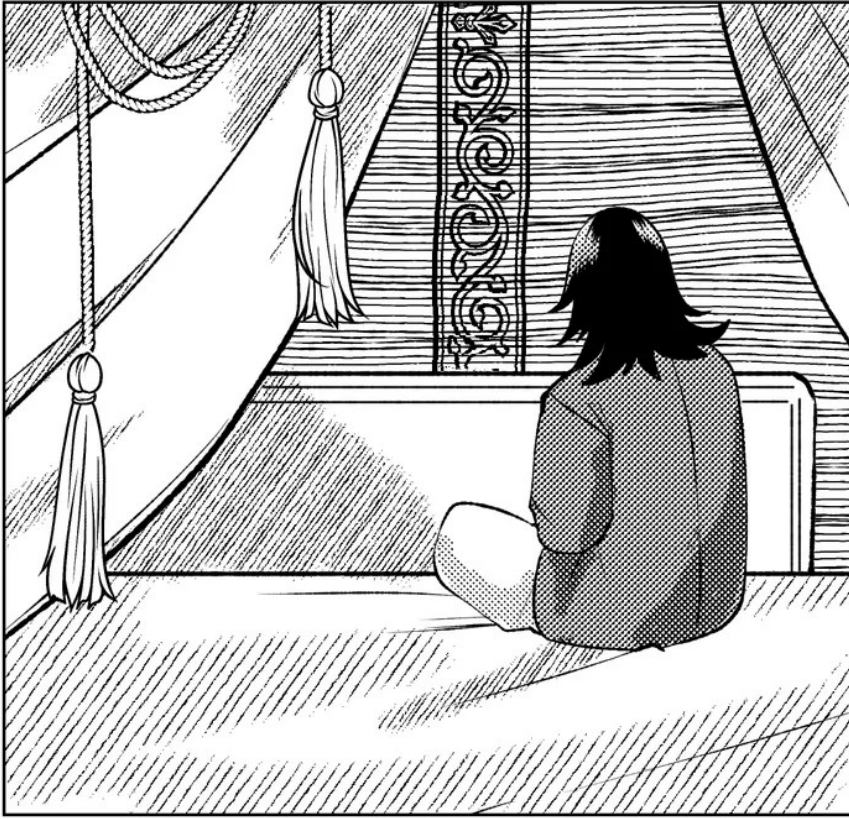
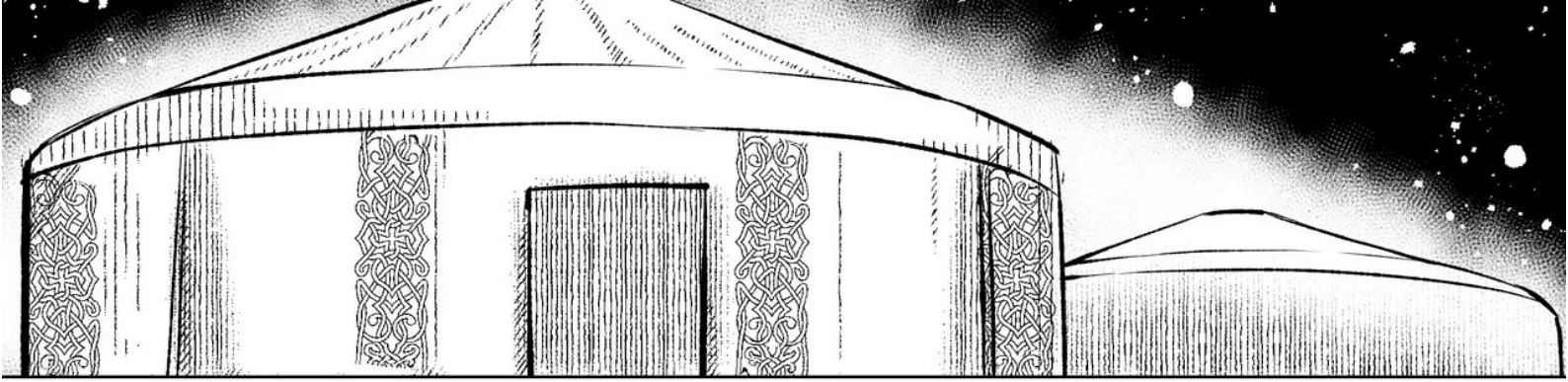
きら

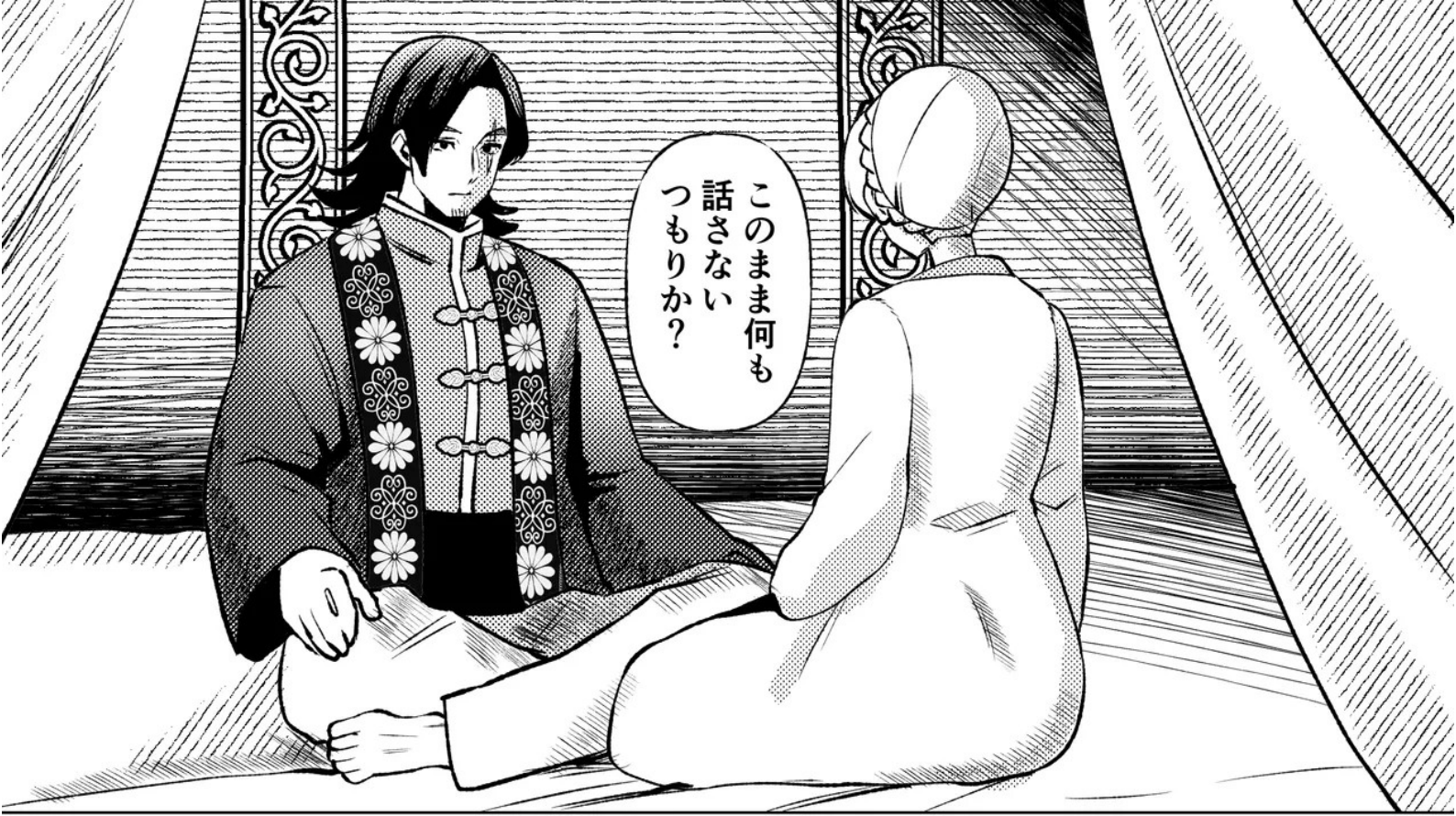


高



…





このまま何も話さないつもりか？



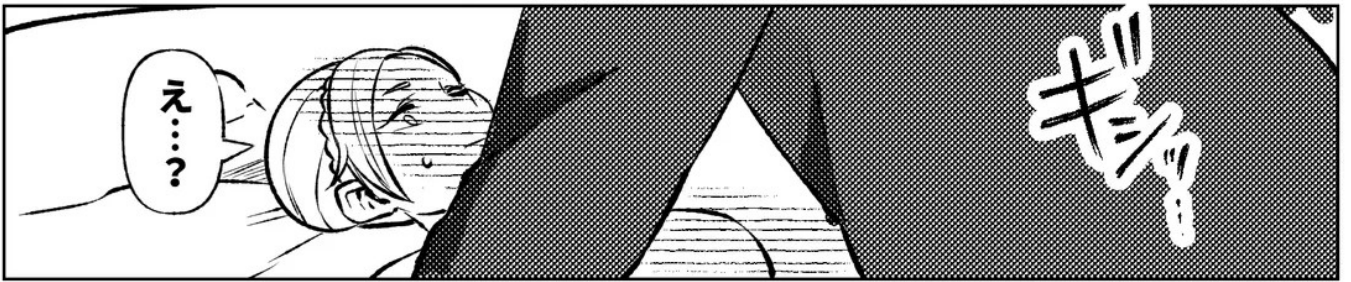
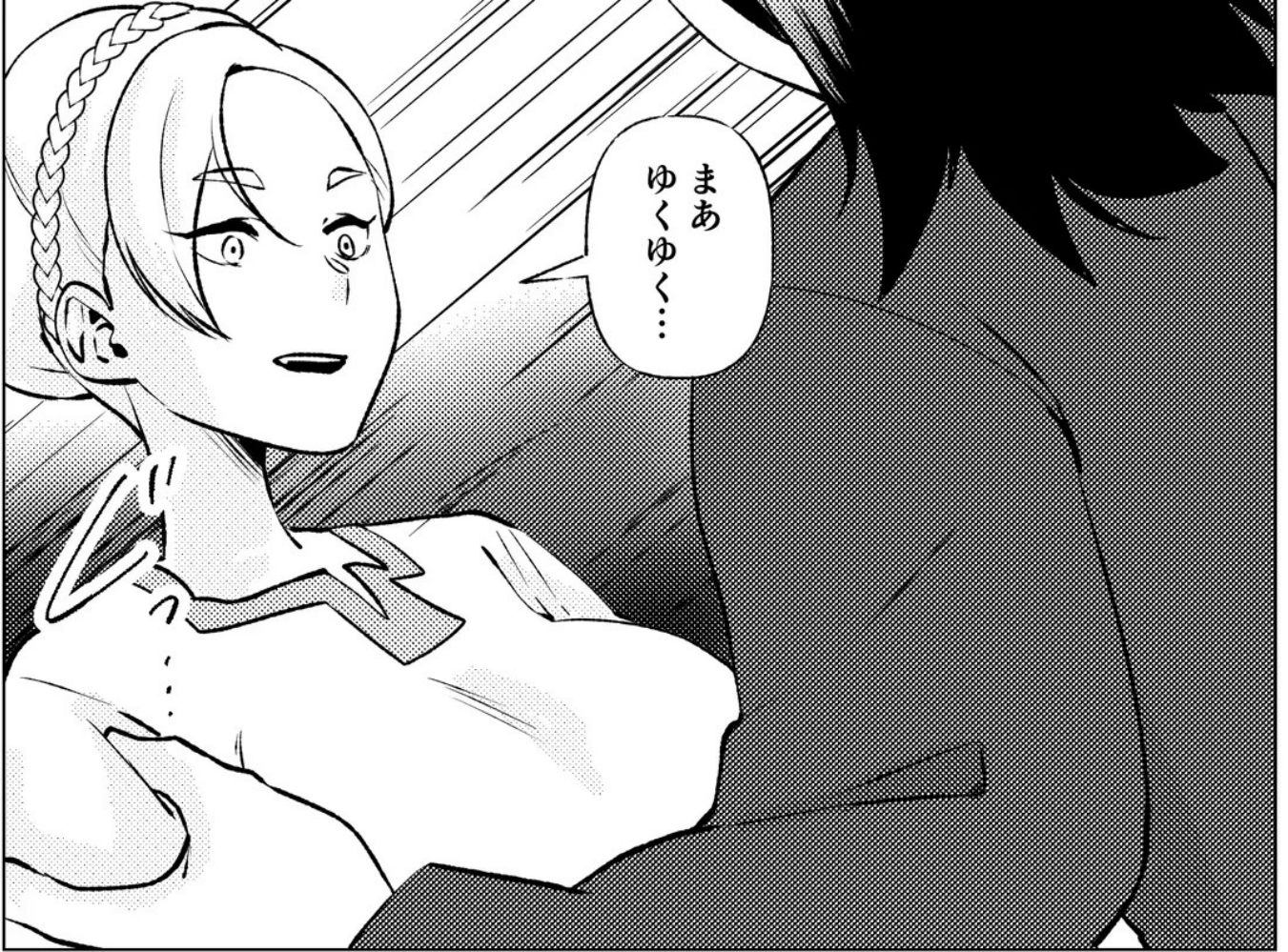
礼をやりたいところだが

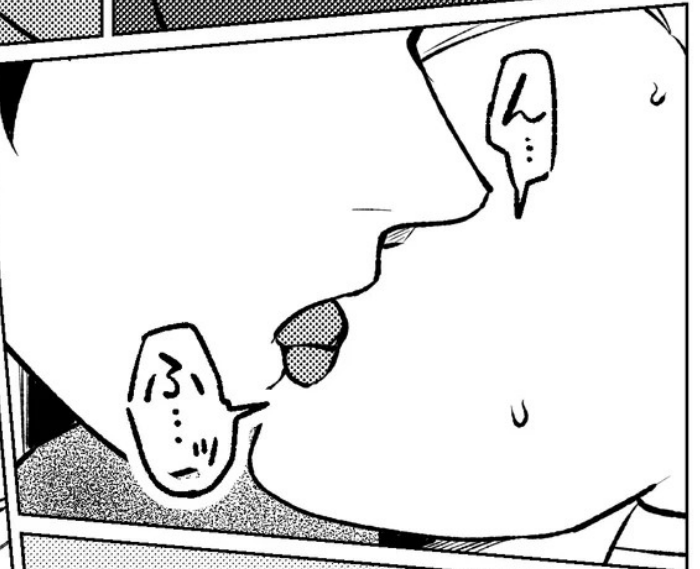
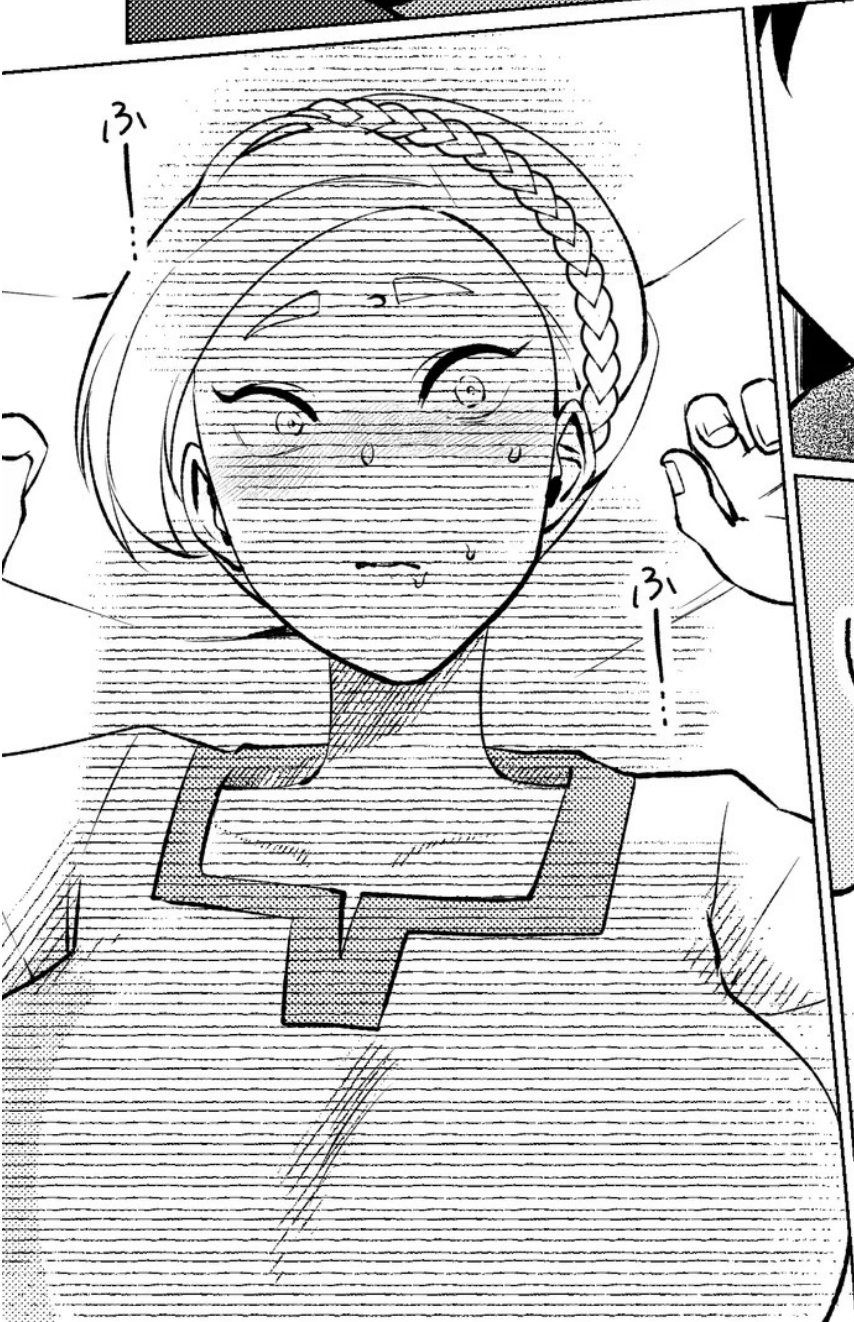
あいにくもう持っているものなどこの身くらいしかないからな…

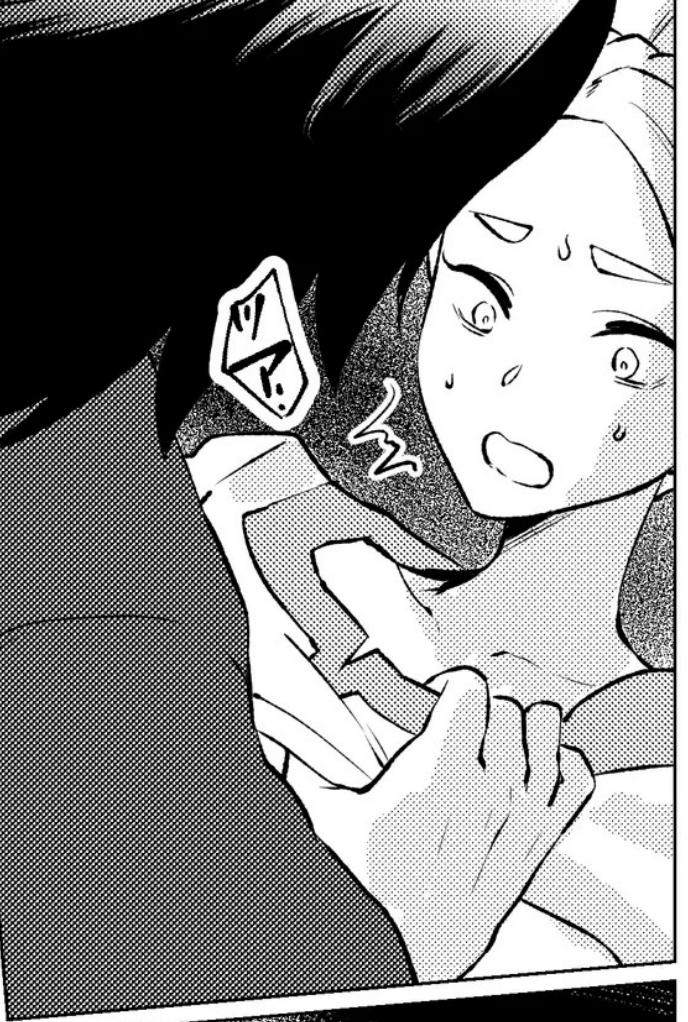


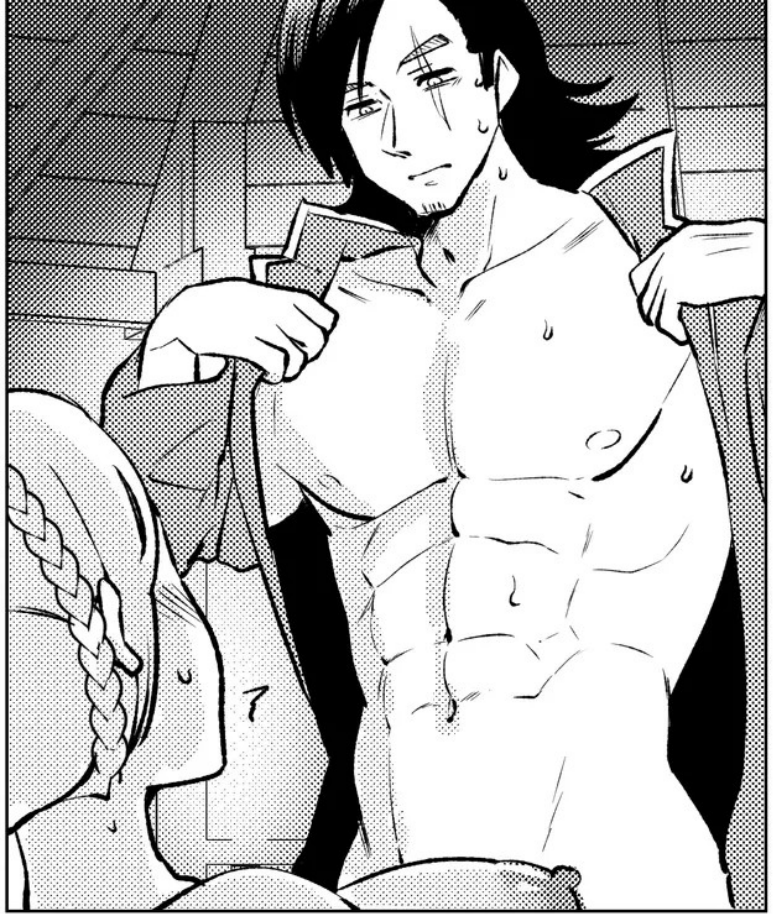
…まあいい。

貴様との縁談のおかげで母の祖国への馬鹿兄の侵略を止められた事は確かだからな

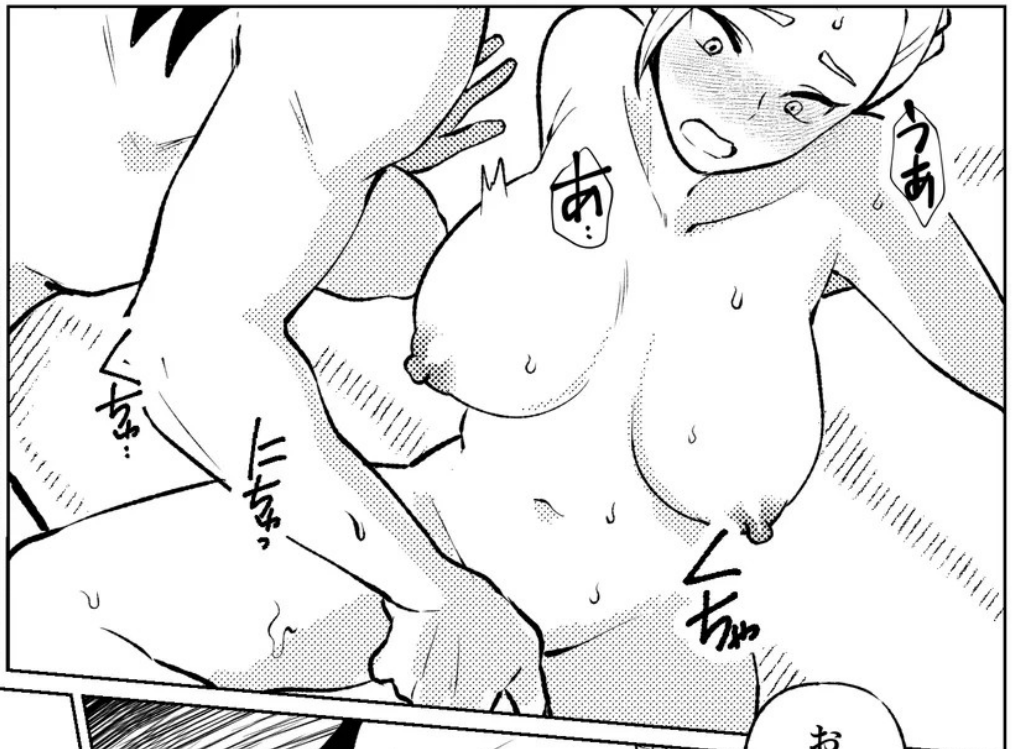




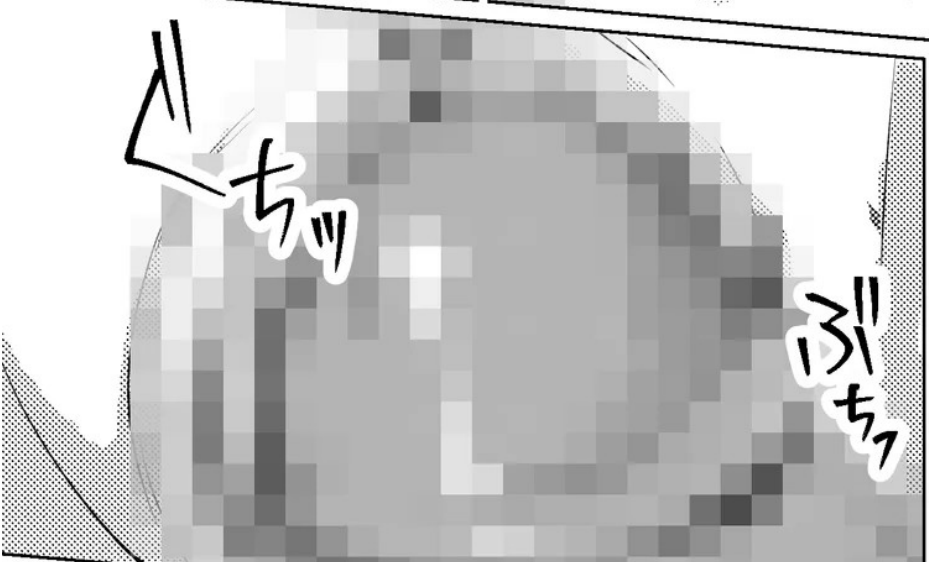
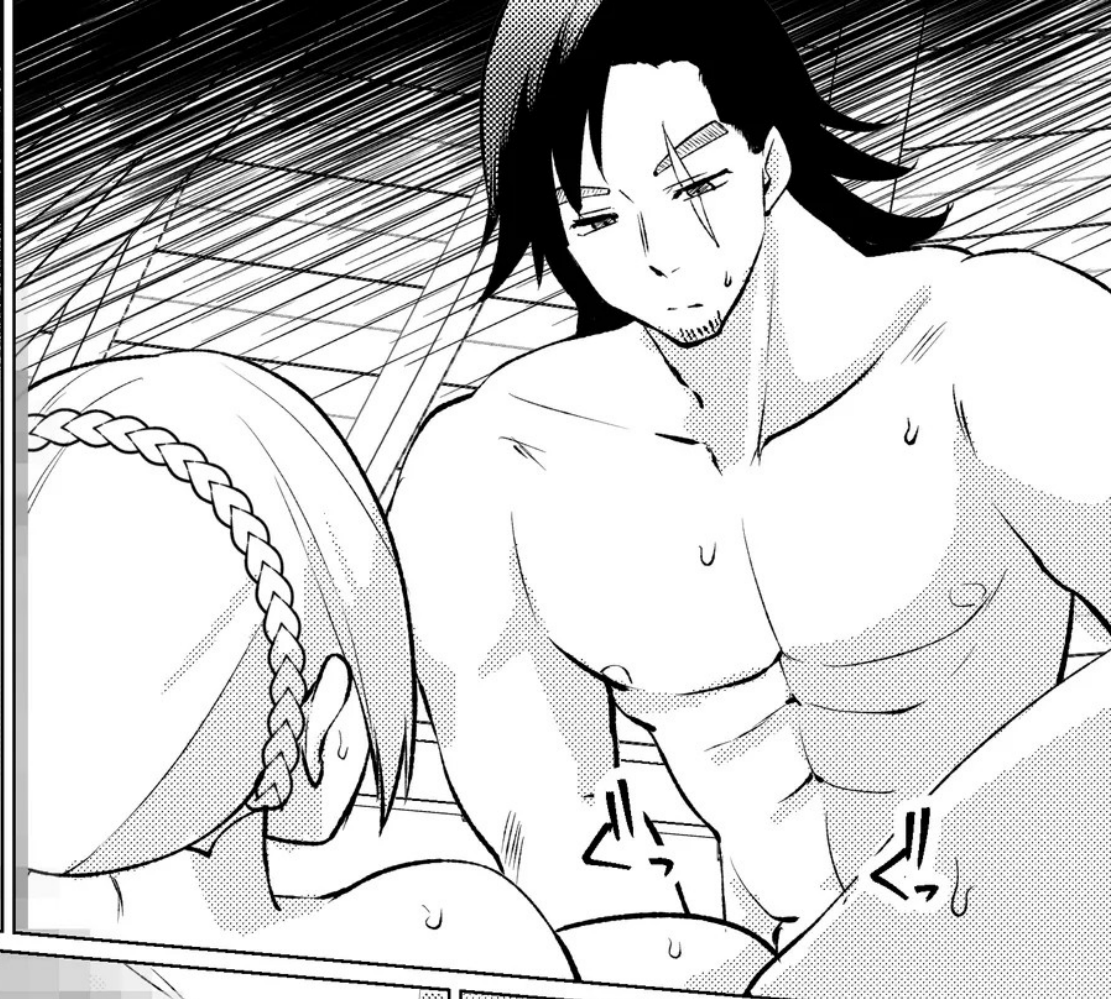




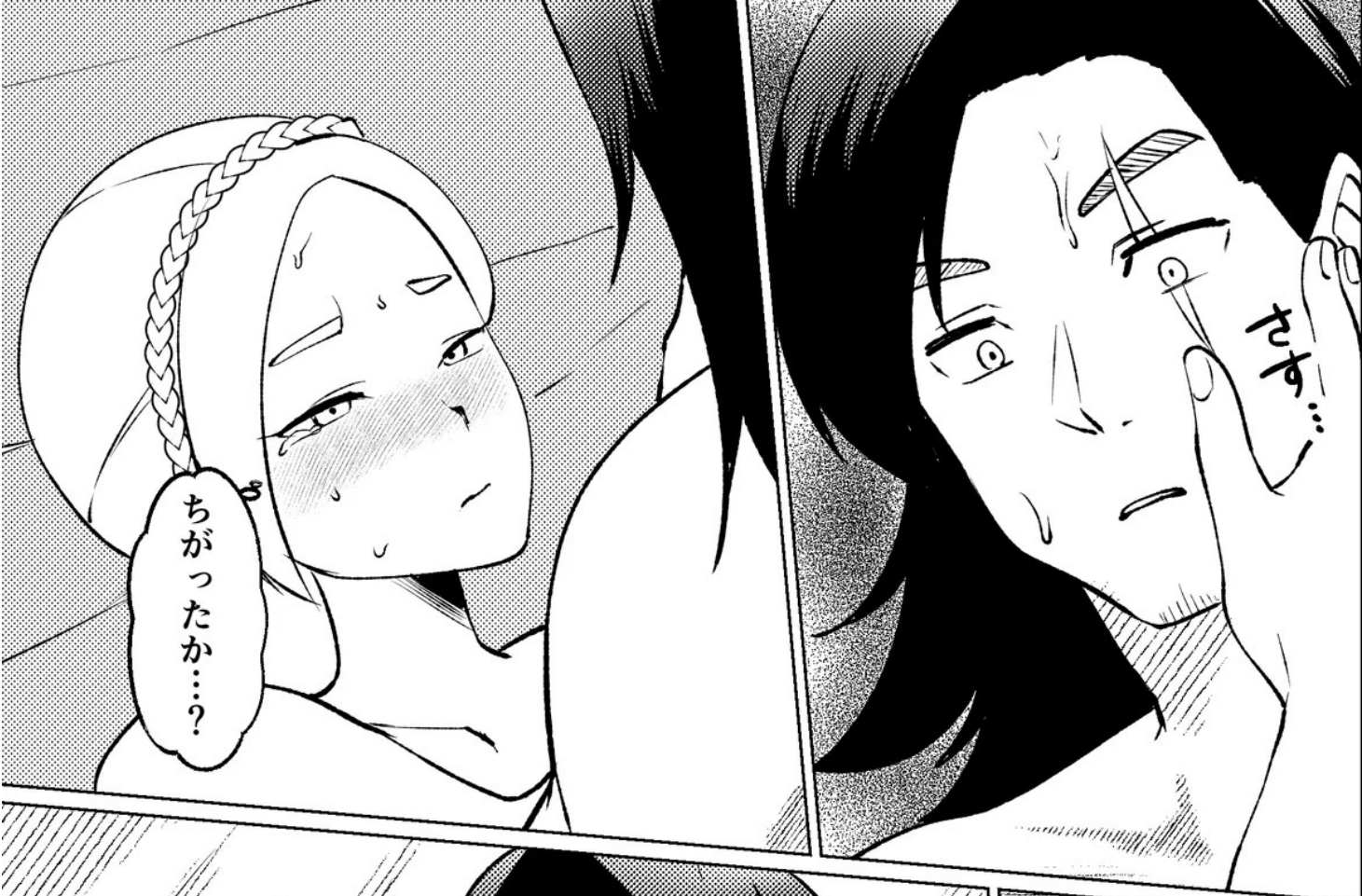
すごいな...
こんなに濡れるものか

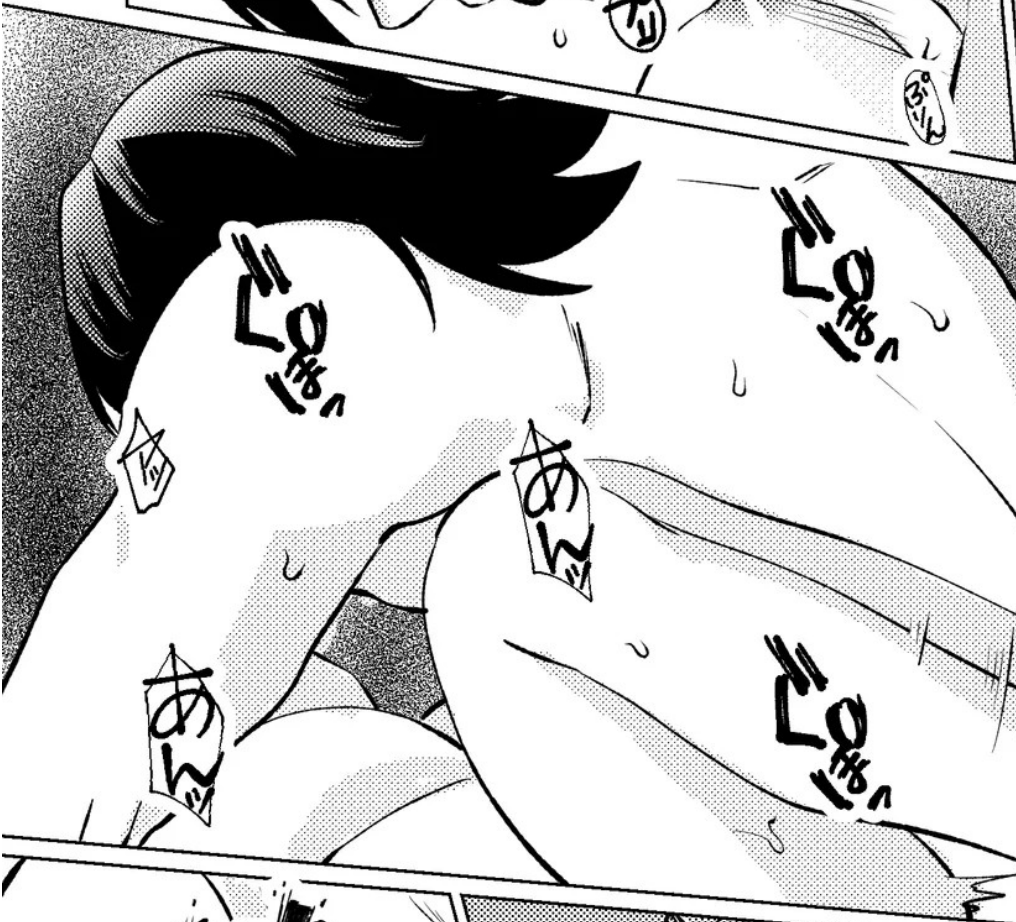
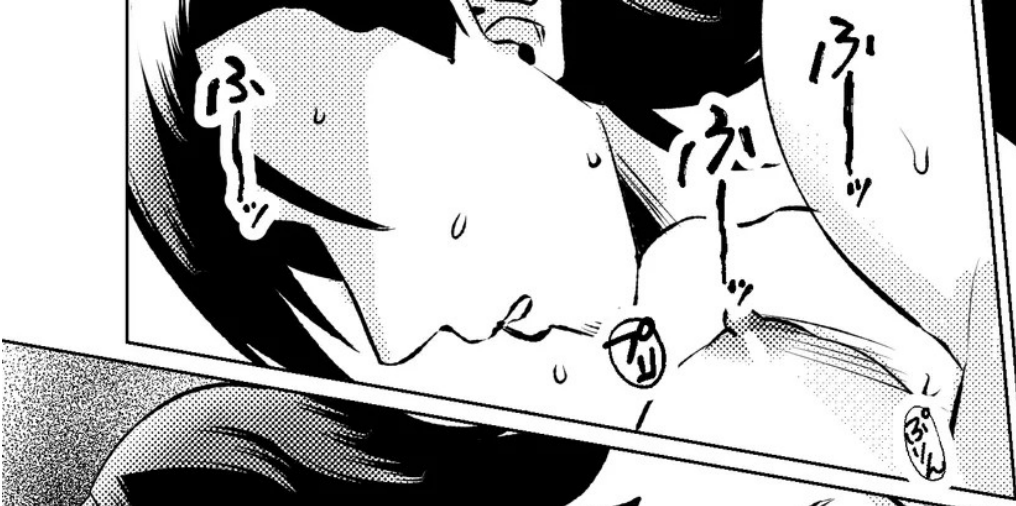


お前が...
妙な触り方するからだよ...











なんと
器の
大きい女だ…



緊張して
ろくに話せも
しなかった私に
身を委ねて
くれるとは…



緊張…？

異民族の
感情表現は
よく分らん…



美しく、
慈悲深く、
潔い

私は
いい妻を
得た：

今後
一生かけて…

私の愛を
お前に注ぐと
誓おう



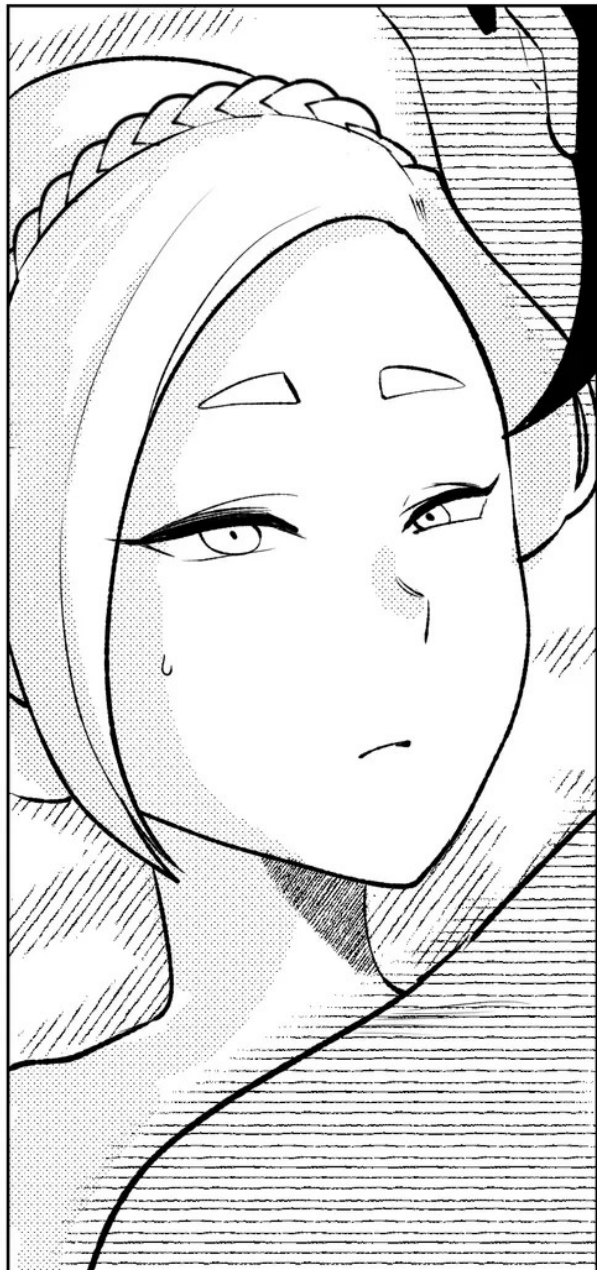
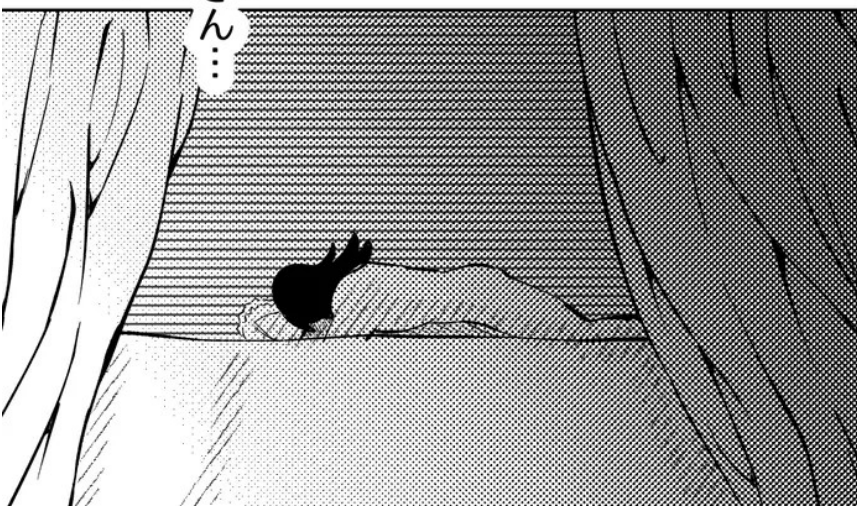
なにか…

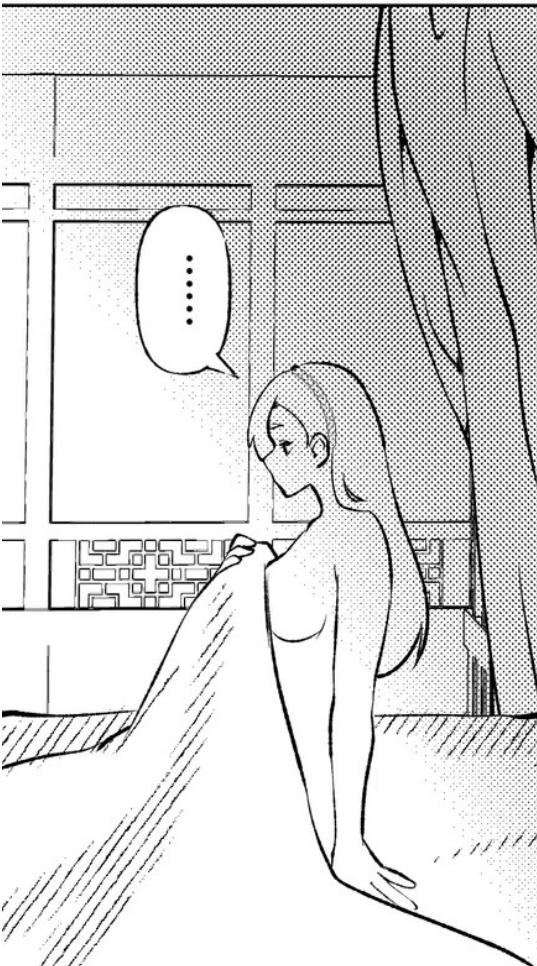
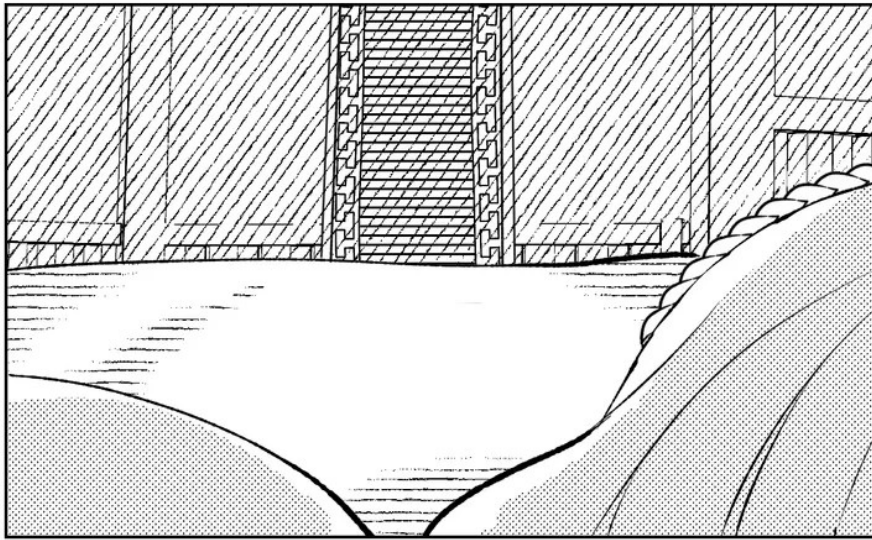
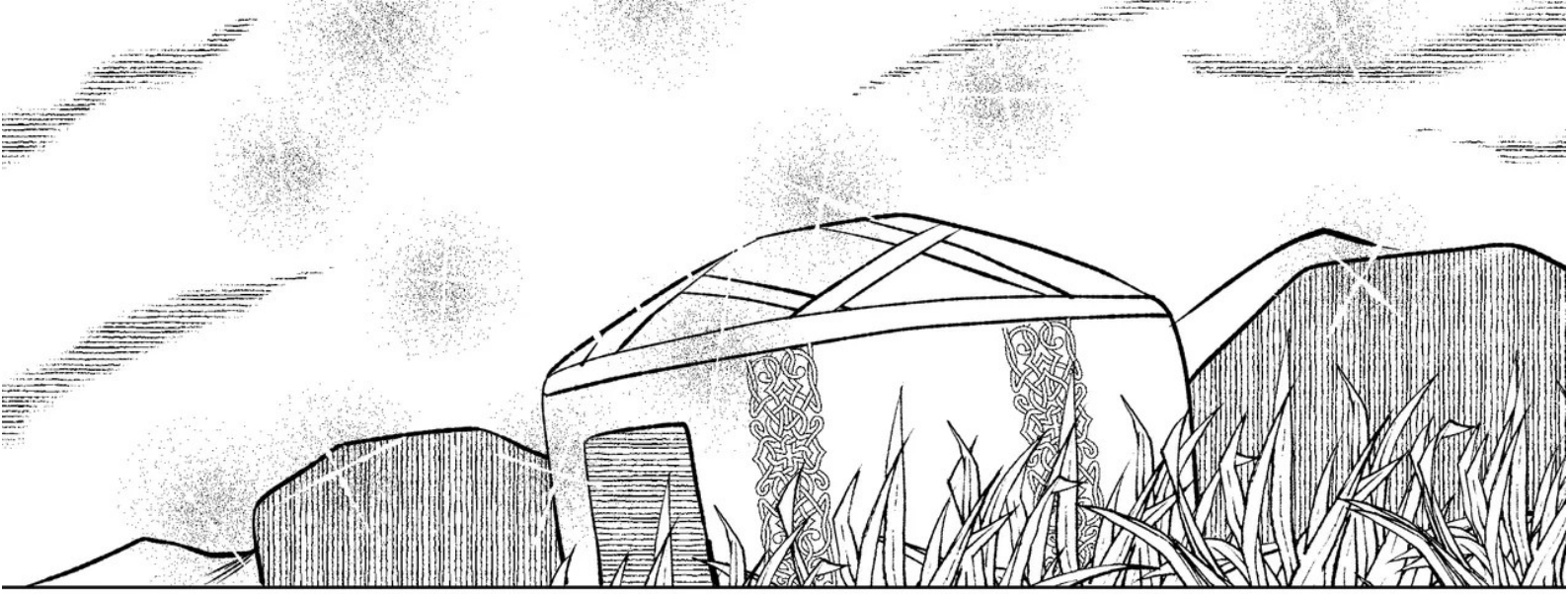
著しく
勘違いされているが…

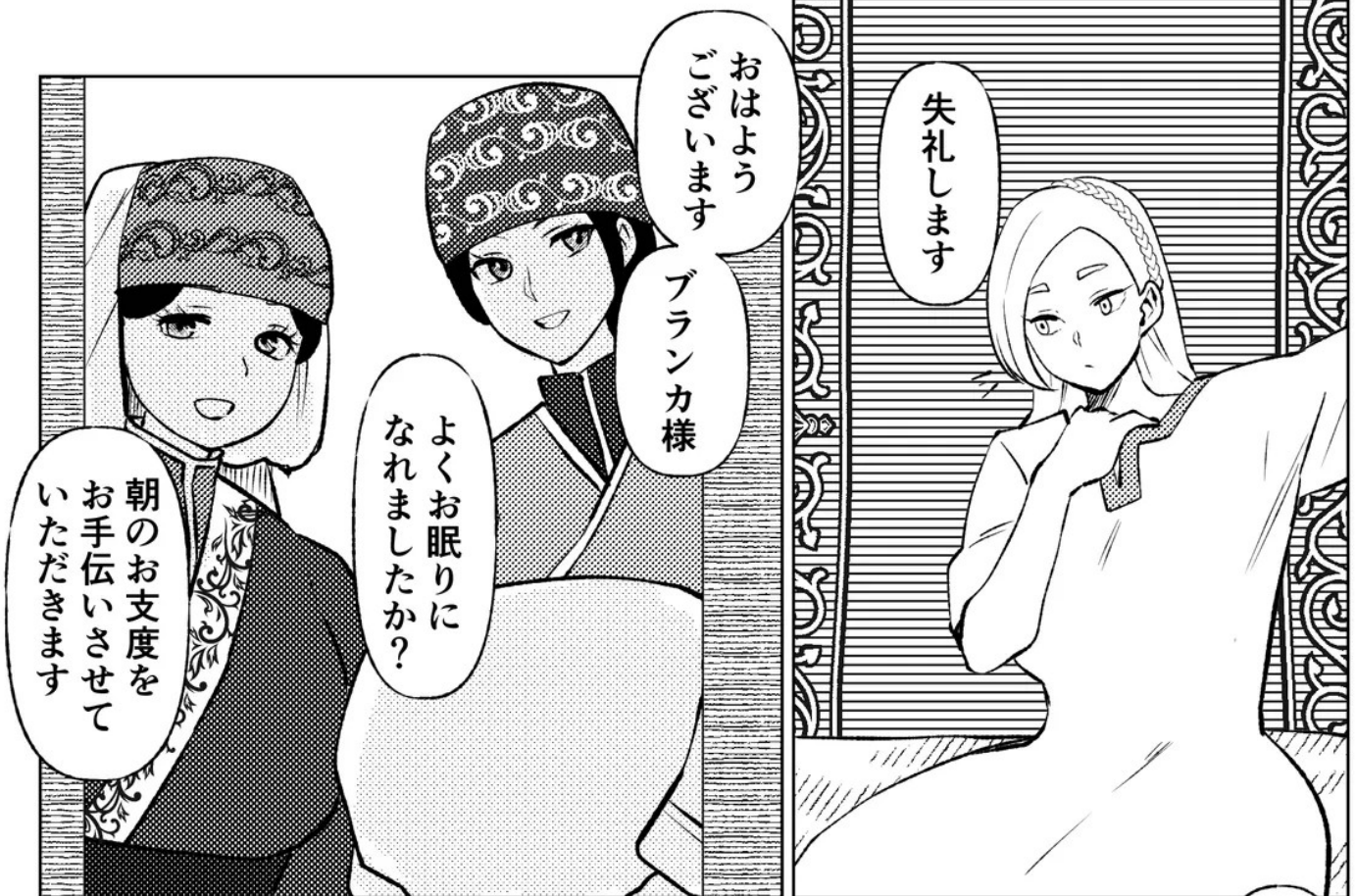


眠くて

訂正できん…







失礼します

おはよう
ございます

ブランカ様

よくお眠りに
なれましたか？

朝のお支度を
お手伝いさせて
いただきます



...ああ。

ありがとう

君たちが？



頼める
だろうか

おめああ



...そう、か。

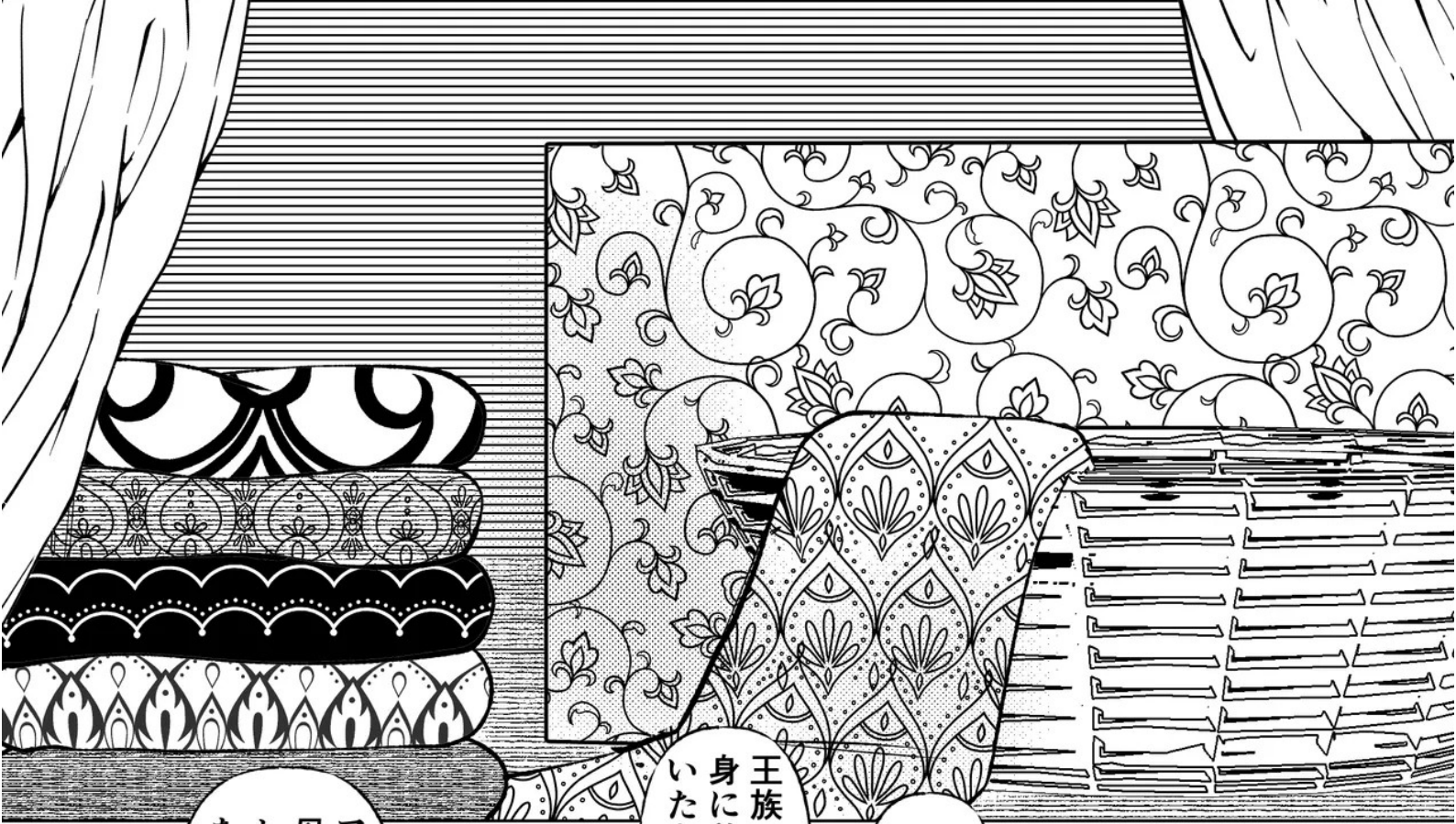
いや、いい。



お国の侍女様方
にお声がけ
したのですが...

私たちに
任せると...。

お呼び
した方が？



王族の姫様方が
身に着けられて
いたものです

アラクシ様の
母君が
お亡くなり
なられた時より、

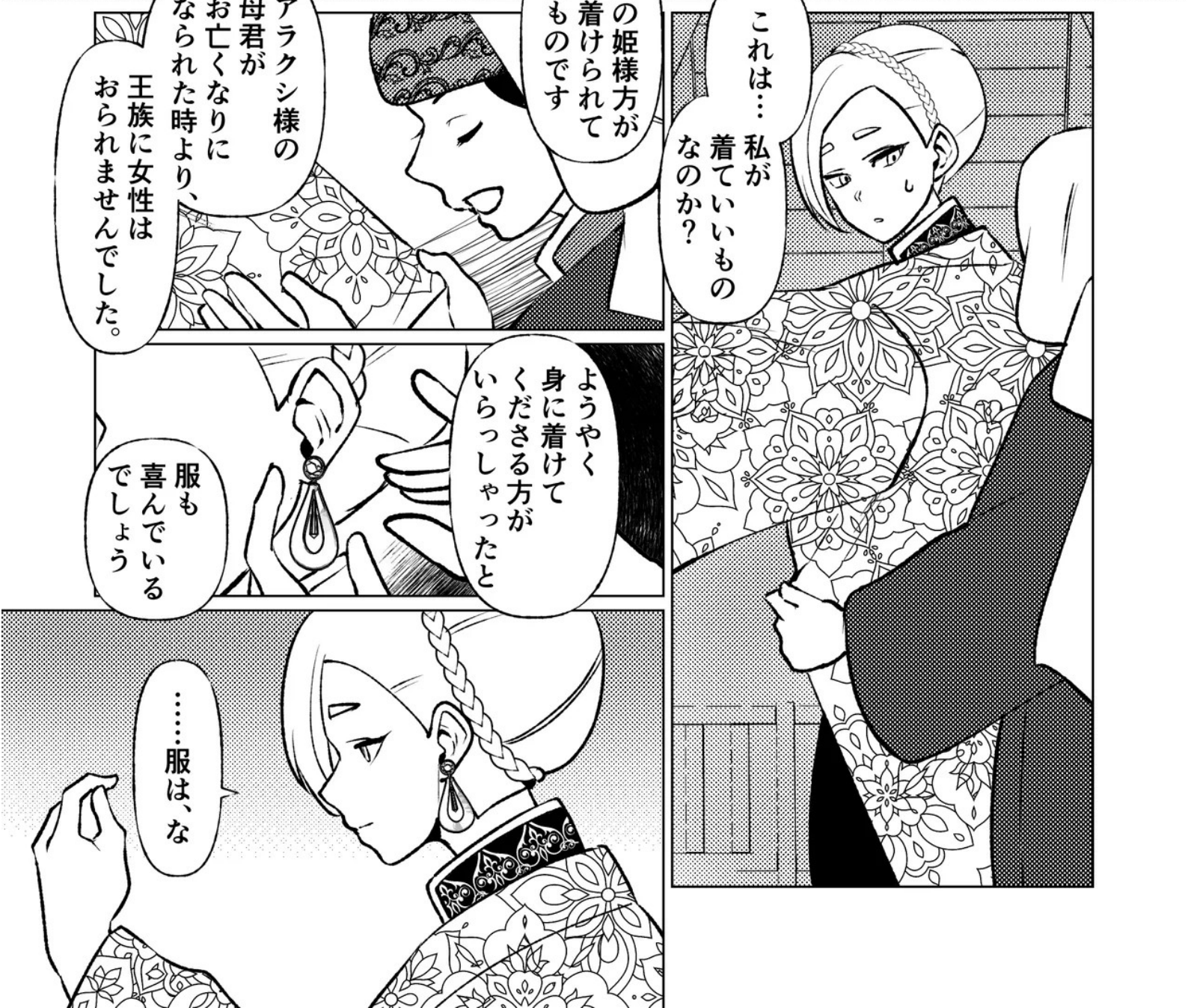
王族に女性は
おられませんでした。

これは…私が
着ていいもの
なのか？

ようやく
身に着けて
くださる方が
いらっしやうと

服も
喜んで
いる
でしょう

……服は、な



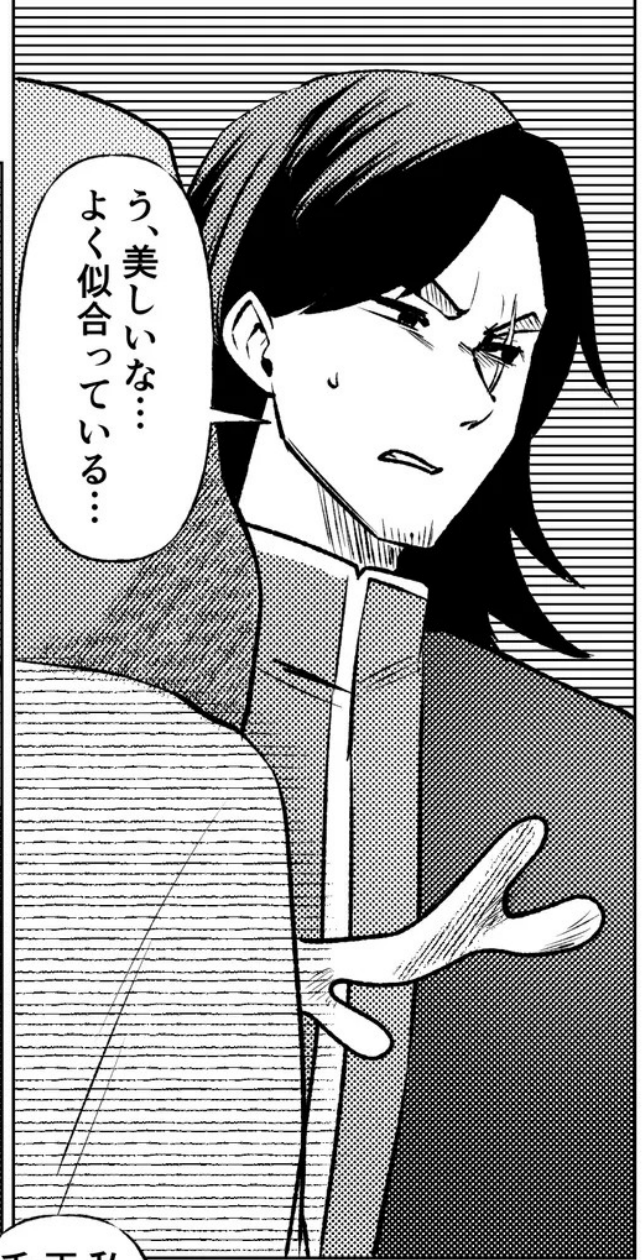


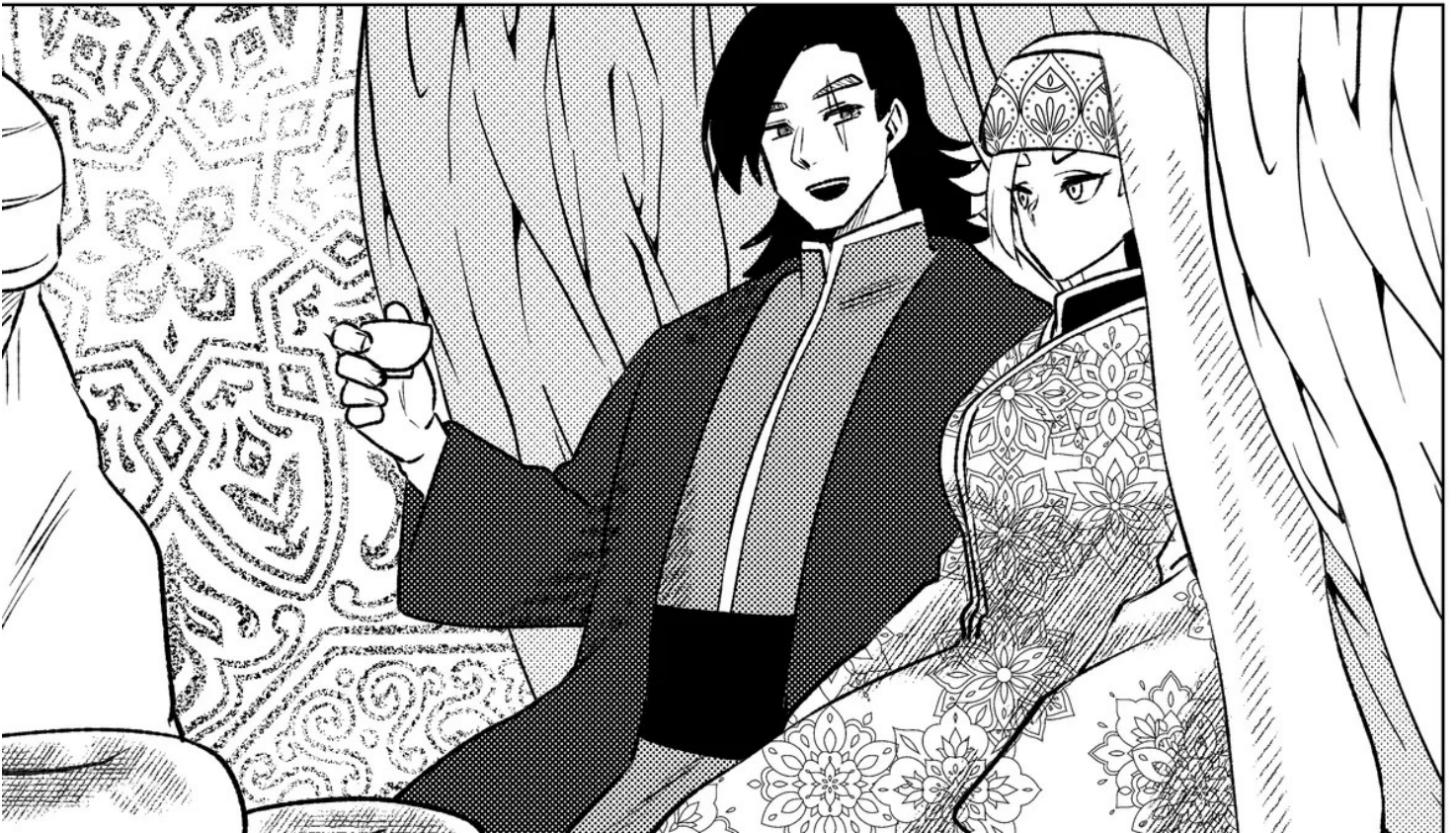
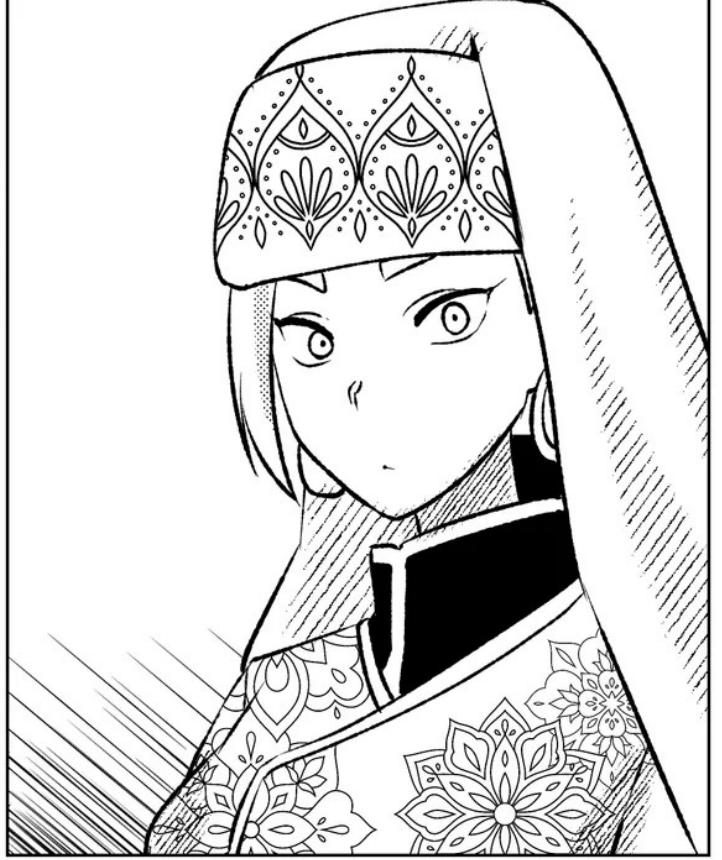
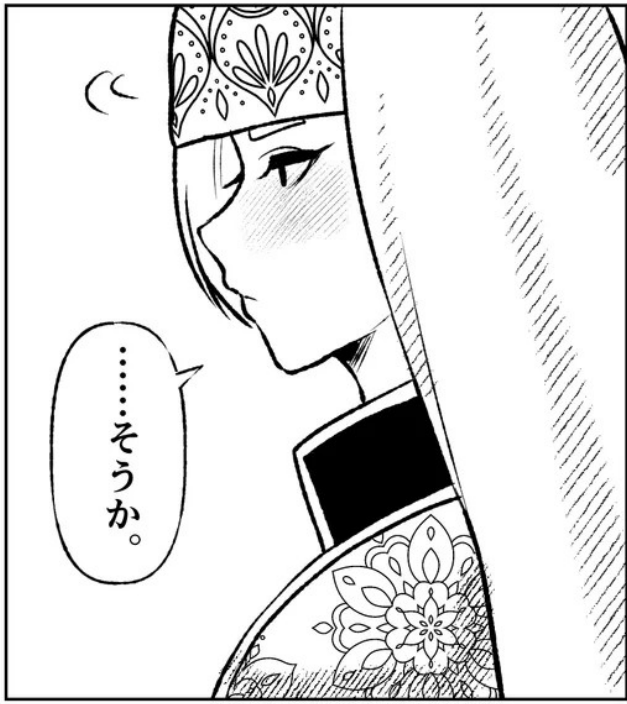


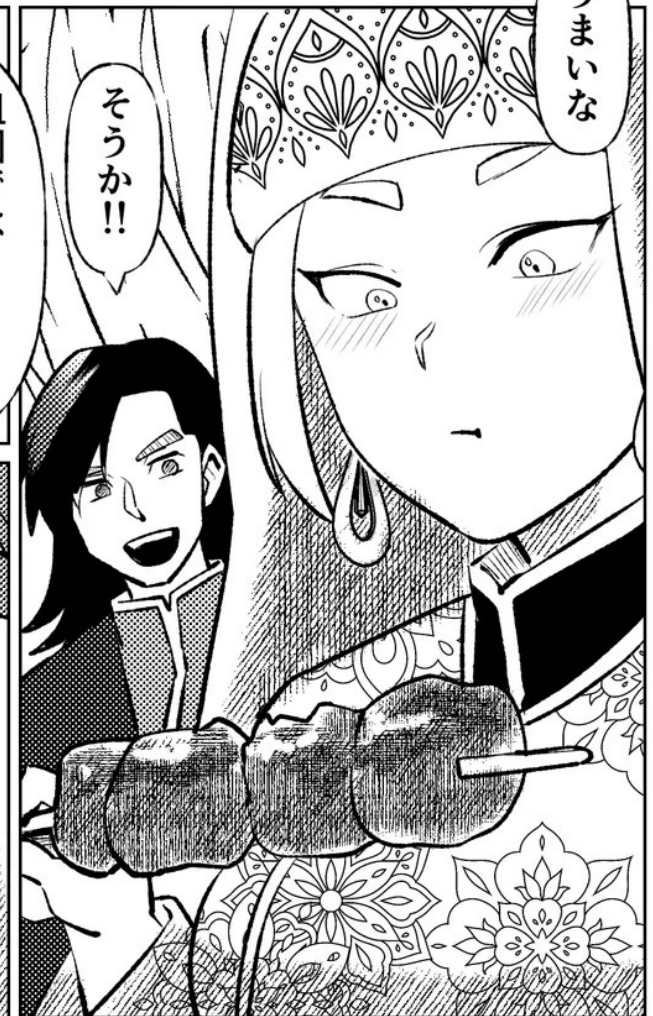
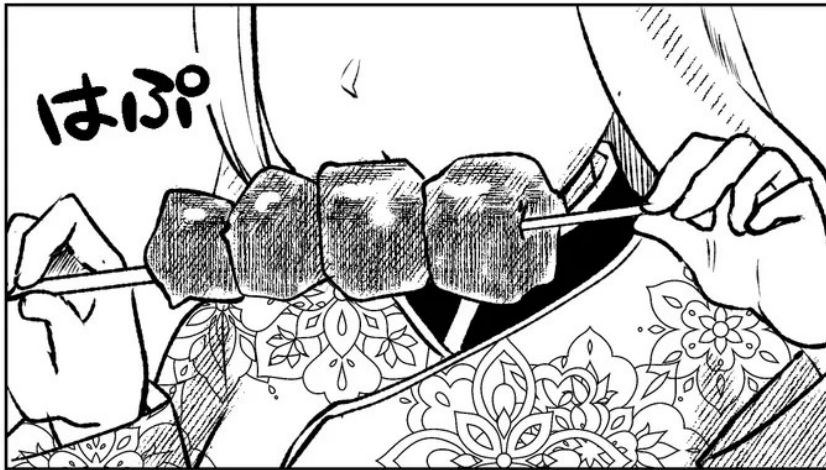
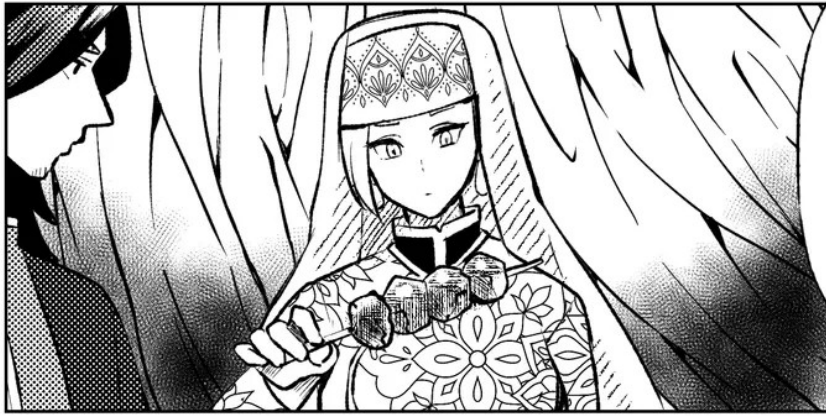
狩りに行って
いたのか?

こんな
早くに?











これは
毒は入って
ないようで
助かった

食えたものでは
なかったからな

毒見を何度も
挟まなければ



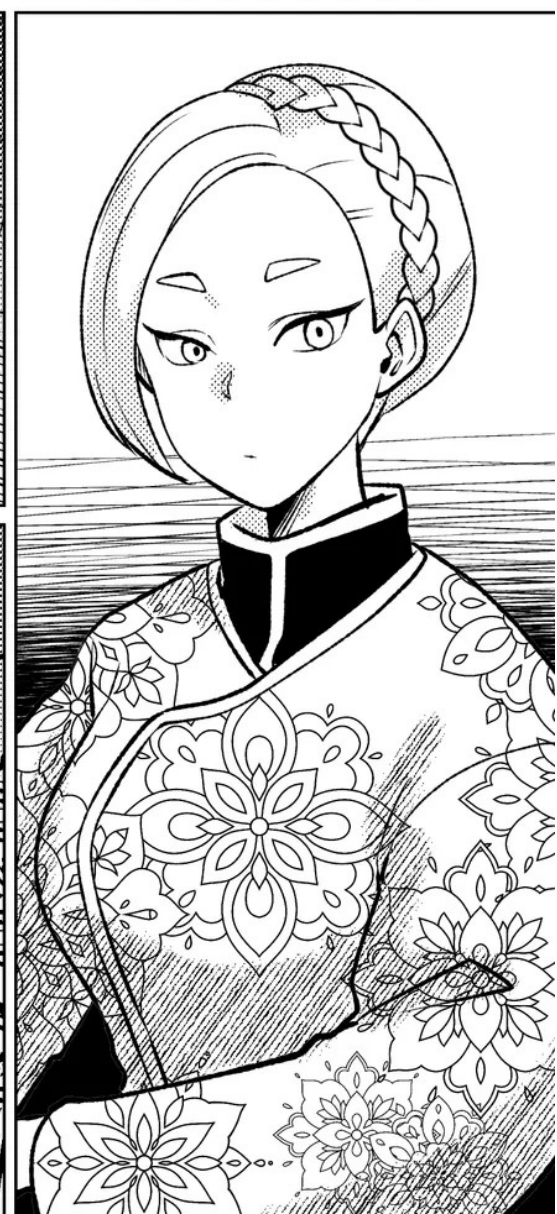
これも
これも

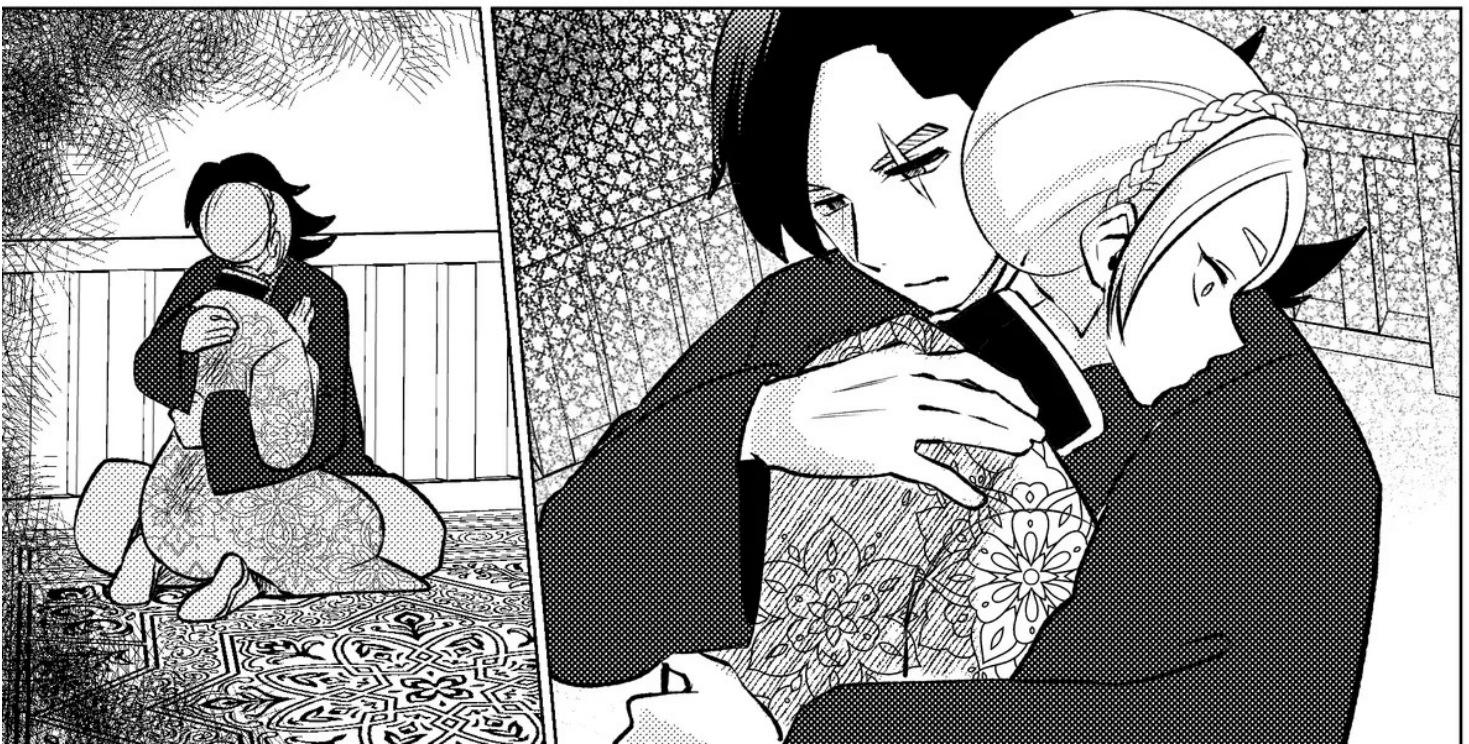
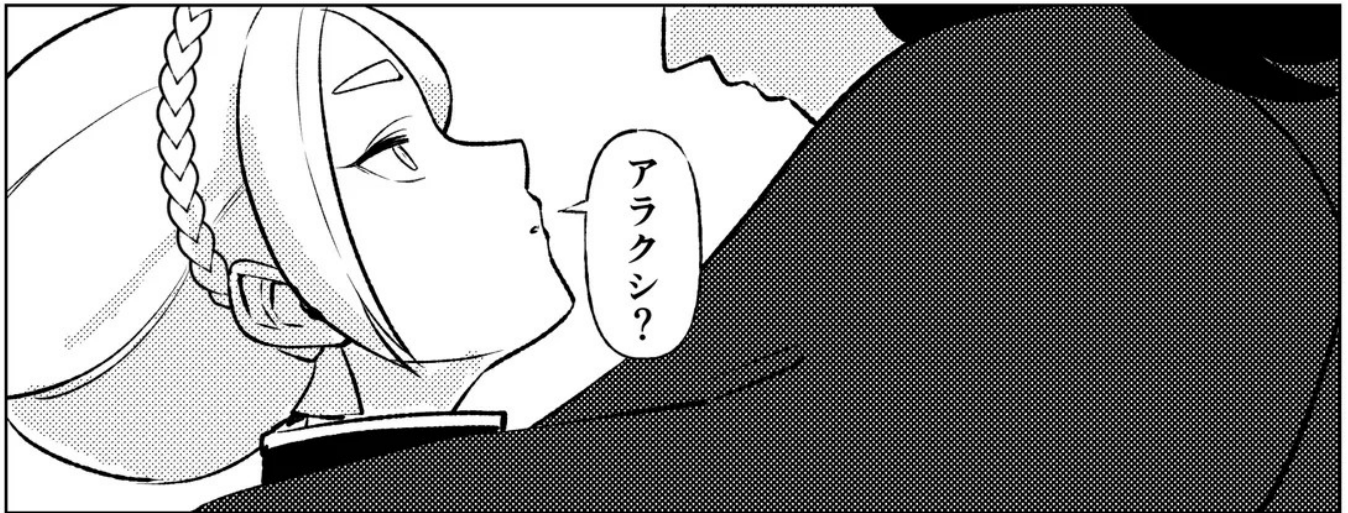
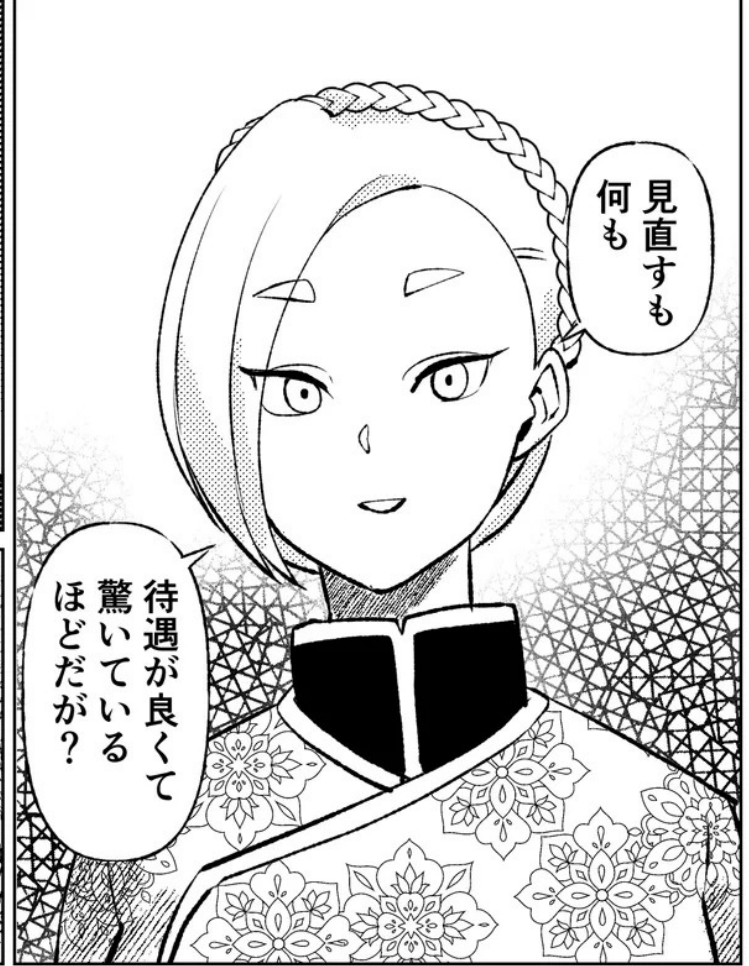
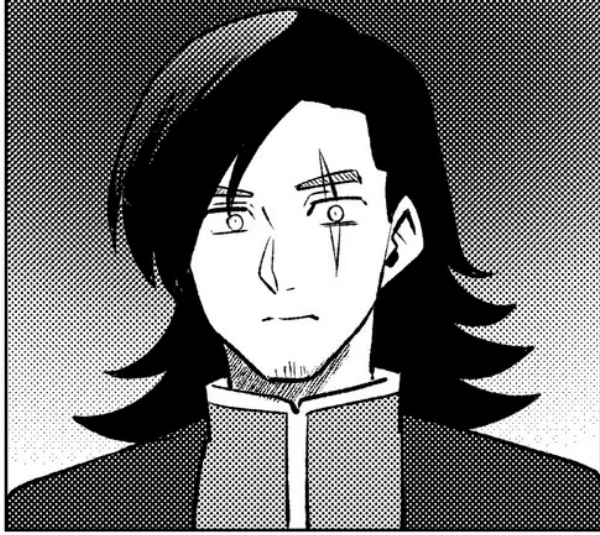
あとこれも...

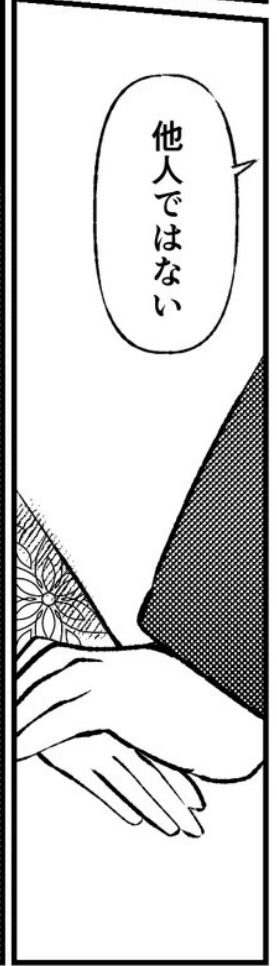
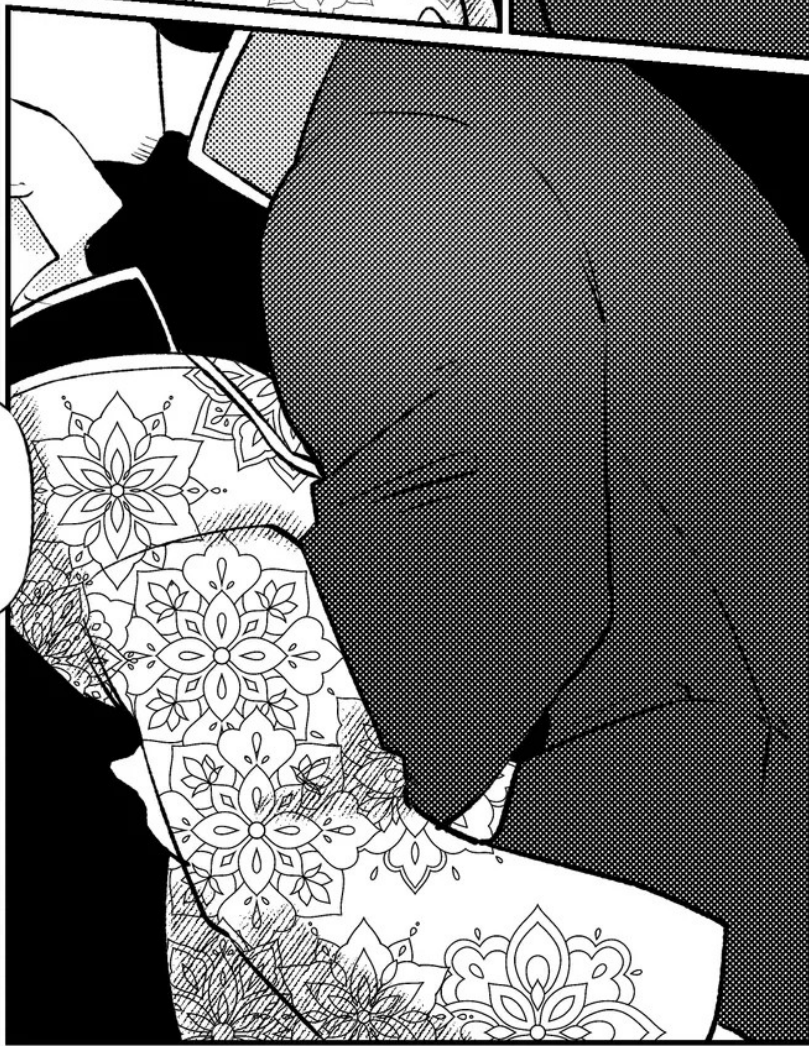
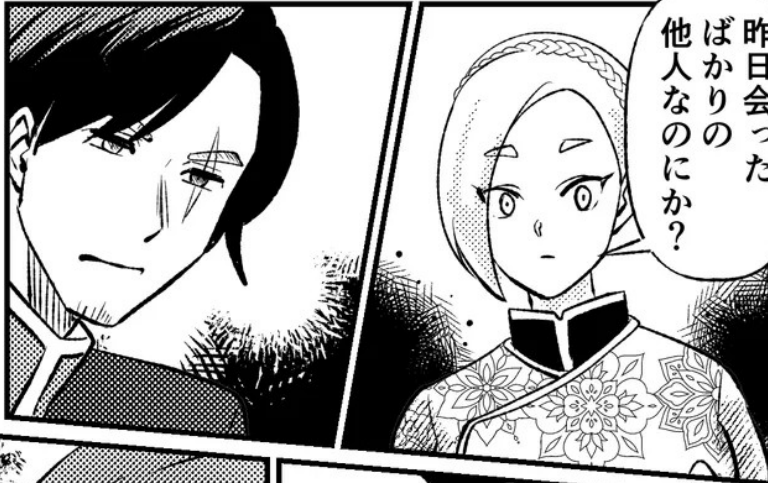
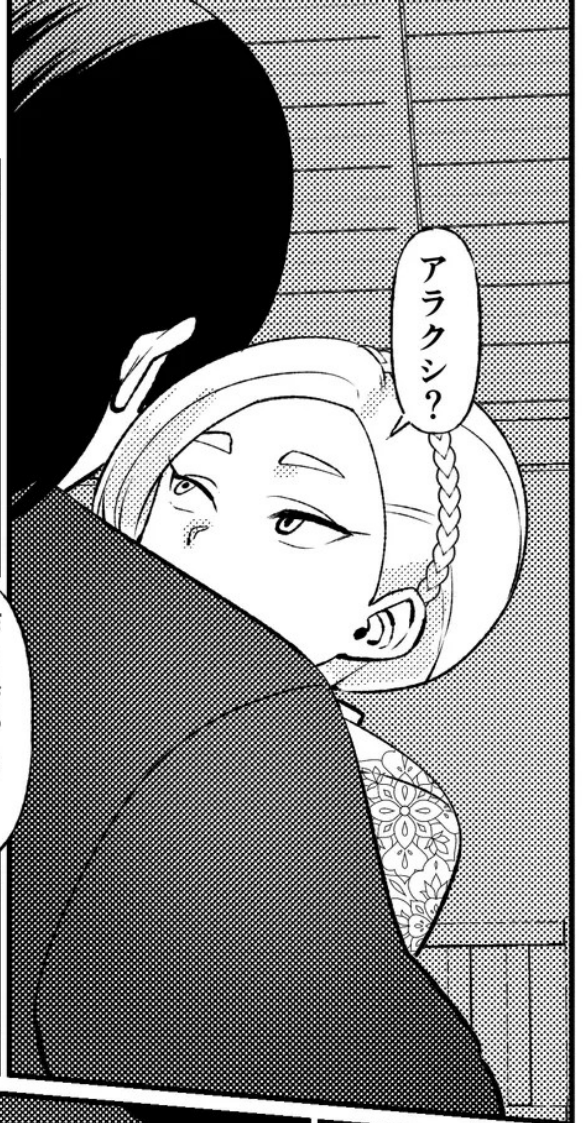
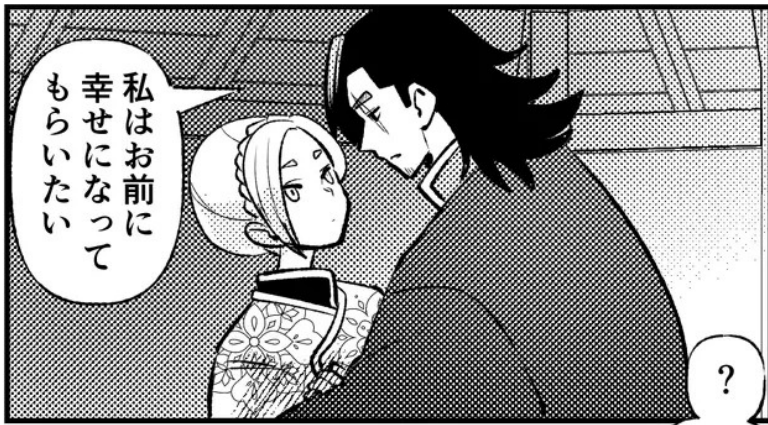
毒など
入っとらんから
どんどん
食え。

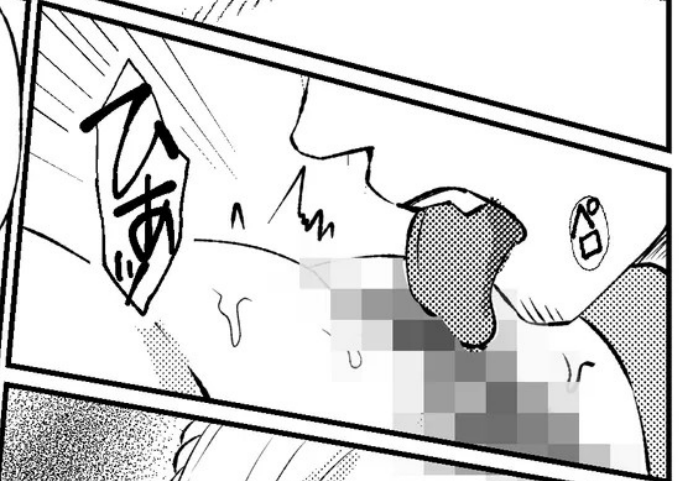
そんなに
いっぺんに
食えるか。

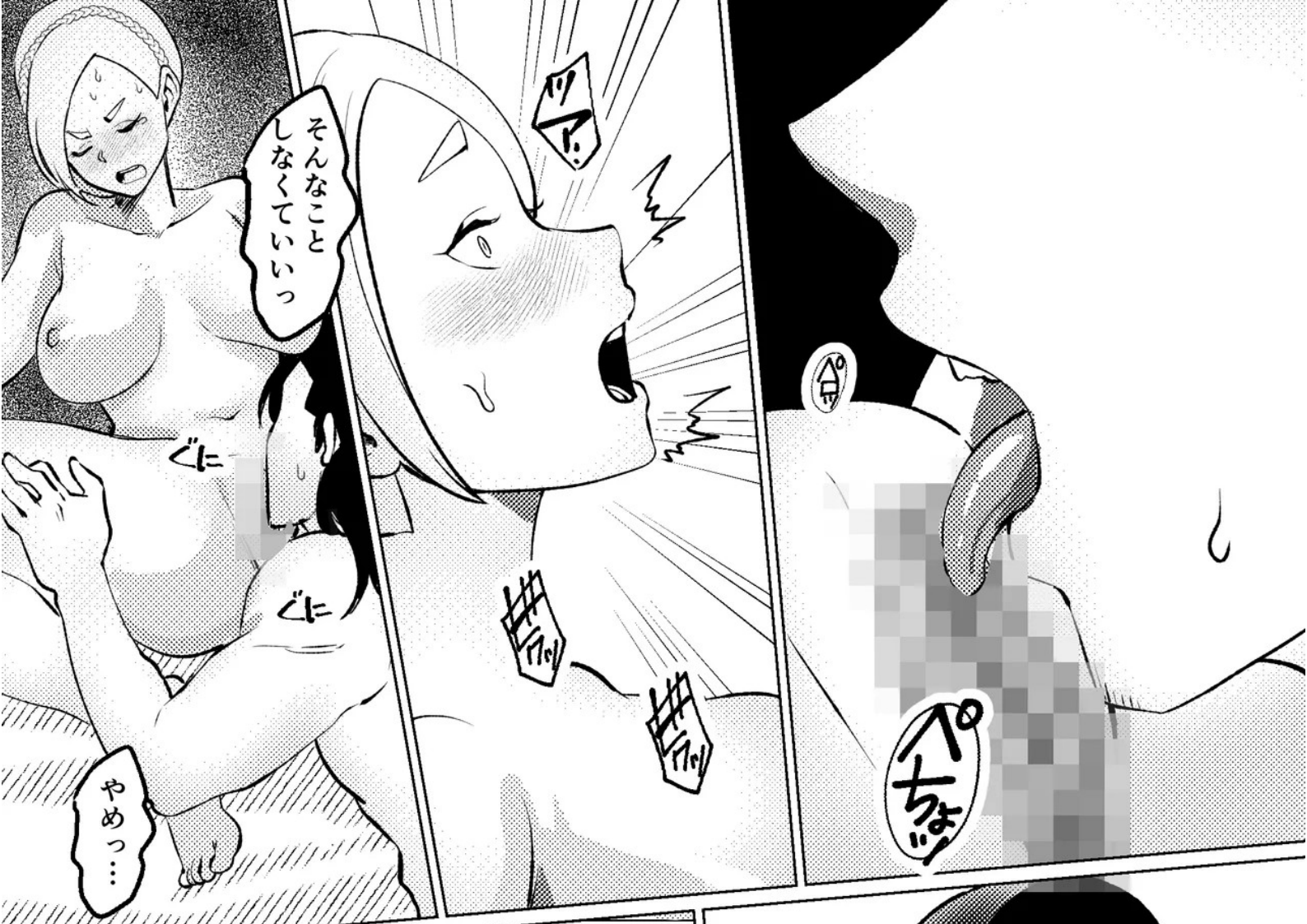










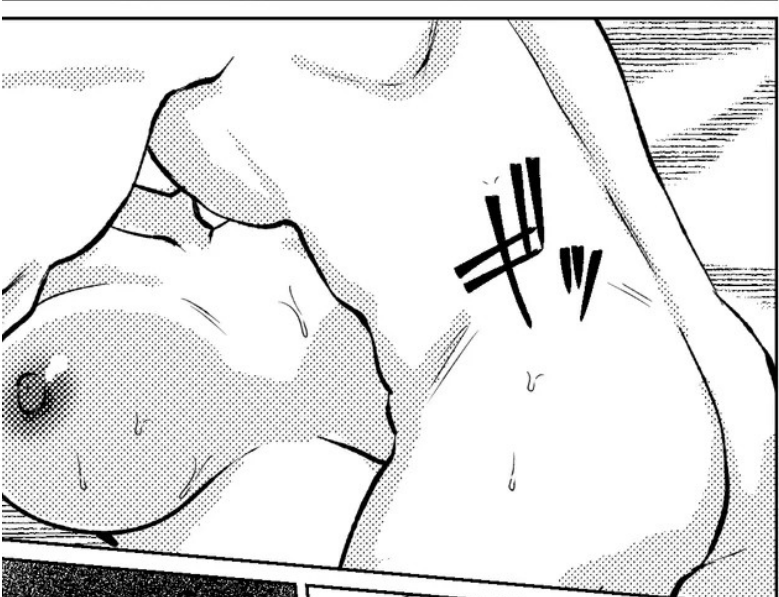




私のを舐めて
いただけで…？



さわって
いないのに…



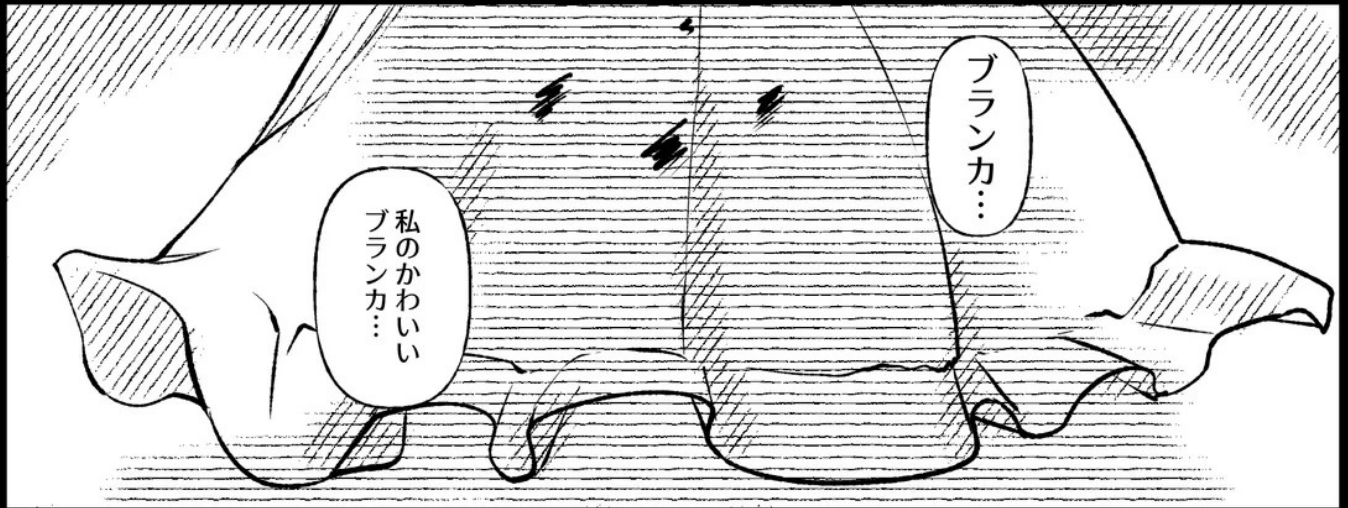
ギッ



お前だけが
何だ？

ゲ
イツ





ブランカ：

私のかわいい
ブランカ：



強く：
生きてね：

おかーさま…？

何故
あの男の胤の
子供が生きて
姫様が
死ななければ
ならないのです

乳母殿
お声を小さく



死に損ないの
娘の方を
北方が
引き渡しを
要求している？
かまわん。
使者を殺せ。

あいつは
ここで
飼い殺す。
あれを産んだ女は
顔と肉体は
良かったからな：

何かの役には
立つだろう

…カ

ブランカ

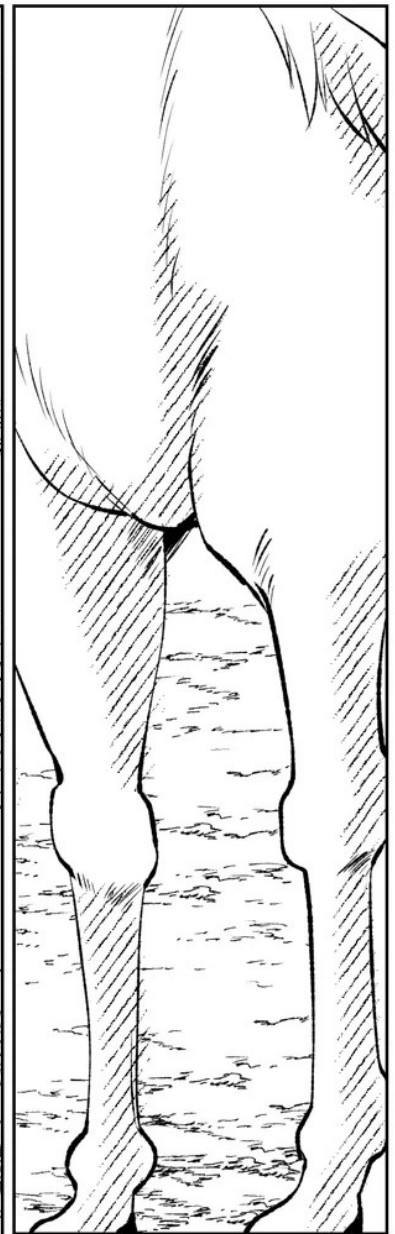
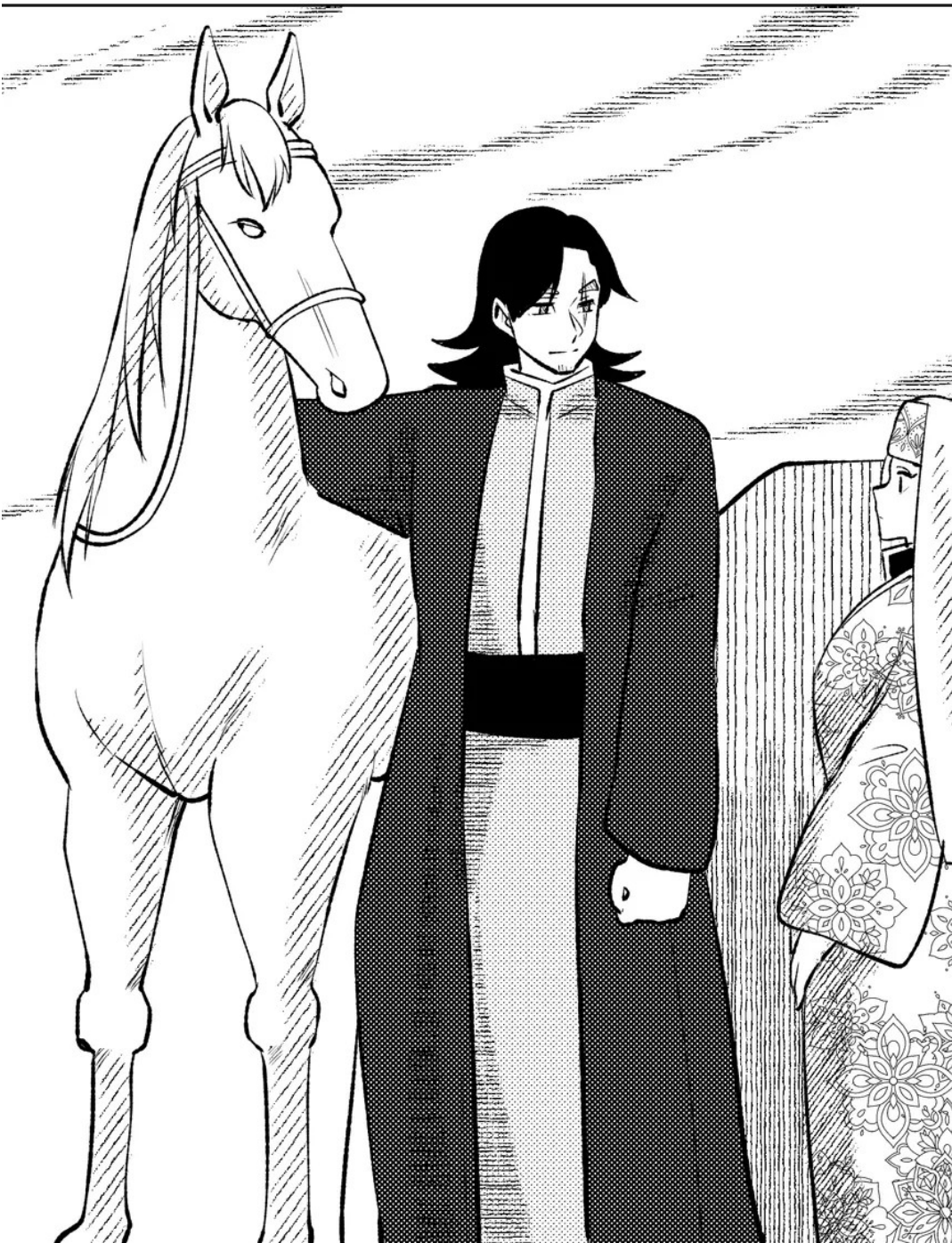
起きろ
ブランカ!

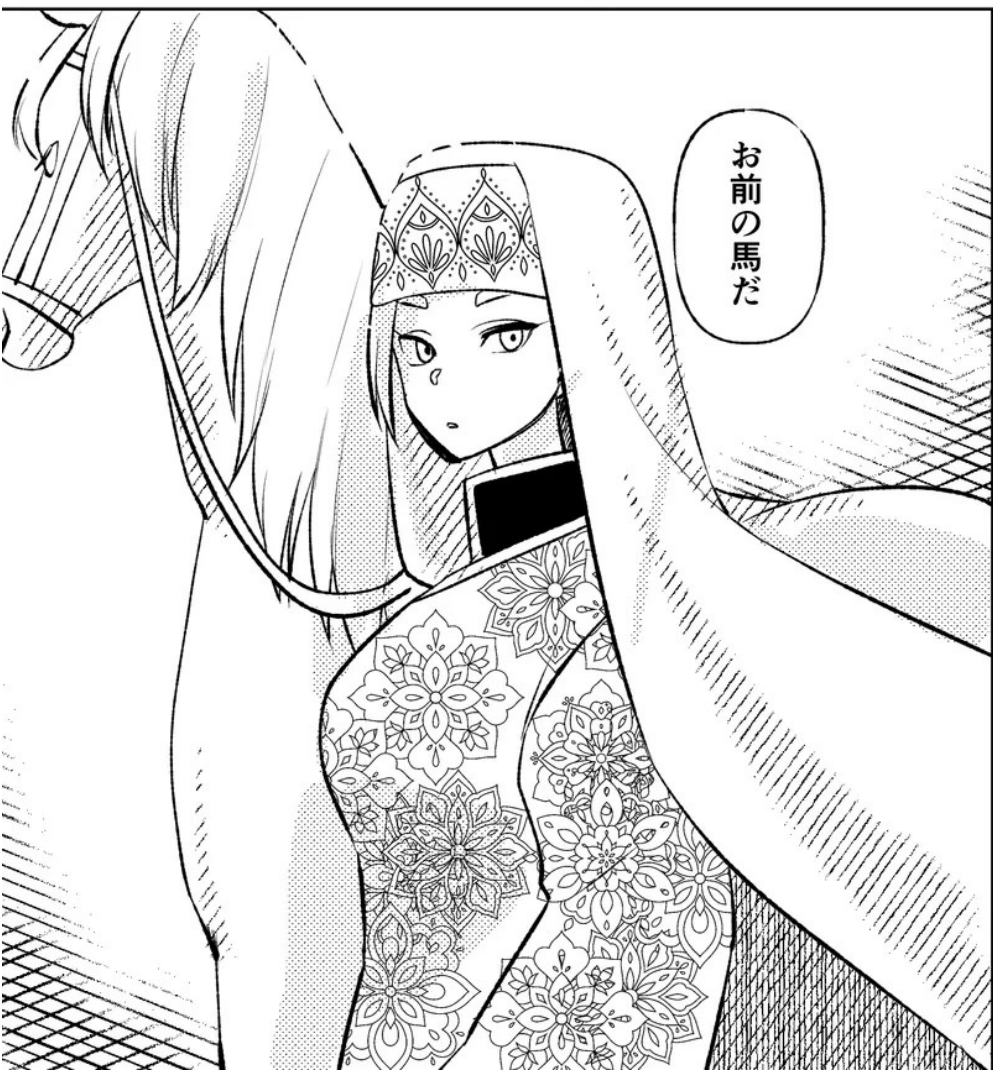
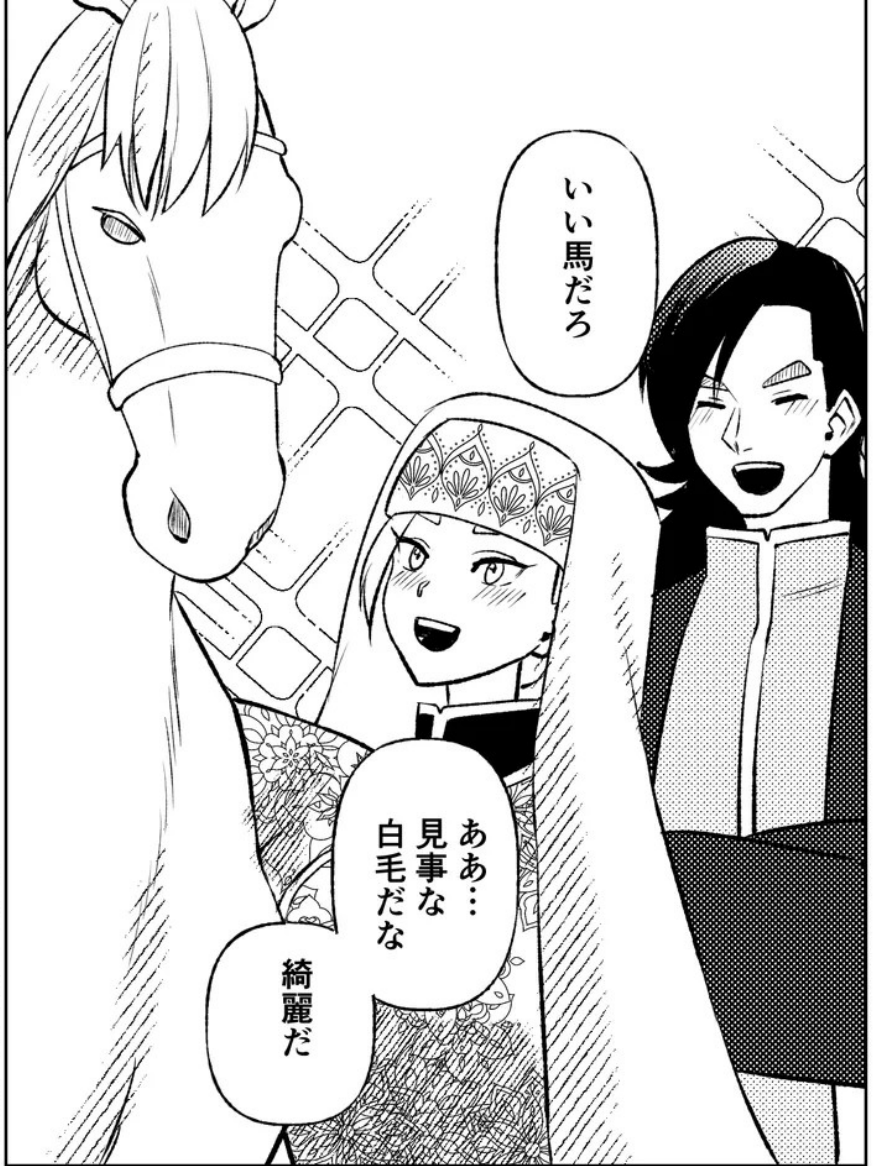
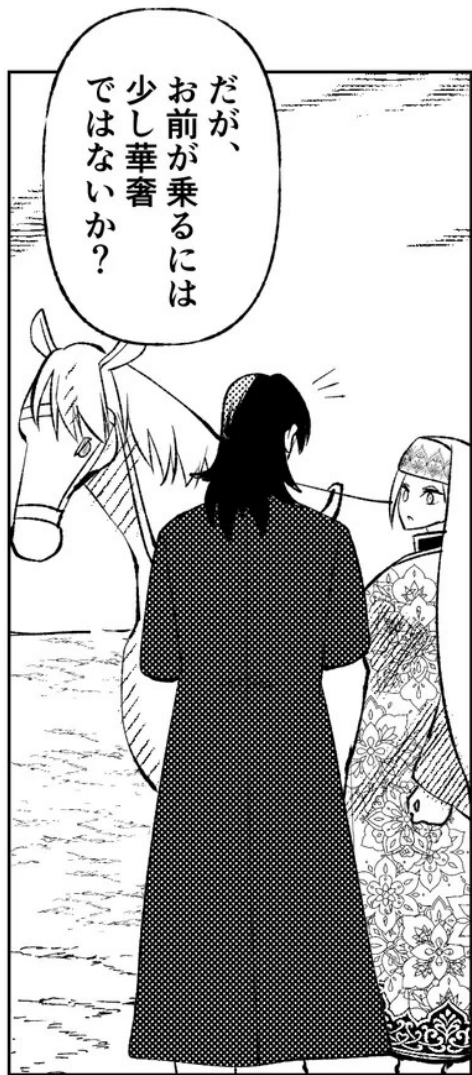
見せたいものが
届いた!

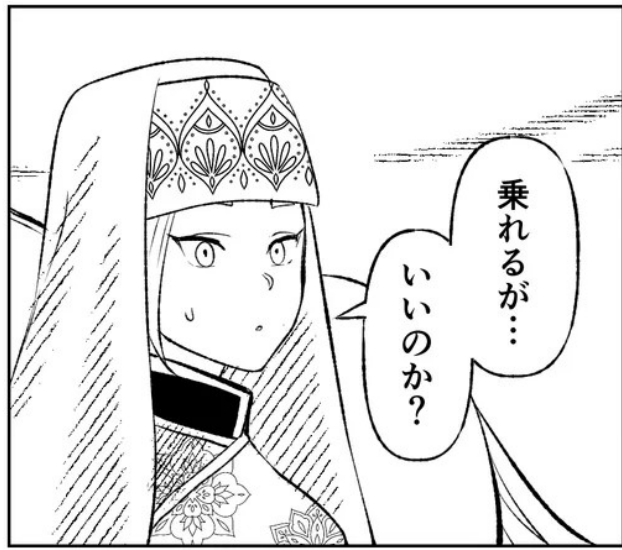
早く
支度して

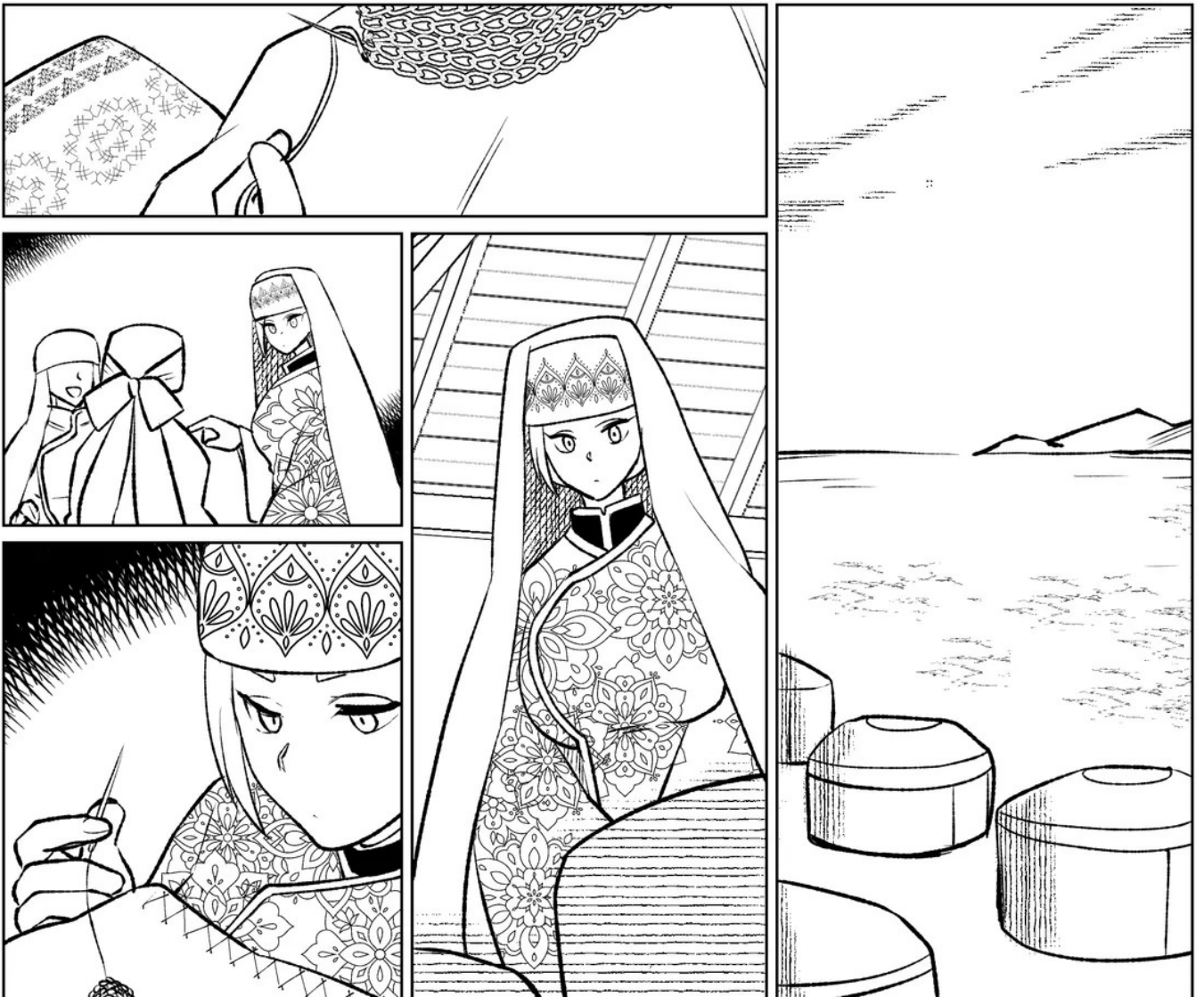
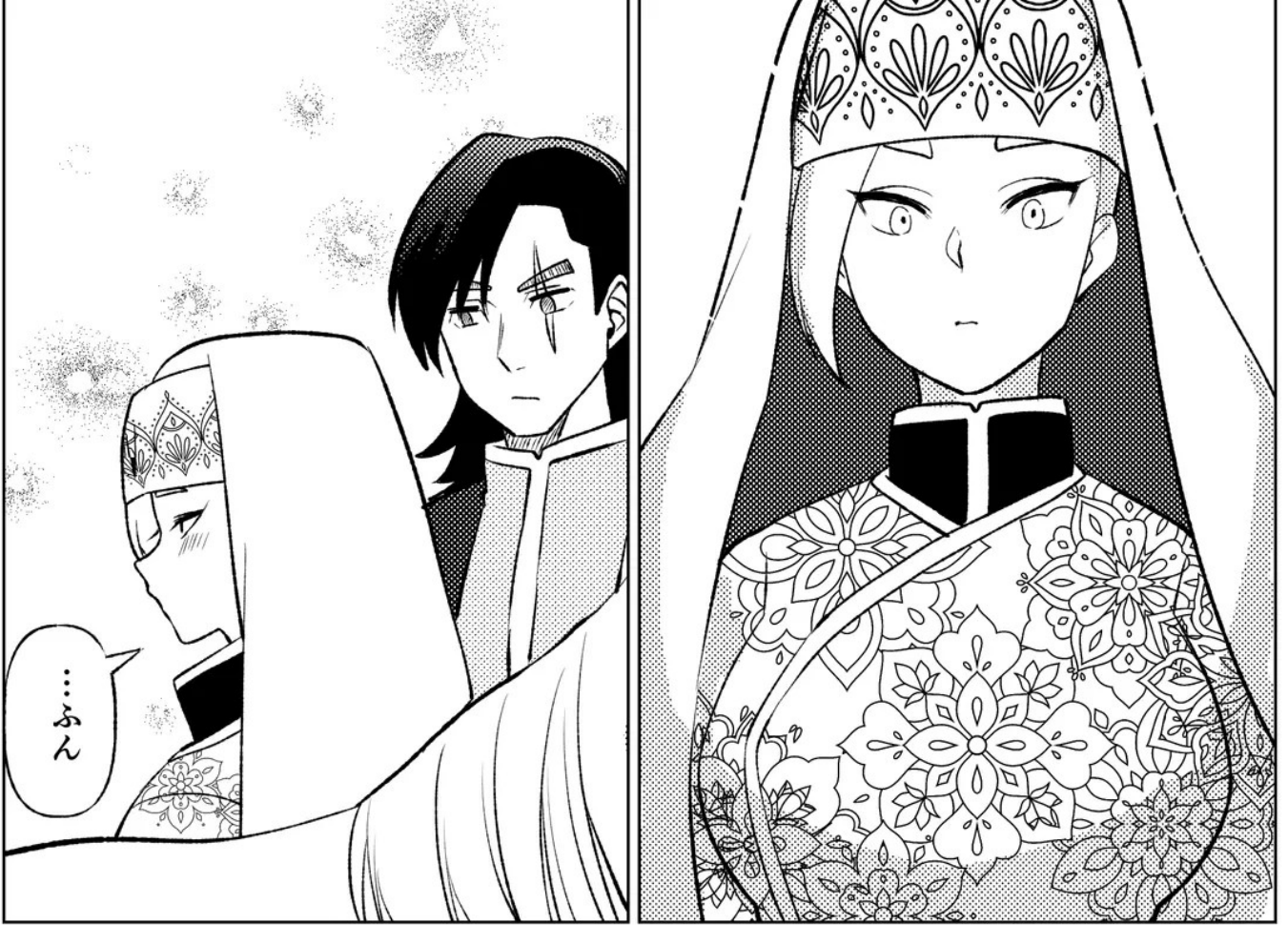
表に
来てくれ

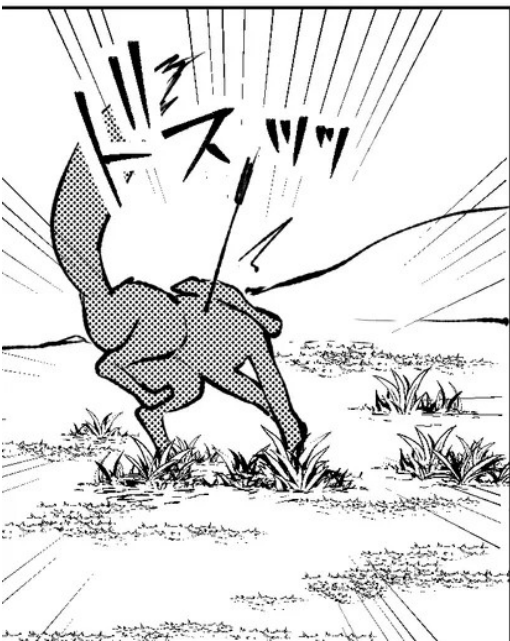
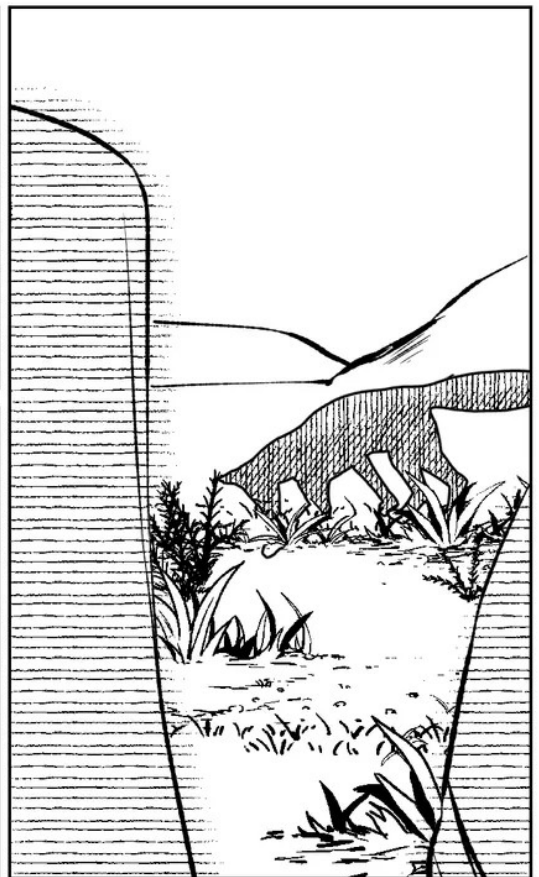
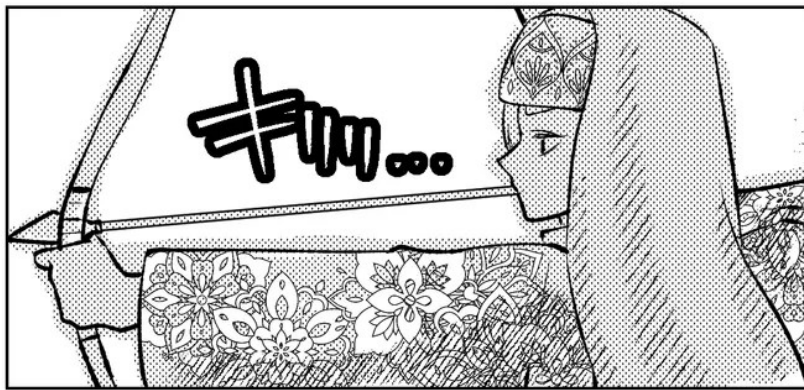
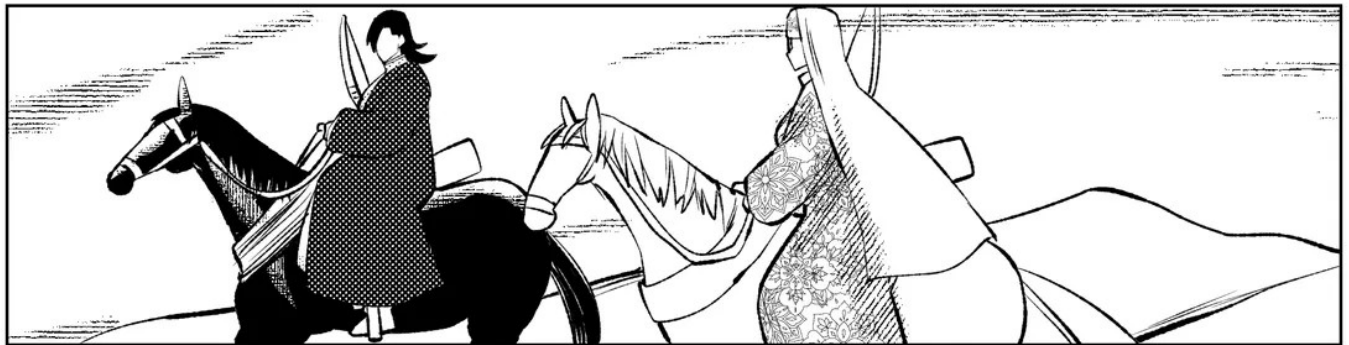
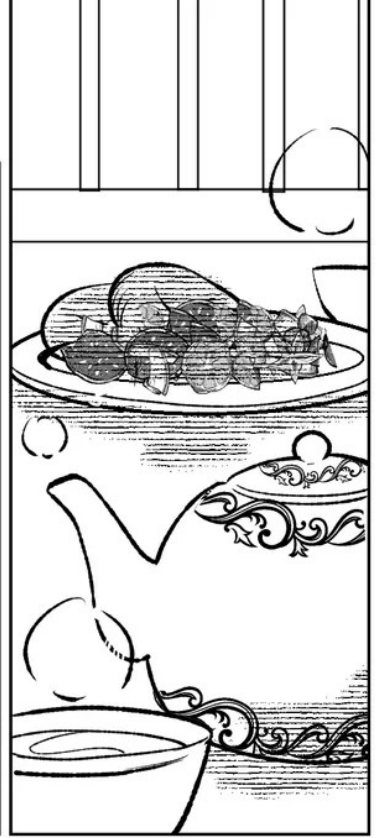
ブランカ!
起きたか!!

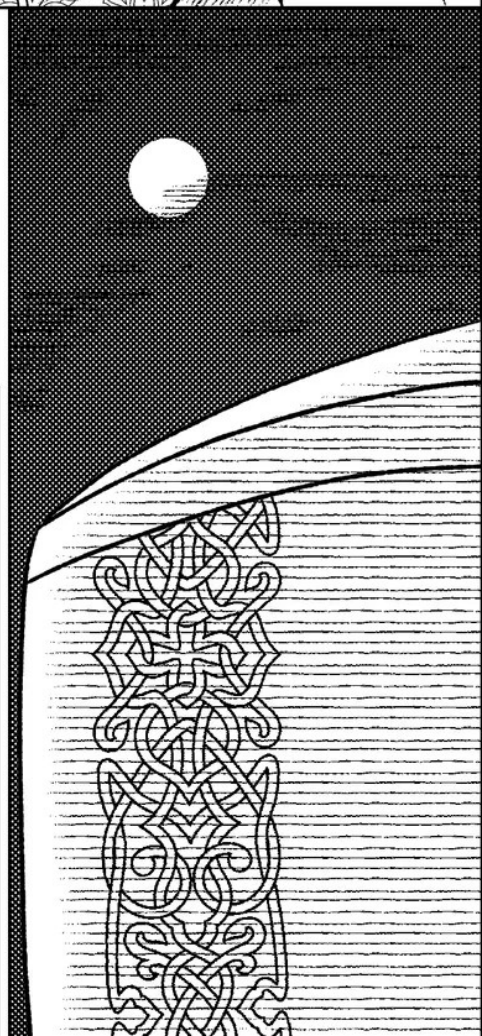
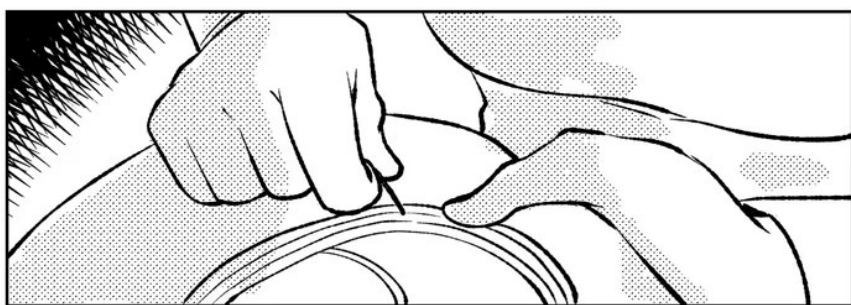
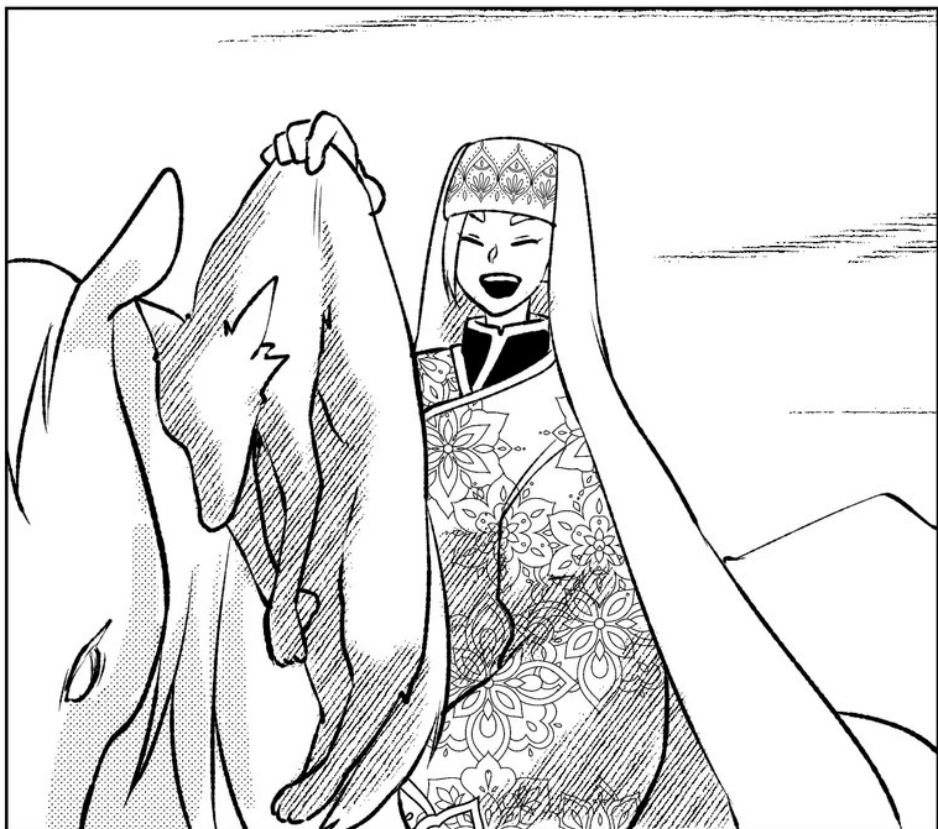


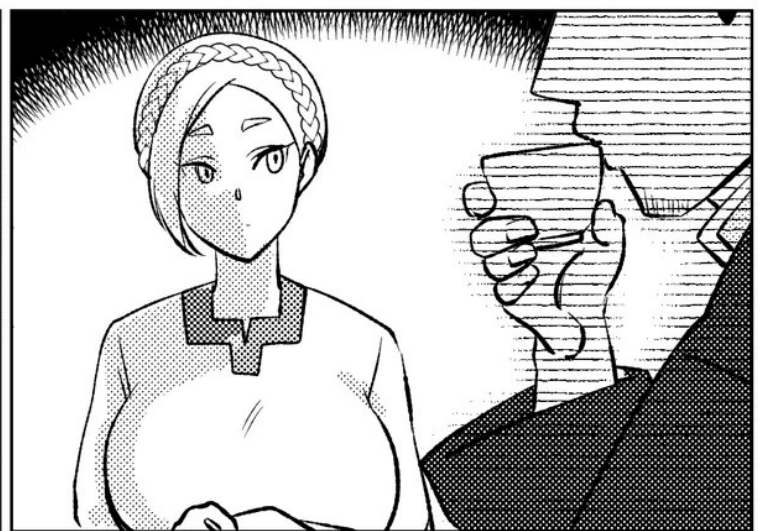














私の両親は
敵襲の際に
幼かった
私を庇って死んだ

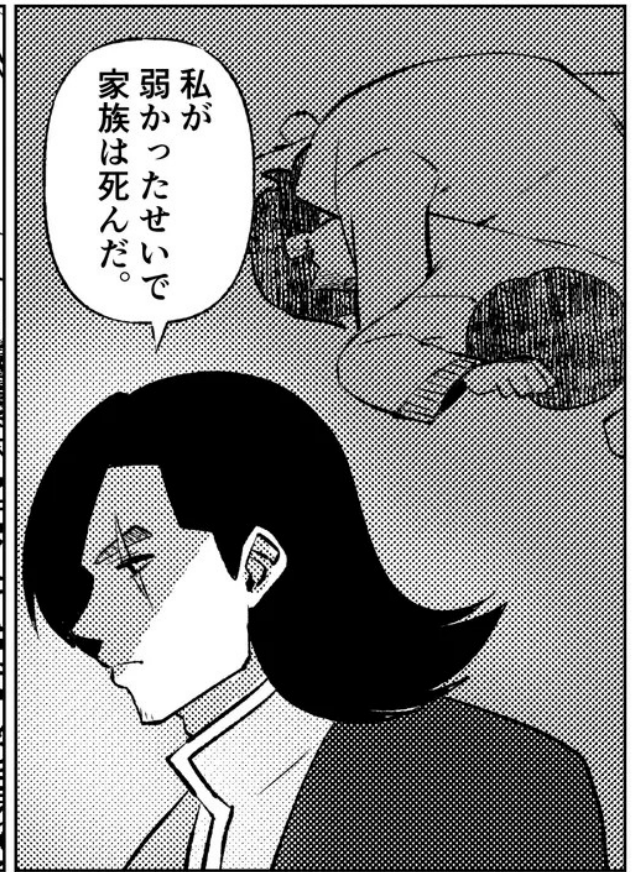


何故…か。
考えたことが
なかった。

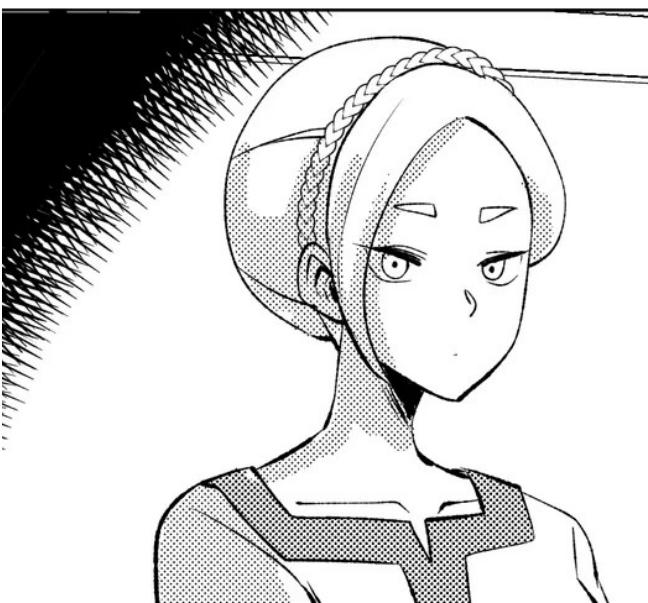


…子供の頃の
話だろう

…だとしても
事実だ

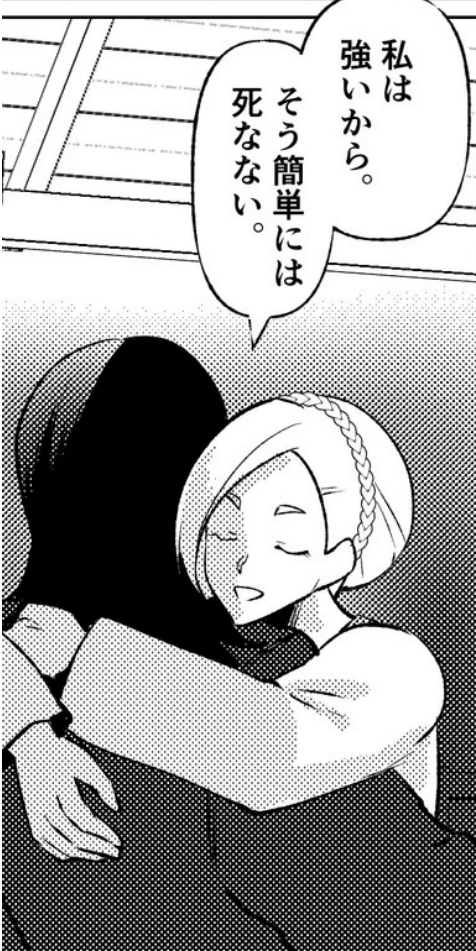
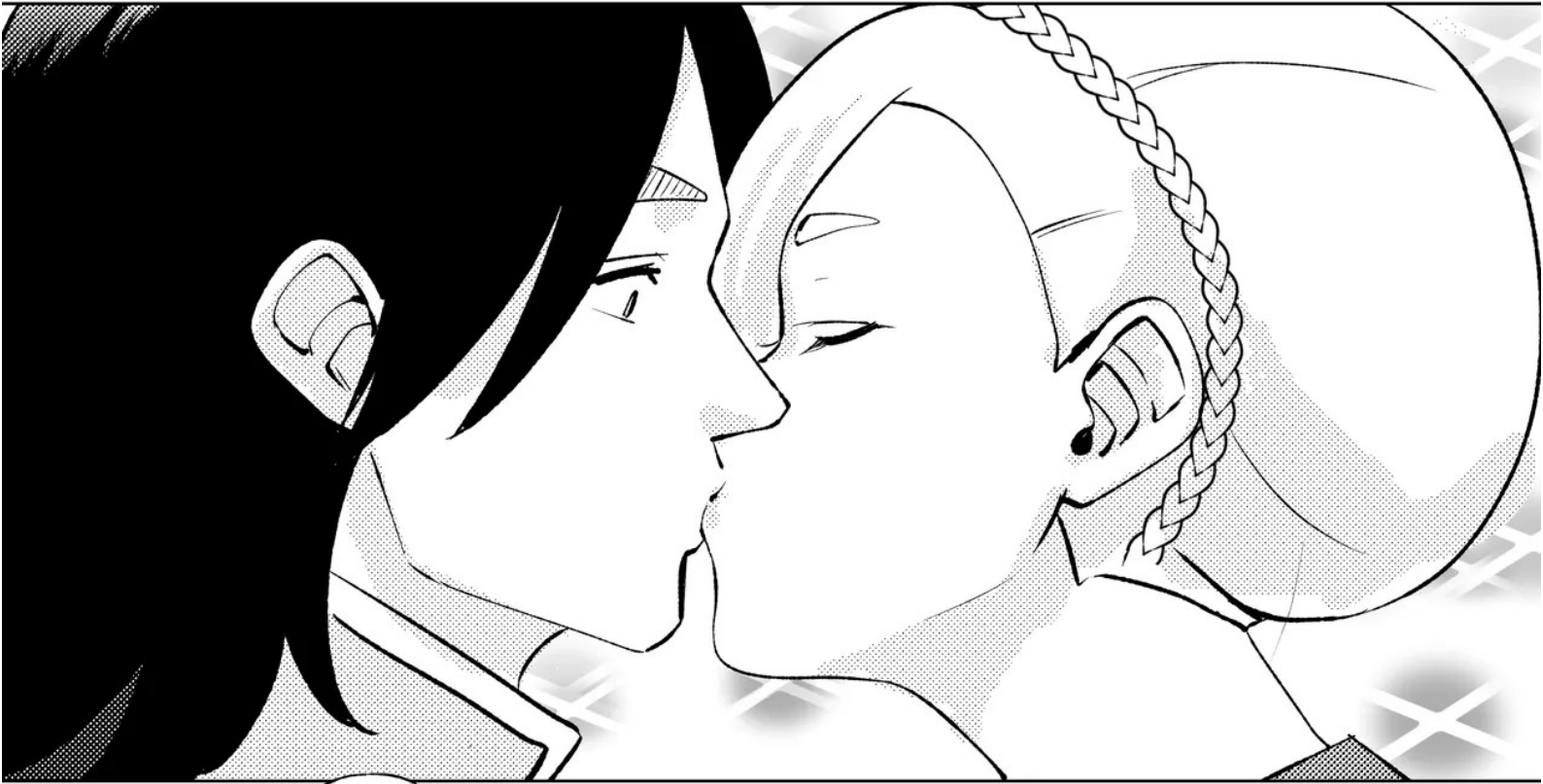


私が
弱かったせいで
家族は死んだ。



家族を
守れるほど
私は強く
なれたのか

自信がなかった
というのが
近いかもしれない。





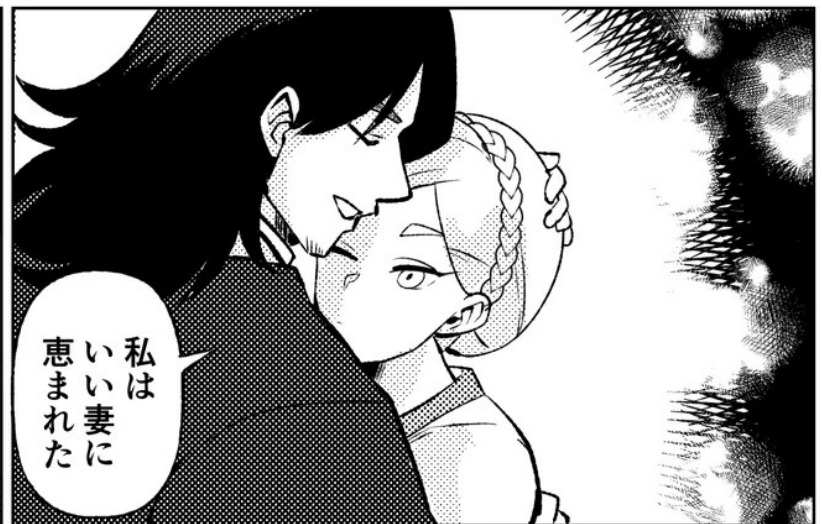
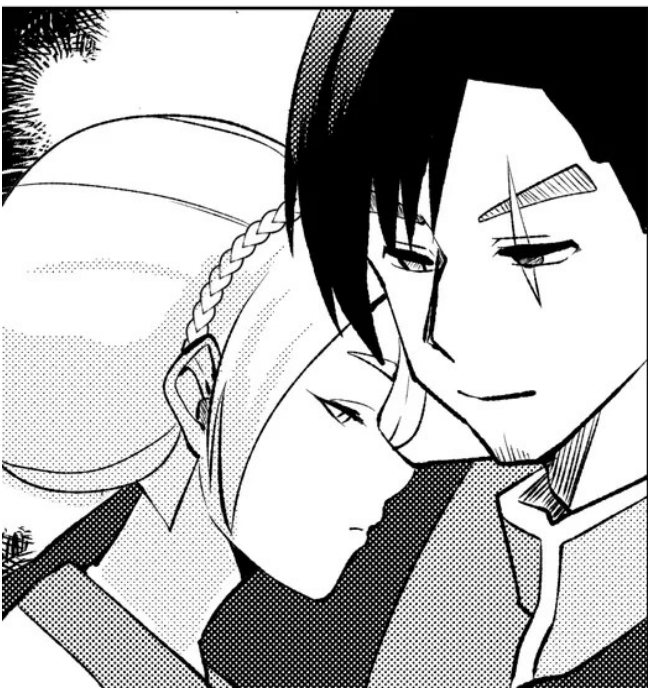
必要なら

私がお前を
守ってやる



…そうか

たのもしいな



私は
いい妻に
恵まれた





もうか?

アラクシ...

あ、もうっ

止めてやろうか?

そのままがいいか?

ほかつとめるなっ

うあつ
そのままっ
そのままあつ

たくさんほしいっ

アラクシがっ

たくさんっ

くれっ

お前をっ



ああ...
やる...
やる...

全部
お前の
ものだ...

お前
の
全部
を
盗
む

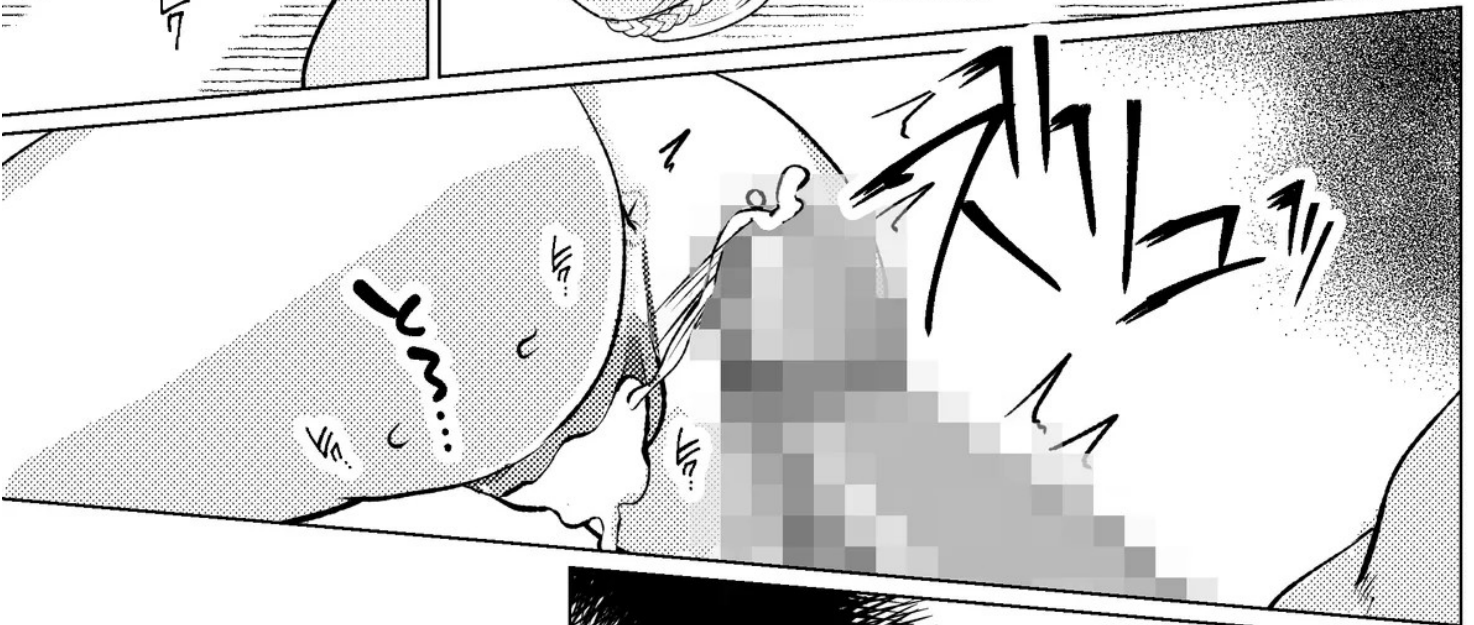
お前
の
全部
を
盗
む

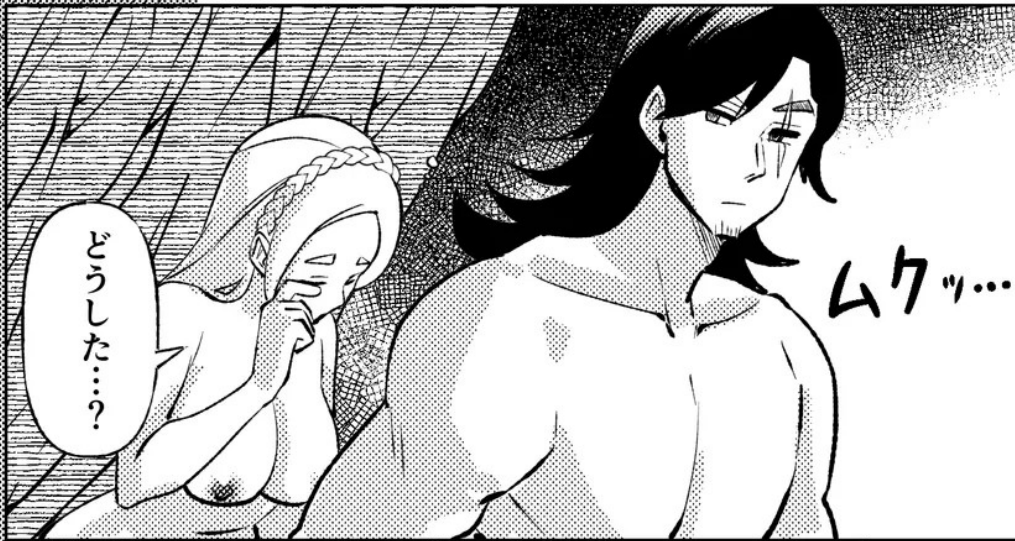
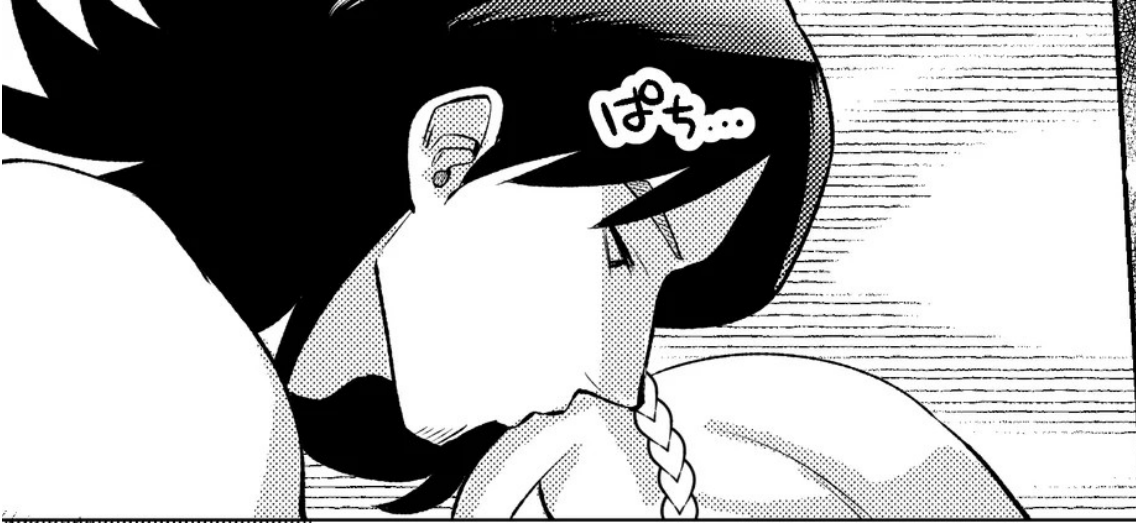
お前
の
全部
を
盗
む

お前
の
全部
を
盗
む

お前
の
全部
を
盗
む

お前
の
全部
を
盗
む





ムクッ...



サッ

サッ

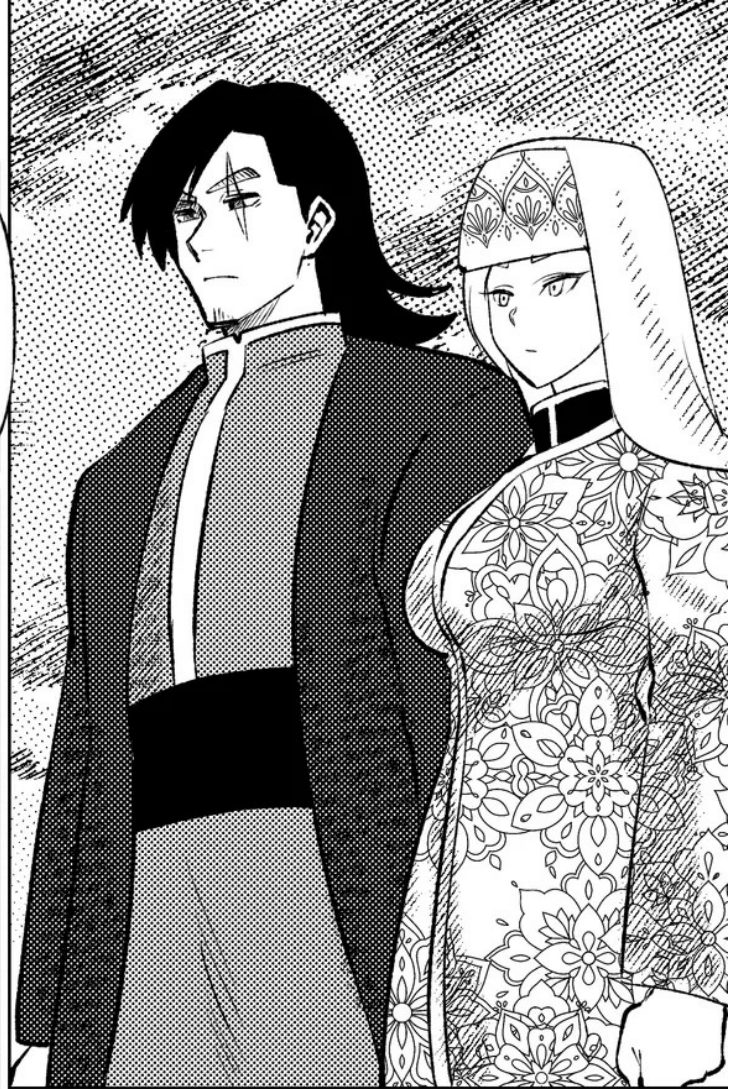


敵軍
総人数不明

軍備、
旗印からして…



ブランカ様
お国の兵と
思われます。



……
逃げ出そうと
していたところを
とらえました

お前の
侍女か…



だとしても
何故我々の
現在地が
特定できた…？

移動した
ばかりだぞ？



内通者が
情報を漏らして
いたものかと…



処遇
どう

蛮族の男の
慰み者にされて
幸せそうにして

本当に
おめでたい
女…

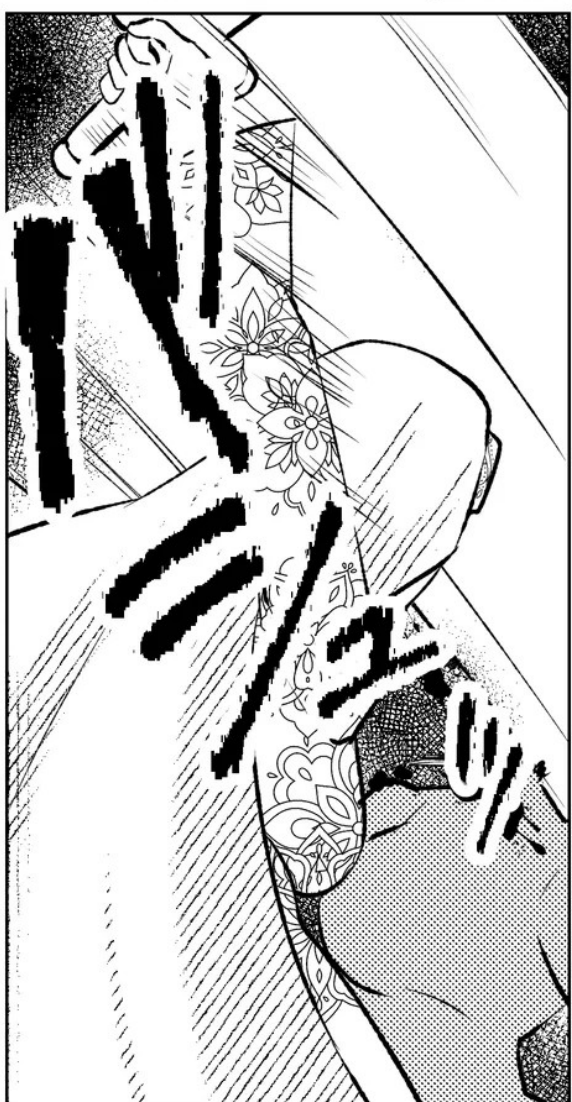
そのおかげで
私は殿下の
お目にとまったの
私にしか
出来ない任務を
頼みたいって

これで私は
未来の王妃よ

貴女が
北方への
進軍を止めて
王太子殿下の足を
引っ張ってくれた
ことには
礼を言うわ

侍女の精査が
足りなかったか

私の手落ち
だな



すぐに殿下が
私を迎えに
来てくださるわ

ほら何を
しているの

早くこの縄を
ほどきなさい
無礼な蛮ぞ…

…いいのか。
殺してしまったって

うちの
王家の男に
伝わる術に

関係を結んだ女の
いる位置を
常に特定する
外法がある。

これは対象が
生きている
限り続いてしまう。

殺すしか
手はない。

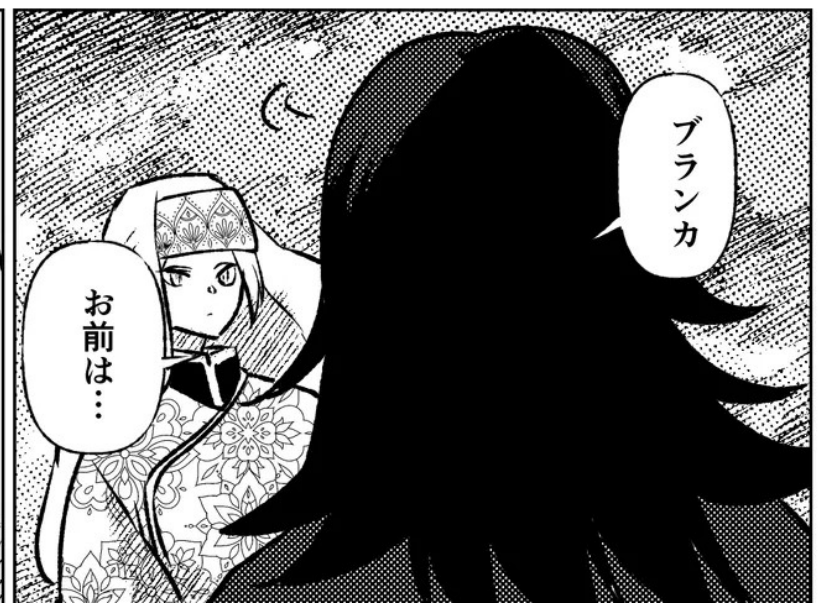
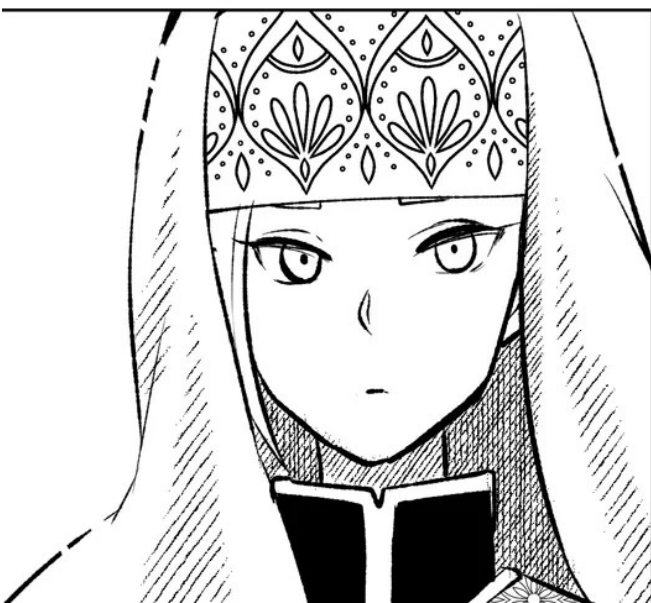
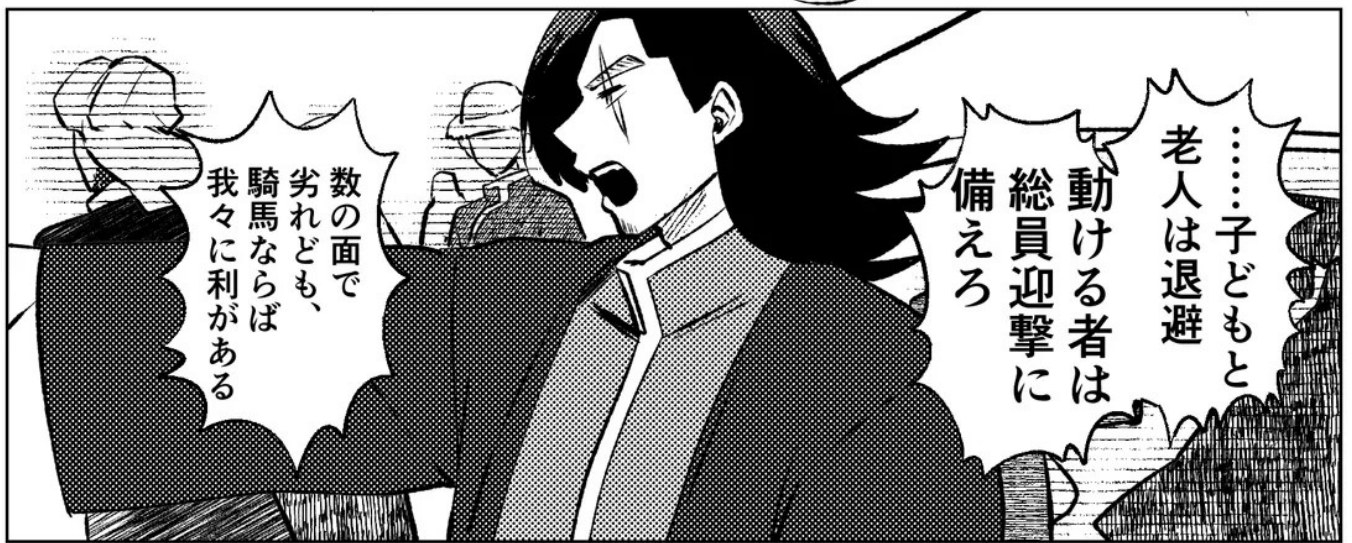
大方
兄の甘言を
鵜呑みに
したのでだろうが、

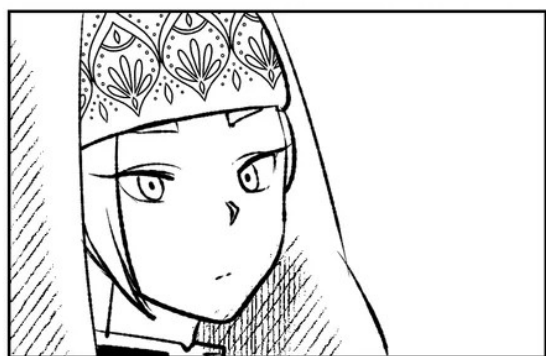
私につけられる
侍女風情が
王妃になど
なれるわけが
ないだろう

人質としての
価値もない

王妃になれる
幻想に
浸ったまま

殺してやるのが
慈悲だ



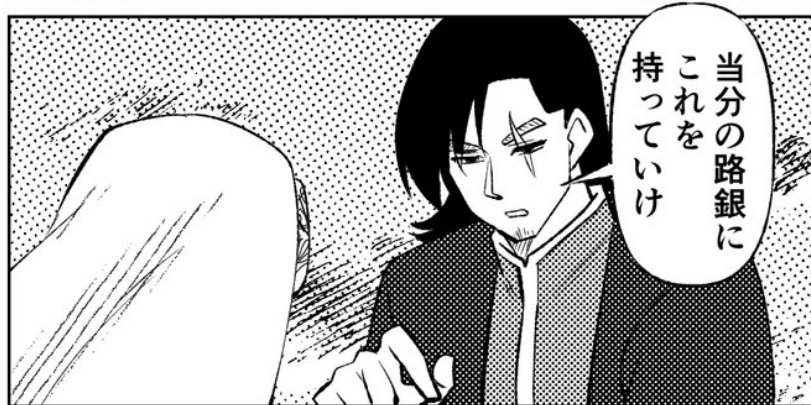




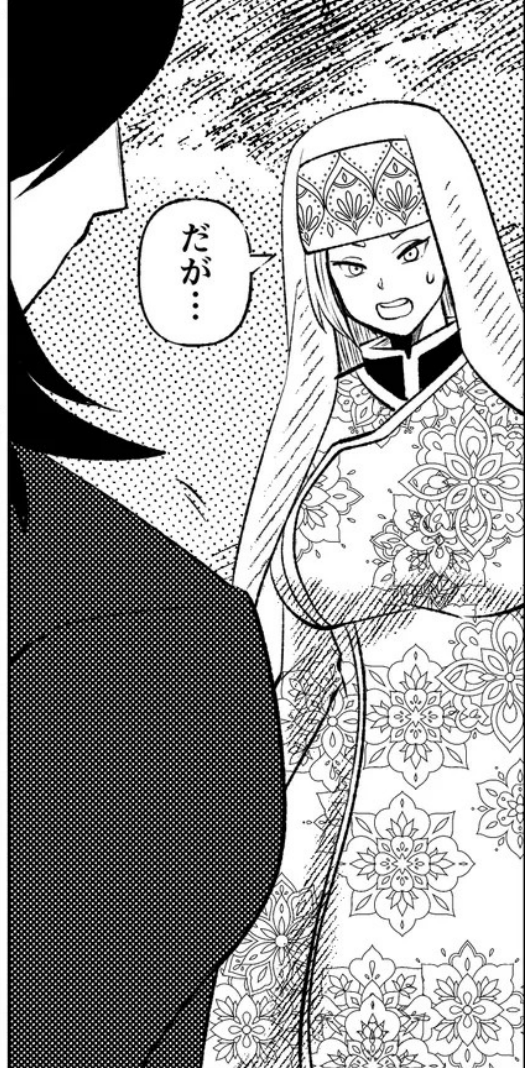
敵の目的が
お前なら
投降すれば
お前は助かるだろう

お前の腹には
私たちの子が
いるかもしれぬ

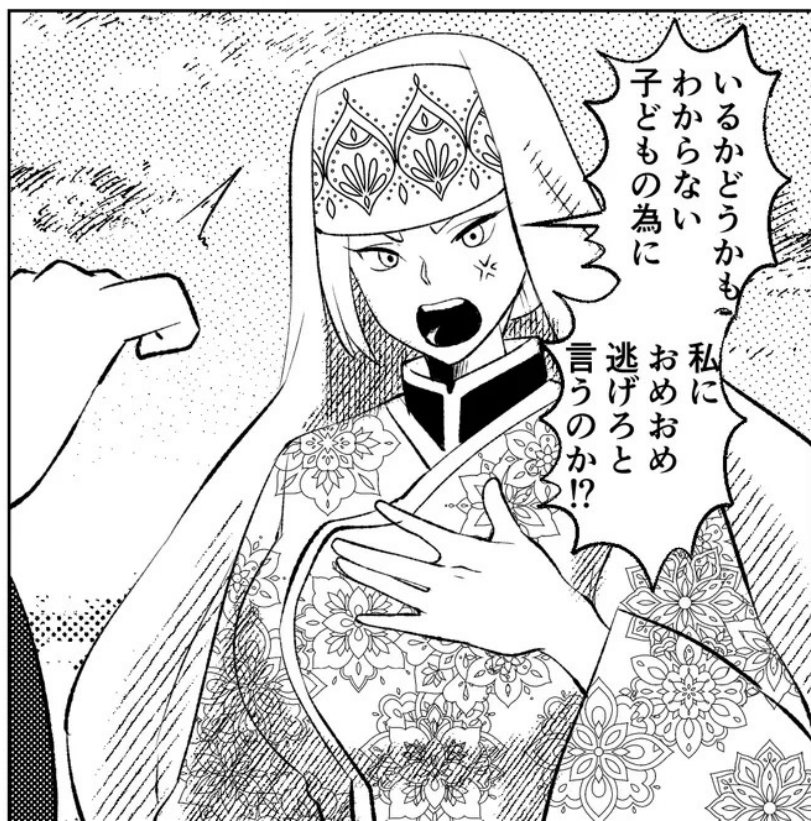
だが、
腹の子は
確実に殺される。



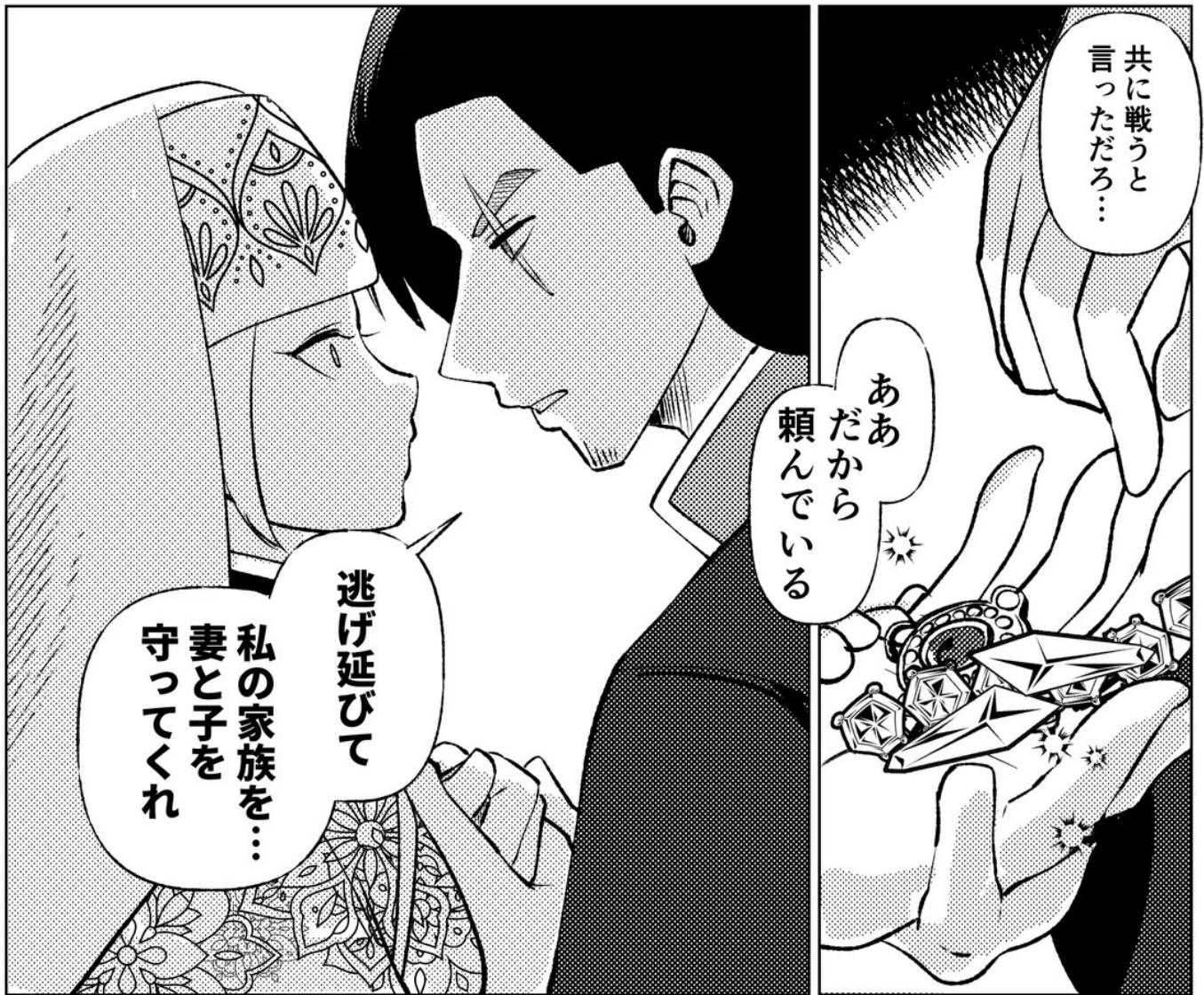
当分の路銀に
これを
持っていけ



だが…



いるかどうかも
わからない
子どもの為に
私に
おめおめ
逃げろと
言うのか!?



共に戦うと
言っただろ…

ああ
だから
頼んでいる

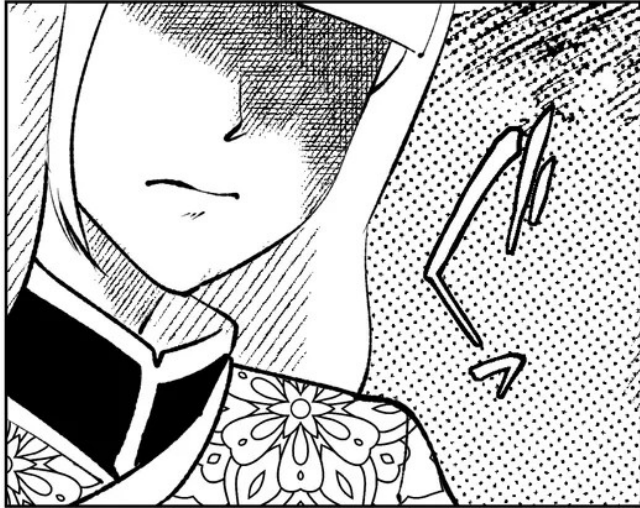
逃げ延びて
私の家族を…
妻と子を
守ってくれ



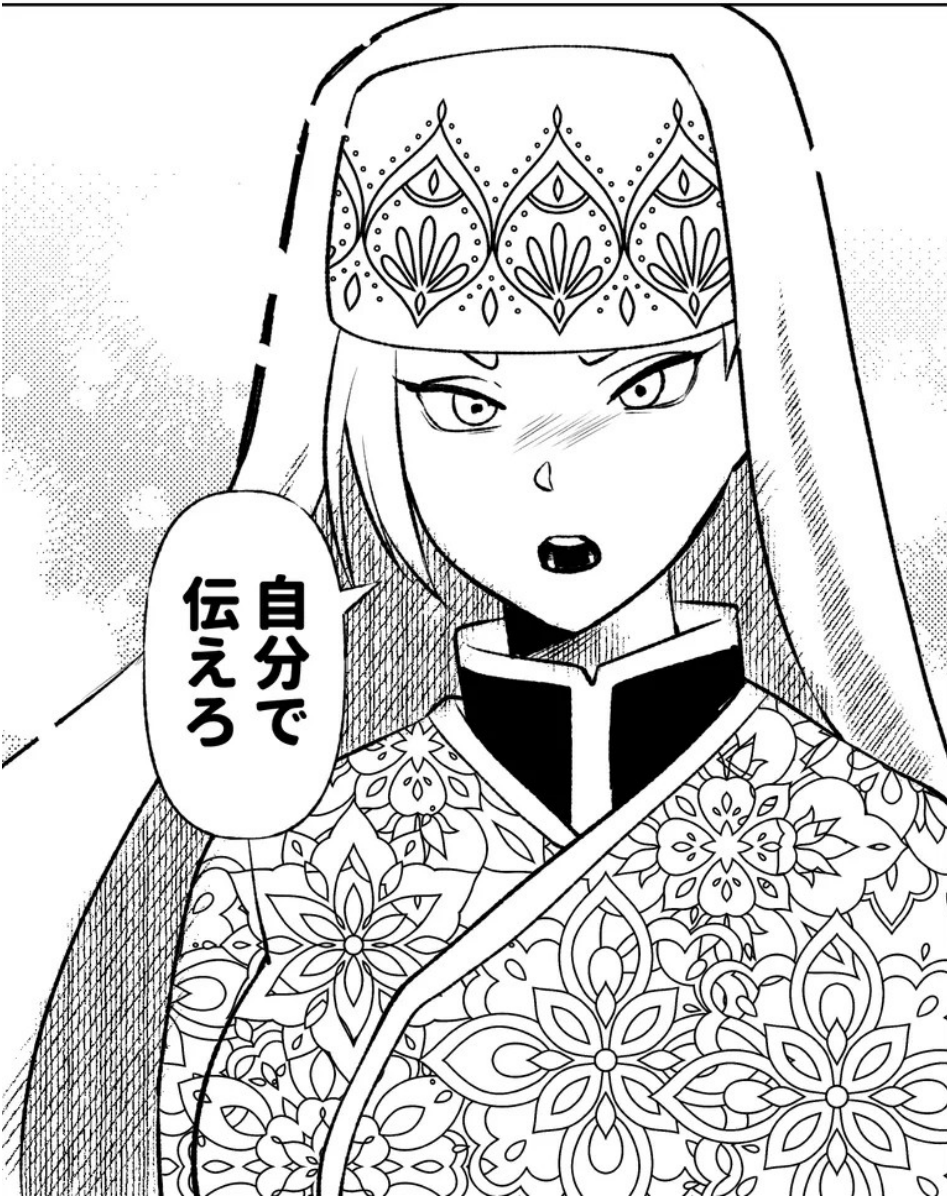
これは
お前にしか
頼めない

生き延びられたなら、
必ず迎えに行く

もし…
私がないままに
子が生まれたら



父はお前と
お前の母を
とても
愛していたと
伝えて欲しい



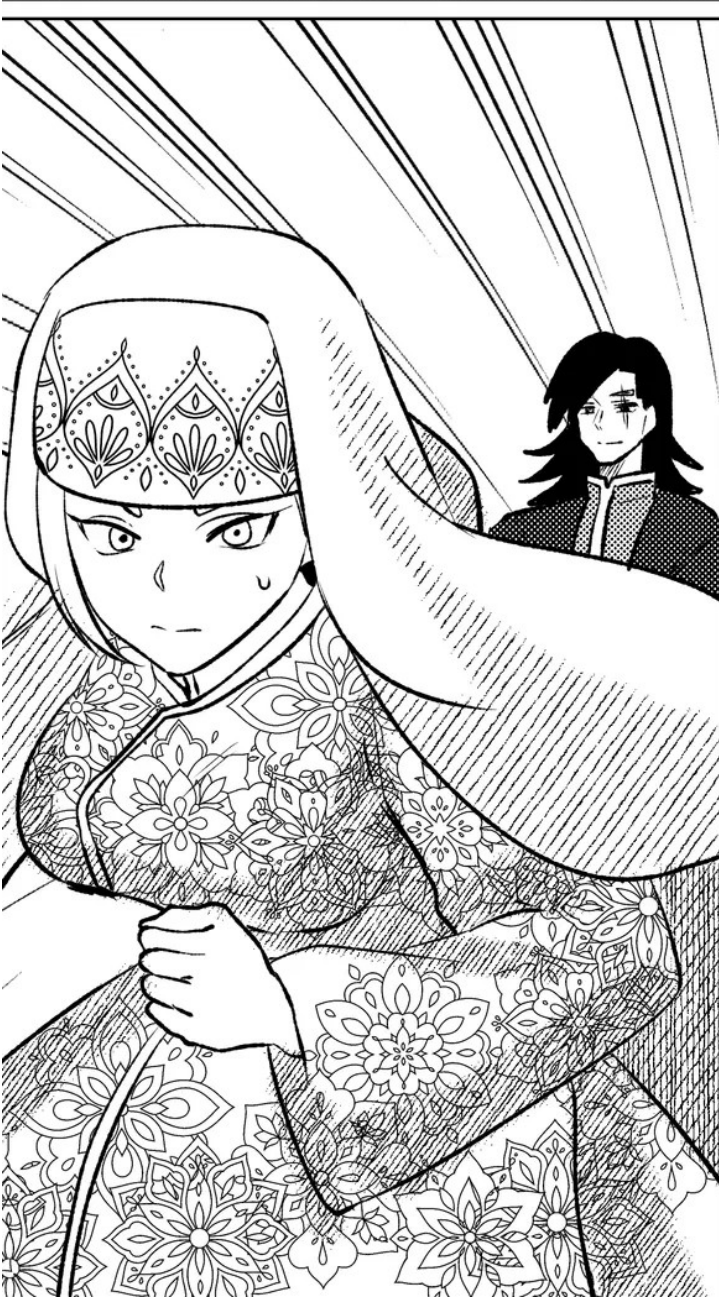
自分で
伝えろ



断る



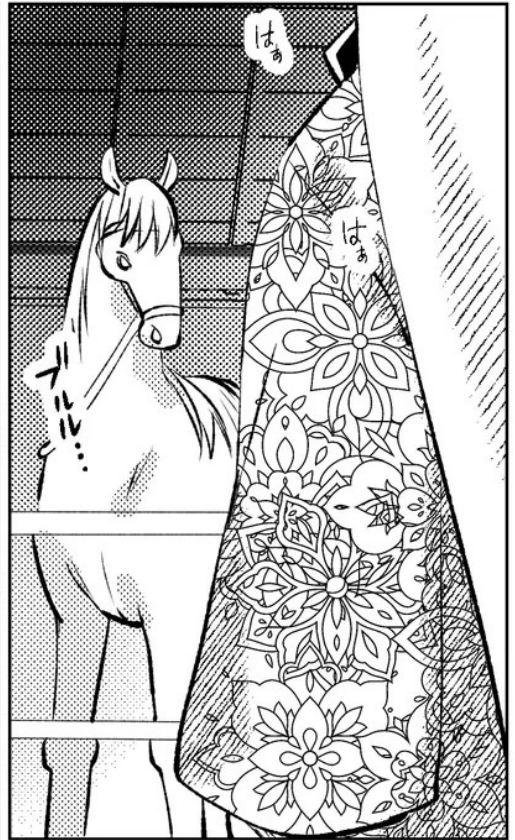
いい女だな
本当にお前は

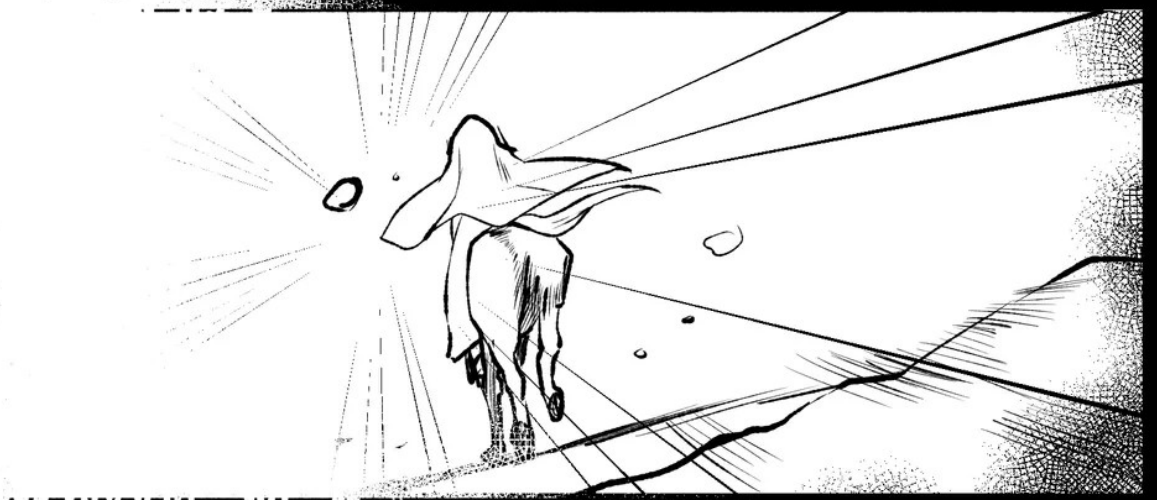


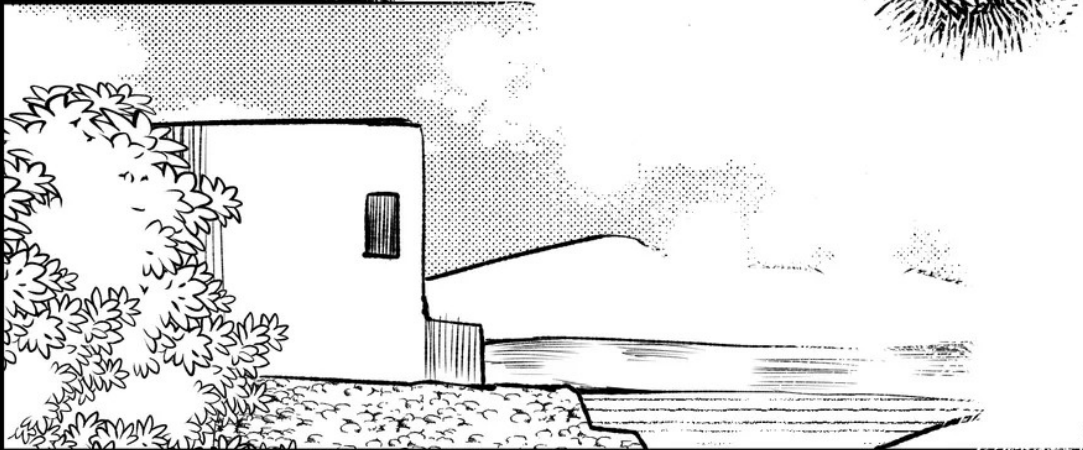
南へ迎え



交易が盛んだから
北方系の見た目でも
目立ちにくいはずだ







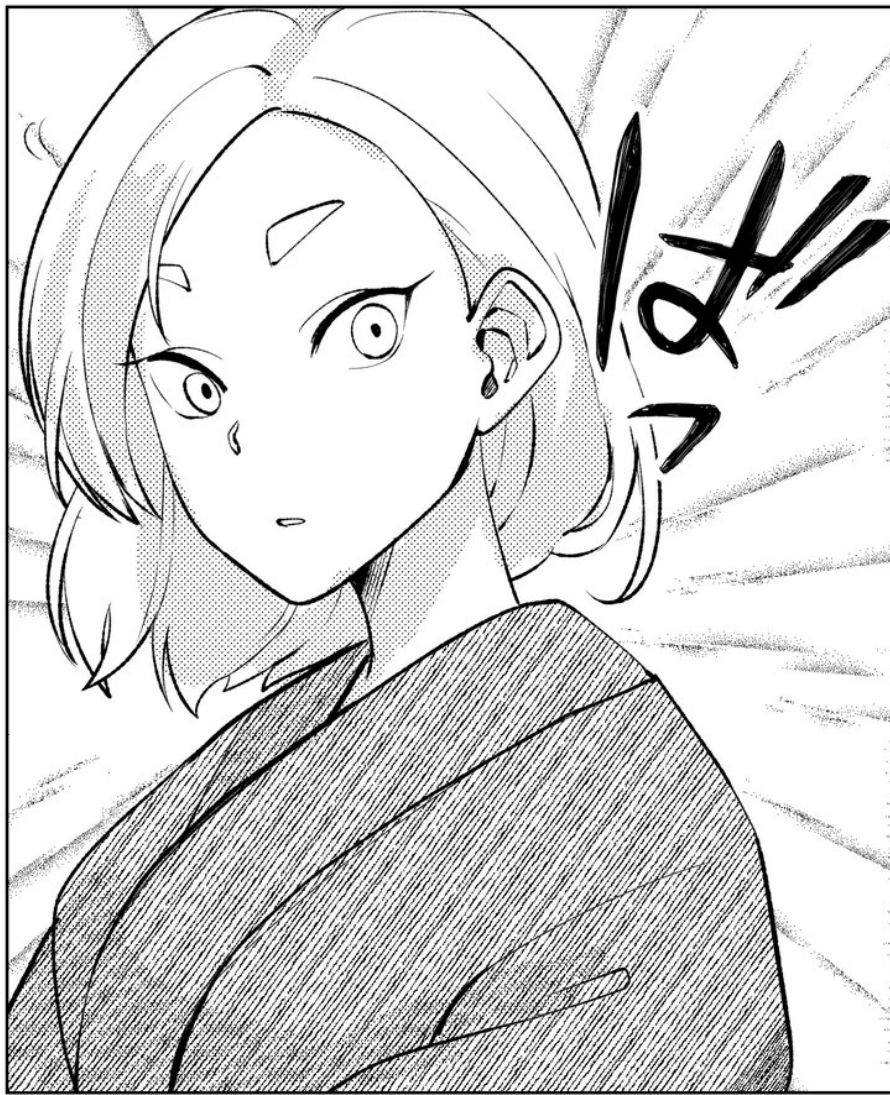
長い
白金の髪の
北方女？

さあ：
この辺にも
何人かいるけど
そういうのは
知らないね

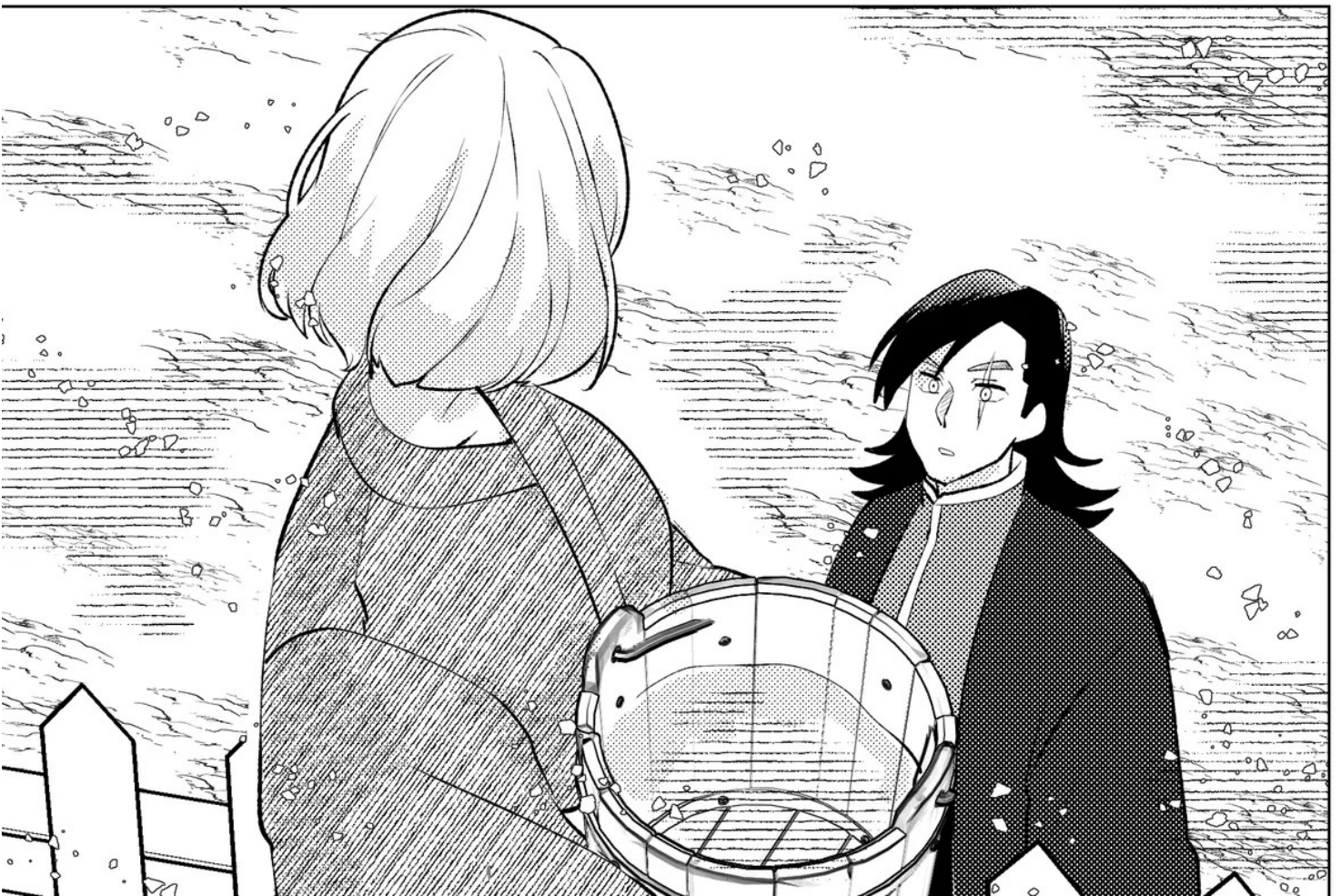
ちょうど
その先の家に
住んでるのも
北方人の女だよ。

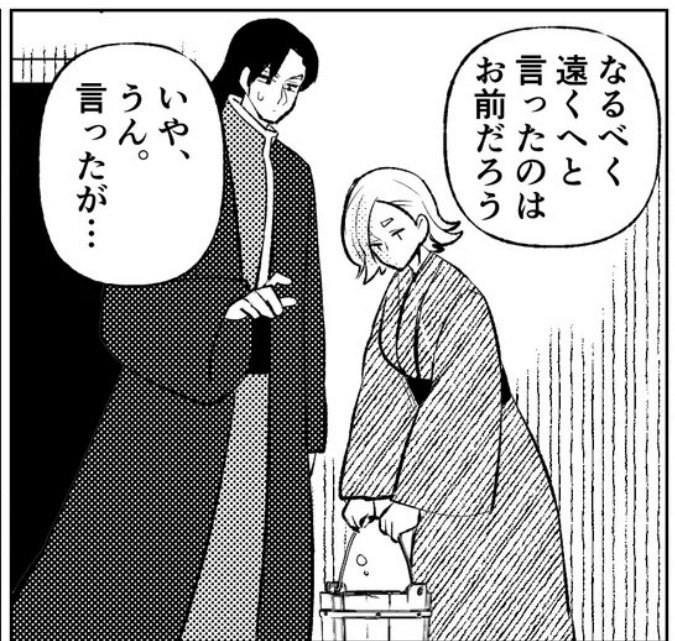
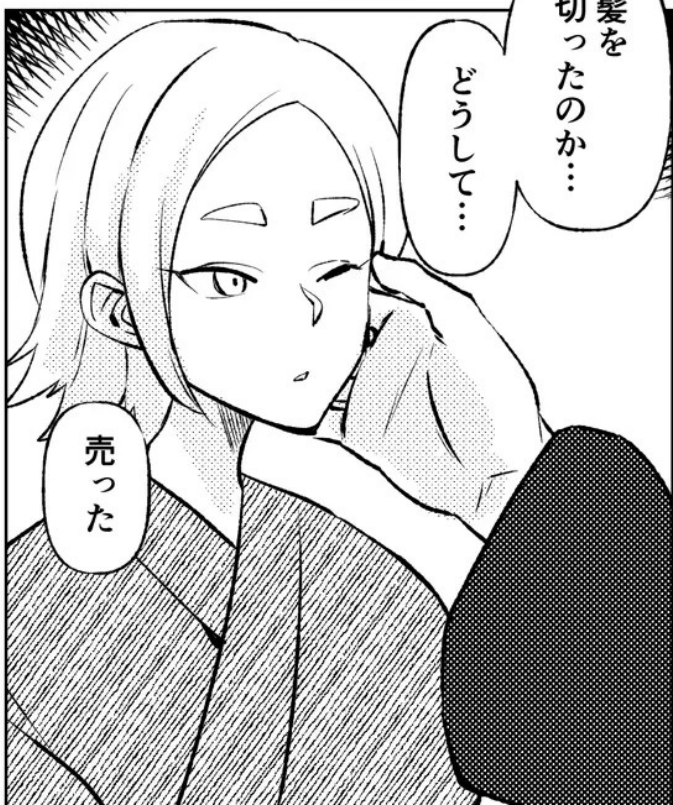
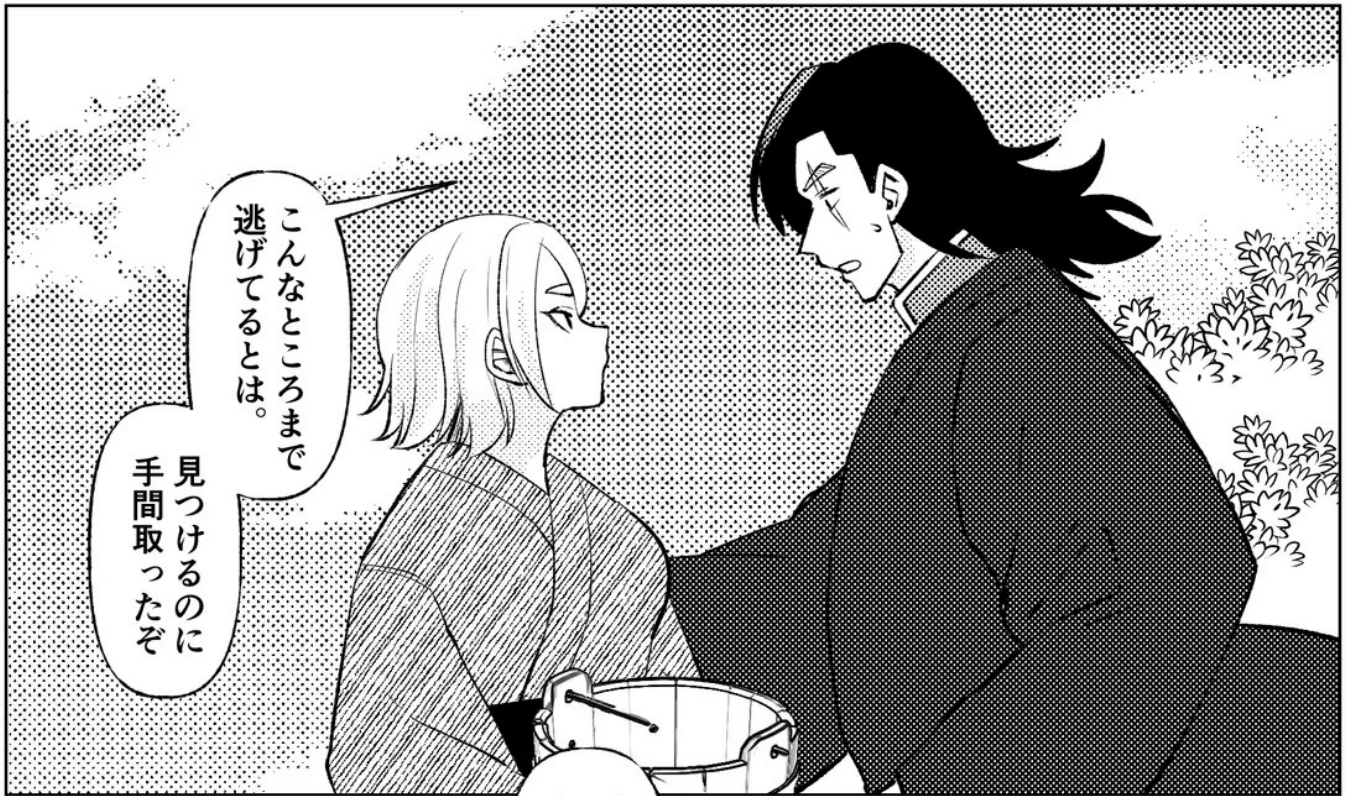
同郷同士何か
知ってるかも
しれない。
訊いてみたら
どうだい

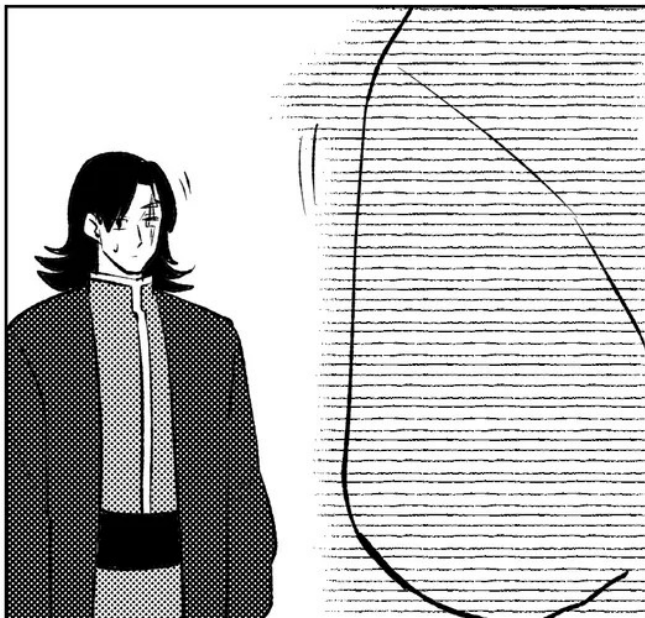
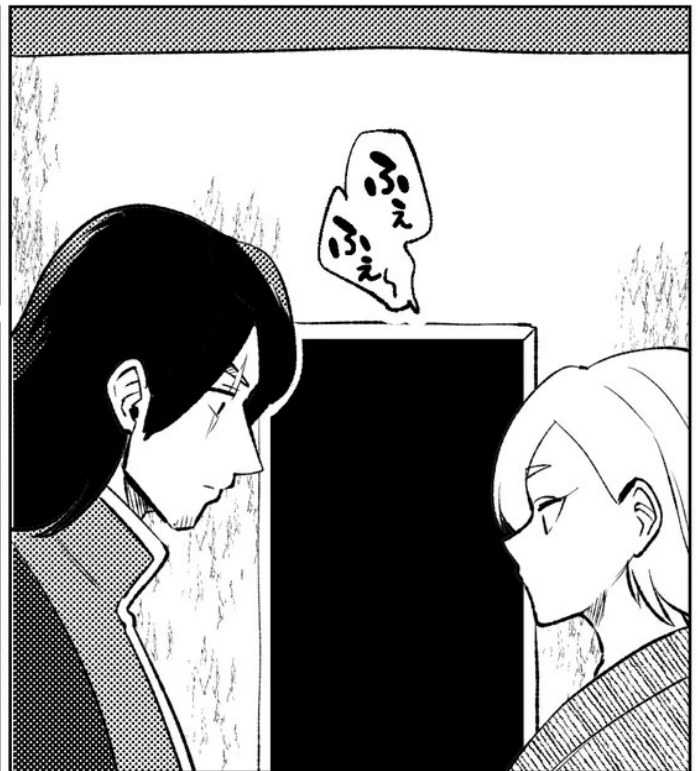
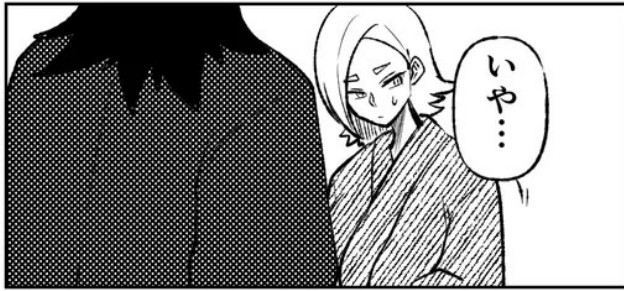
すまない
人を探して
いるんだが：

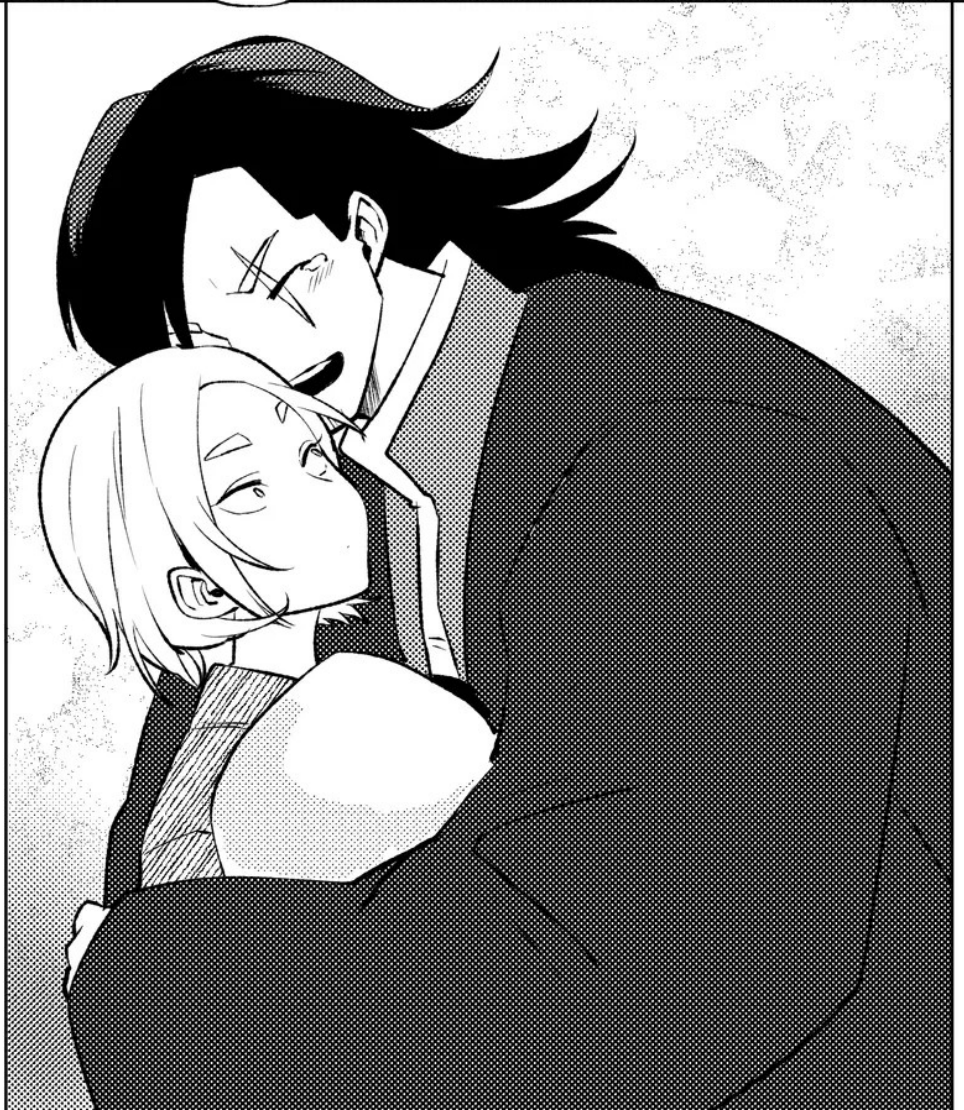
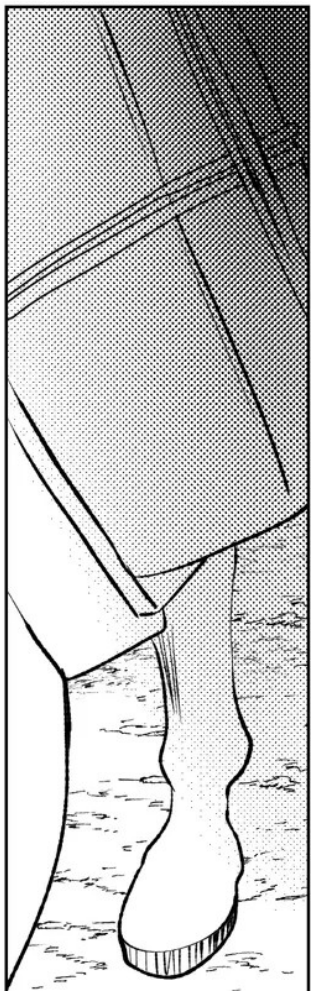


このあたりで
貴女と
似た色の髪の
北方人の女を
見たことは
ないか？











自分で乗れる…

赤ん坊抱えてか？
危ないだろう

…ようやく元通りだな

ああ。
ようやく次に進める



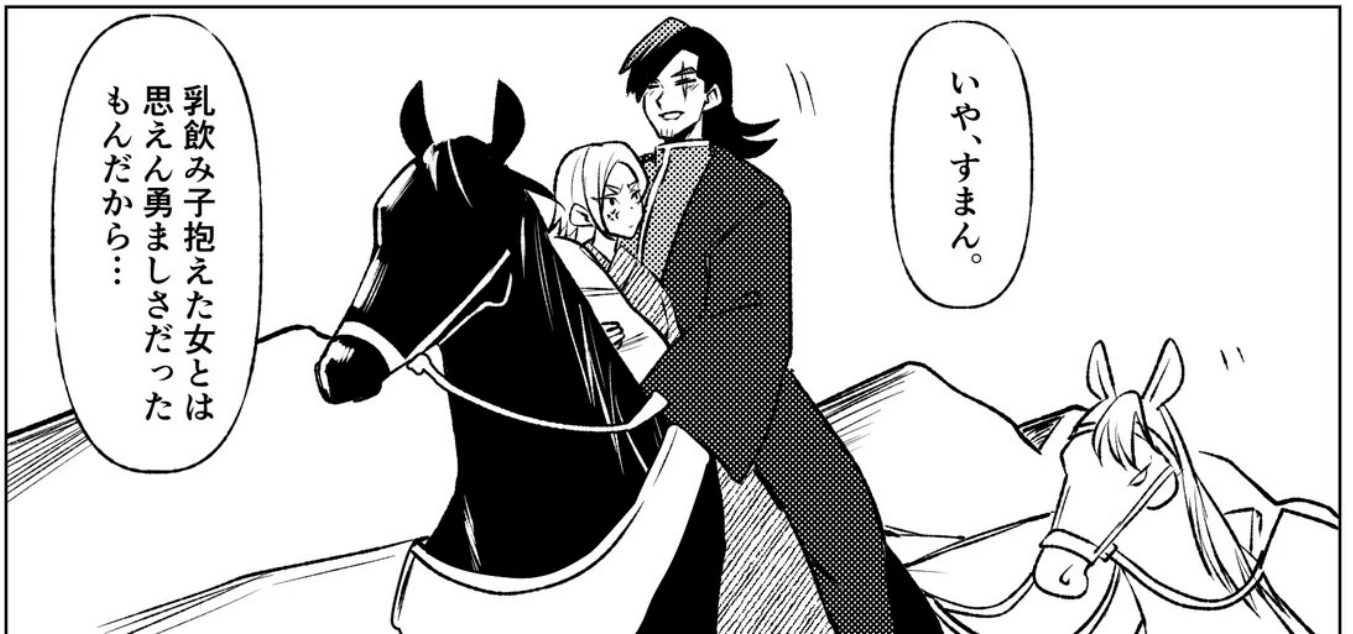
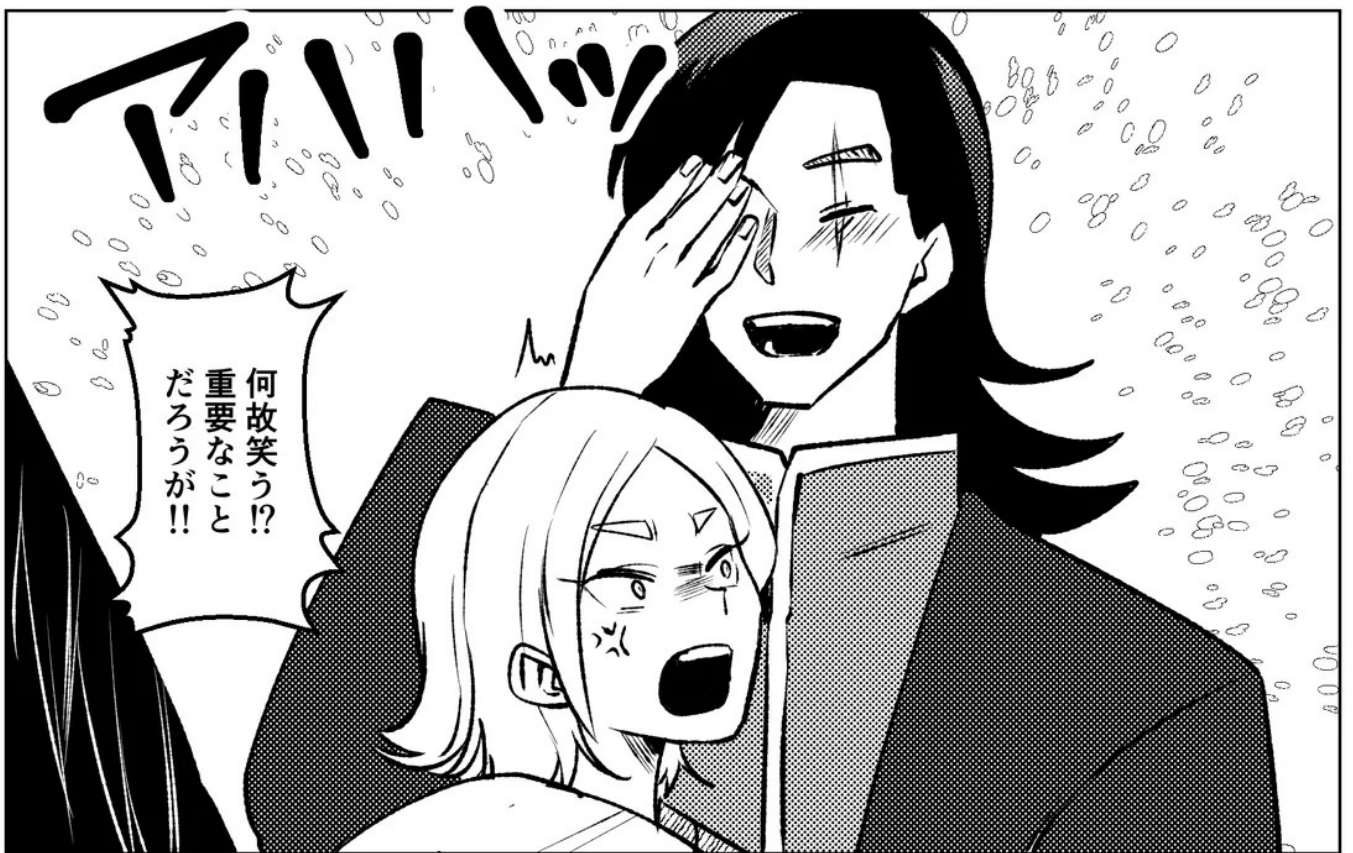
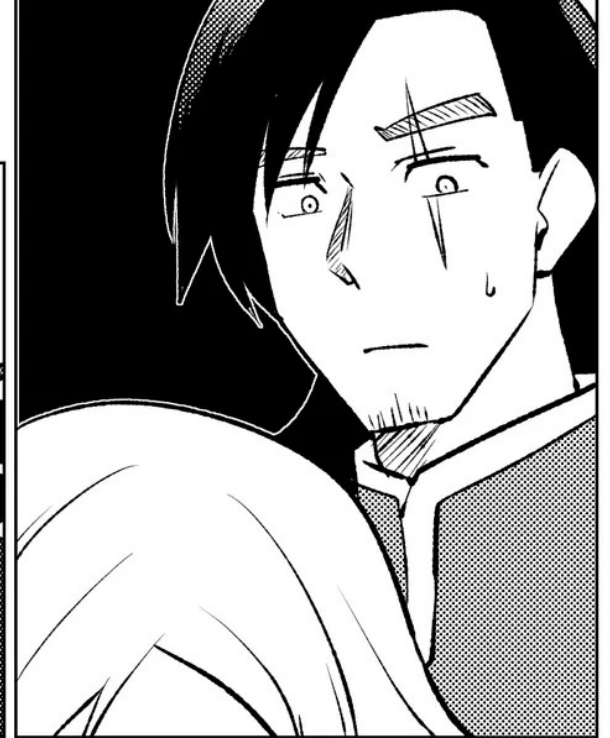
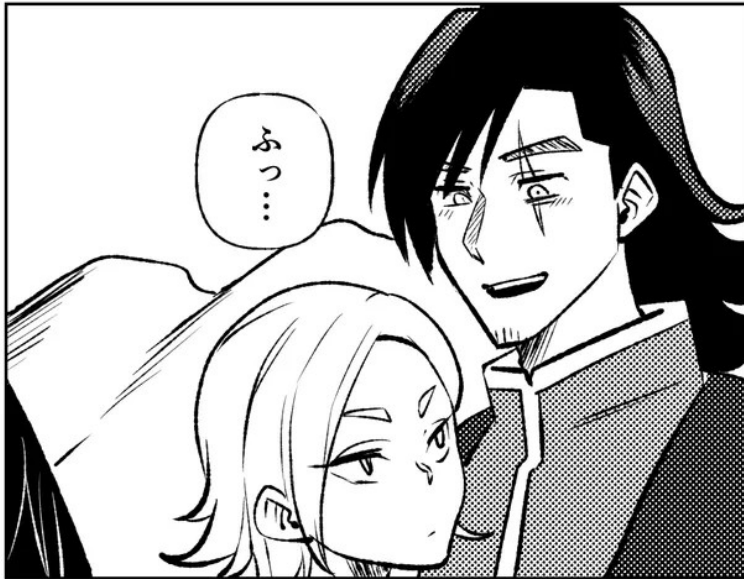
…次？

決まってるだろう



私をここまでコケにしてくれた

クソ父とクソ兄の首を取る



よし。
それでこそ
我が妻だ。
やられたままではな

当たり前だ。

私と私の夫を
生かしておいたことを
後悔させてやる

